

秋田県文化財調査報告書第245集

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV

—冷水山根遺跡・寒沢II遺跡—

1994・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

# 曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV

— ひやみすやまね さびざわ  
冷水山根遺跡・寒沢II遺跡 —

1 9 9 4 • 3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県には豊かな自然のもとに先人たちが築きあげた歴史があり、埋蔵文化財もその歴史遺産のひとつであります。それは現代に生きる私たちに託されたものであり、そこなうことなく未来へと伝えていくべきものであります。

このたび曲田地区農免農道整備事業で路線の一部が冷水山根遺跡および寒沢II遺跡を通過することになりました。そのため本教育委員会は工事に先立って発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することになりました。

その結果、冷水山根遺跡では縄文時代の竪穴住居跡をはじめとする遺構群が発見され、台地に広がる集落跡の一部が明らかになりました。また寒沢II遺跡では台地に暮らした縄文時代の人々が不要になった生活用具を捨てた場所が見つかり、当時の豊かな生活の一部が明らかになりました。

本書はこの成果をまとめたものであります、文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力下さった秋田県農政部北秋田農林事務所・大館市教育委員会・比内町教育委員会ならびに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

秋田県教育委員会

教育長 橋本顕信

## 例　　言

- 1 本書は曲田地区農免農道整備事業に係る冷水山根遺跡・寒沢II遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 冷水山根遺跡の発掘調査は平成5年4月19日～6月1日、寒沢II遺跡の発掘調査は同年6月2日～8月31日まで実施した。
- 3 本書の編集・執筆は五十嵐一治が行い、長澤和則の協力を得た。
- 4 付録「花粉分析および植物珪酸体分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社による分析報告書である。
- 5 本報告書挿図中に使用した土層表記法は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1989年版』を使用した。
- 6 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行25,000分の1「扇田」「十二所」、秋田県農政部北秋田農林事務所作製500分の1工事計画図である。

## 凡　　例

- 1 本報告書に収載した遺跡実測図に付した方位は国家座標第X系による座標北を示す。冷水山根遺跡と寒沢II遺跡は約150m離れて隣接し、冷水山根遺跡のグリッド杭打設原点(MA50)とした秋田県農政部北秋田農林事務所の工事用杭I P13における座標北と磁北との偏角は西偏12°4'58"である。
- 2 本報告書で各遺構に付している略記号は以下の通りである。

S I (竪穴住居跡)	S N (屋外炉)	S K F (プラスコ状土坑)
S K (土坑)	S X (性格不明土坑)	
- 3 本報告書では縄文時代の生活用具(土器・石器・土製品・石製品等)を捨てた場所を「土器捨て場」と記述している。出土遺物の数量比から「土器」という語句を冠しているものであり、「土器だけが特に密集して出土する場所」ということではない。
- 4 土層記号は基本層位にローマ数字を用いた。
- 5 挿図中に使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



土器付着炭火物



石器の擦痕・磨痕



剥片石器の自然面



石器の凹み部・敲打面



炉石の被火熱部位・埋土中の焼土



地山

## 目 次

序	1
例言・凡例	2
はじめに	4
遺跡の立地と環境	6
《冷水山根遺跡》	
第1章 調査の概要	12
第1節 遺跡の概観	12
第2節 調査の方法	12
第3節 発掘調査の経過	13
第2章 調査の記録	15
第1節 遺跡の基本土層	15
第2節 検出遺構と出土遺物	15
第3節 遺構外出土遺物	29
第3章 まとめ	35
《寒沢II遺跡》	
第1章 調査の概要	38
第1節 遺跡の概観	38
第2節 調査の方法	38
第3節 発掘調査の経過	39
第2章 調査の記録	41
第1節 遺跡の基本土層	41
第2節 検出遺構と出土遺物	44
第3節 遺構外出土遺物	46
第3章 分類・考察	99
第4章 まとめ	106
付録 花粉分析および植物珪酸体分析	109
第1節 冷水山根遺跡	110
第2節 寒沢II遺跡	112
写真図版	

## はじめに

### 調査に至る経過

曲田地区農免農道は大館市曲田・中山両地区の農業合理化を目的とした曲田字沢口から中山字兎沢に至る全長約3.3kmの道路である。

本農道の計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、県農政部北秋田農林事務所は文化財保護法に基づきこの事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導の依頼をした。秋田県教育委員会はこれを受けて平成元年度から3年度にかけて計画路線内の遺跡分布調査を実施し、路線内に係る埋蔵文化財包蔵地および包蔵地と推測される地区は7ヶ所であり今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成2年度には家ノ後遺跡と上聖遺跡の範囲確認調査を実施した。

平成3年度には家ノ後遺跡と上聖遺跡の発掘調査を実施し、野沢岱遺跡の範囲確認調査を実施した。

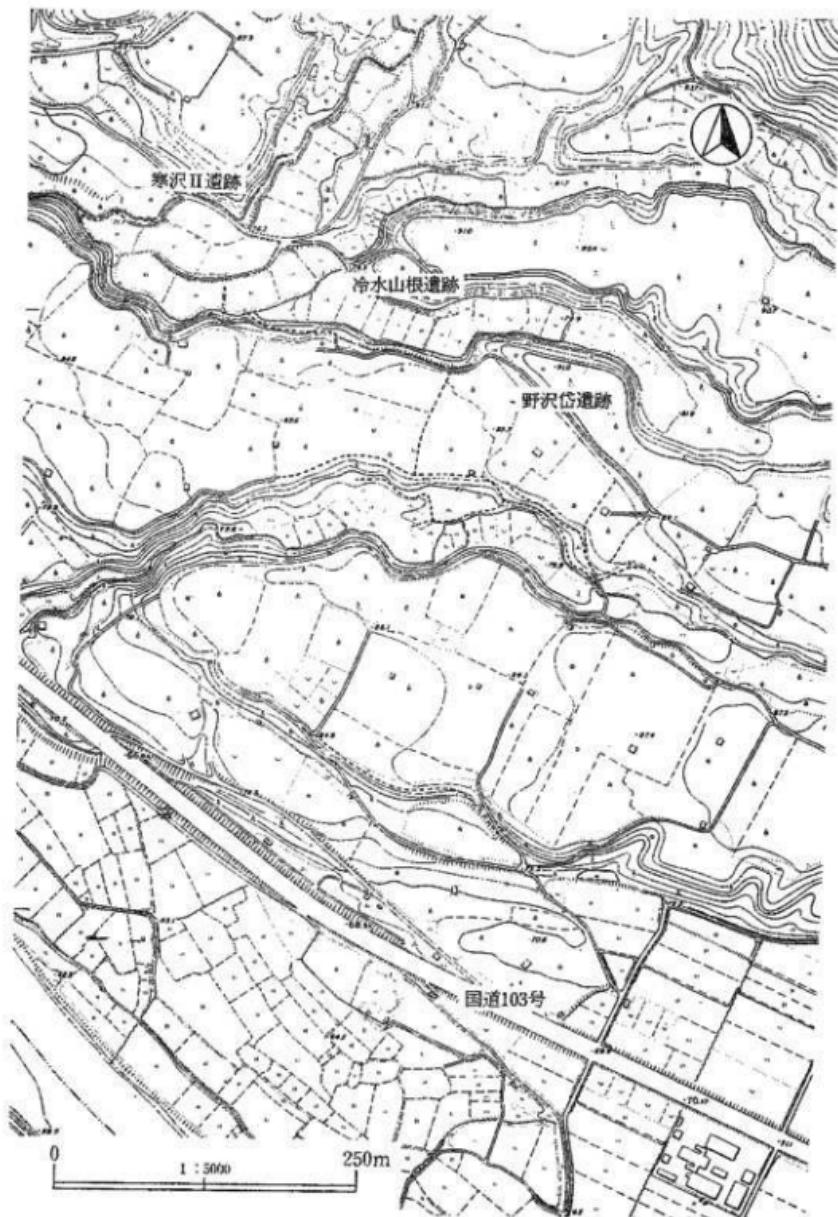
平成4年度には野沢岱遺跡の発掘調査を実施し、冷水山根遺跡・寒沢II遺跡・寒沢遺跡・中山遺跡の範囲確認調査を実施した。

平成5年度には冷水山根遺跡・寒沢II遺跡・中山遺跡の発掘調査を実施することになった。

### 調査要項

#### 1 冷水山根遺跡

遺跡名称	冷水山根遺跡	*遺跡略号	2 HMYN
所在地	秋田県大館市曲田字冷水山根56-1,71-6外		
調査期間	平成5年4月19日～6月1日		
調査面積	610m <sup>2</sup>		
調査主体者	秋田県教育委員会		
調査担当者	五十嵐一治	(秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事)	
	長澤 和則	(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)	
総務担当者	佐々木 真	(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)	
	佐藤 広文	(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)	
調査協力機関	秋田県農政部北秋田農林事務所		



第1図 遺跡周辺地形図

## 遺跡の立地と環境

大館市教育委員会生涯教育課

比内町教育委員会生涯教育課

### 2 寒沢II遺跡

遺跡名称 寒沢II遺跡 ※遺跡略号 2 S Z II

所在地 秋田県大館市曲田字寒沢77-1外

調査期間 平成5年6月2日～8月31日

調査面積 1,521m<sup>2</sup>

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 五十嵐一治 (秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事)

長澤 和則 (秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)

総務担当者 佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

佐藤 広文 (秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

調査協力機関

秋田県農政部北秋田農林事務所

大館市教育委員会生涯教育課

比内町教育委員会生涯教育課

## 遺跡の立地と環境

### 遺跡の立地 (第1図、第2図)

大館盆地は奥羽脊梁山脈の西縁に位置する、およそ100km<sup>2</sup>の陥没盆地である。盆地を取り巻く山地は標高200m～800mで地塊構造がよく発達しており、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側には摩当山地が存在する。盆地内部には米代川とその支流である長木川・下内川・犀川・その他の小河川が流れ、盆地床に広く平地を形成している。そしてそれぞれの河川の流域には河岸段丘が発達している。

大館盆地内の河岸段丘は古い順に5つの段丘に分類でき、そのほかにも中間段丘およびごく新しい沖積段丘が認められる。地形的には第2段丘と第3段丘は同一の平坦面を形成していることが多いため、外観からその境界を明確に区別することは難しい。第2段丘および第3段丘は標高60m～100mをはかり、少しくらいの洪水でも浸水の心配が無いために、古くから居住の地として利用されている。そのため段丘端の舌状台地および侵食谷に沿った地域には、多くの遺跡が存在する。

冷水山根遺跡および寒沢II遺跡は大館市の南部、JR大滝温泉駅の北西約3kmの米代川右岸

に形成された河岸段丘（第3段丘）上に立地する。遺跡付近の河岸段丘は中山集落の東辺を流れる中山沢とその支谷群により北東から南西方向に開析されている。

冷水山根遺跡は東側から西側にのびる舌状台地に位置する。北西側に約150m隔てて寒沢II遺跡が所在し、南東側に約80m隔てて昨年度調査を実施した野沢岱遺跡が所在する。

寒沢II遺跡は西側を中山沢、東側と南側をその支谷に囲まれた舌状台地に位置する。南東側に約150m隔てて冷水山根遺跡が所在し、北西側に約100m隔てて寒沢遺跡が所在する。寒沢遺跡から中山沢をはさんで北西側にさらに約100m隔てて中山遺跡が所在する。

### 歴史的環境（第2図、第1表）

冷水山根遺跡では縄文時代中期の集落跡、寒沢II遺跡では縄文時代前期から後期にかけての「土器捨て場」を検出した。

大館盆地には旧石器時代から近世までの数多くの遺跡が知られている。それらの多くは盆地中央を流れる米代川とその支流群によって形成された河岸段丘および低丘陵地上に位置している。古くからこの地方は北と南の文化の接触地帯といわれ、「火内」とよばれていた。ここでは冷水山根遺跡および寒沢II遺跡の周辺にあって発掘調査された、類似した様相を呈する縄文時代の遺跡を概観していく。遺跡名称は『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』と『秋田県遺跡地図（県北版）』登載の遺跡名称とし、文中（）内の数字は『秋田県遺跡地図（県北版）』での遺跡登録番号である。

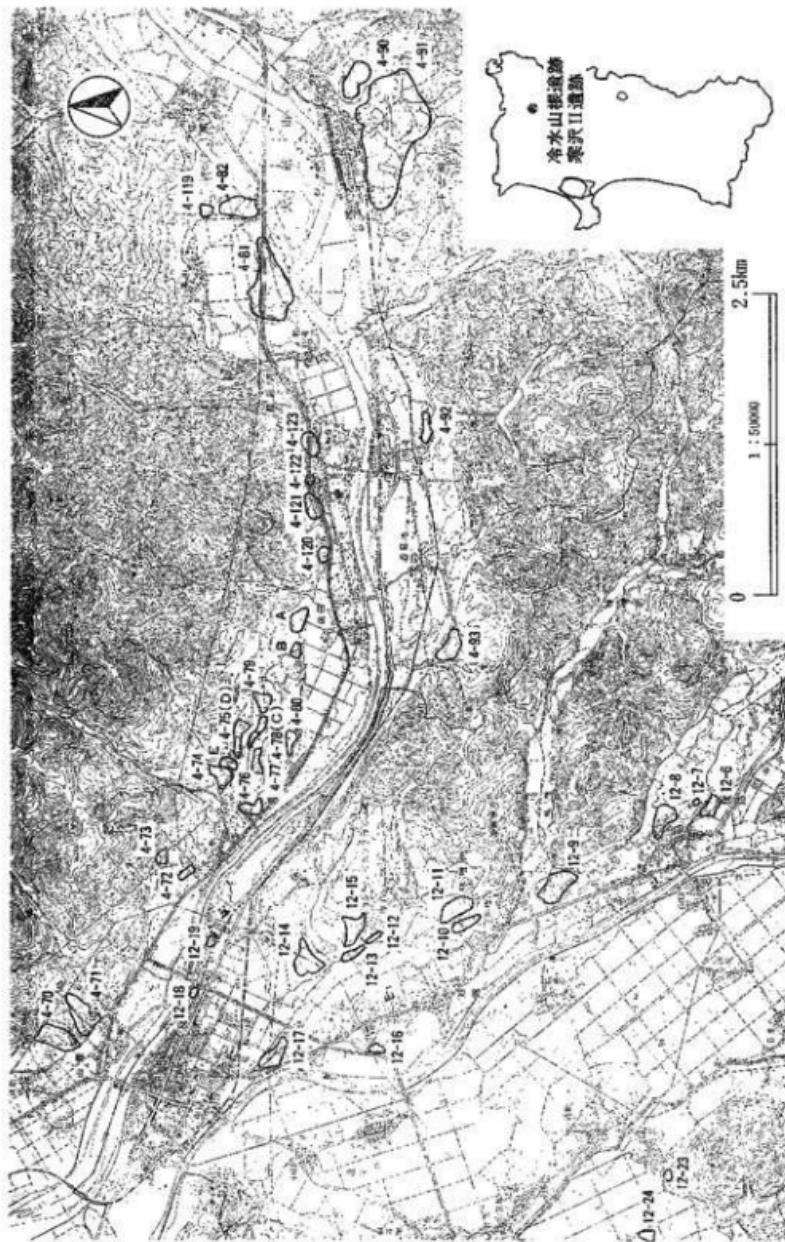
冷水山根遺跡および寒沢II遺跡周辺の縄文時代の遺跡は第2図の範囲で29箇所が知られており、冷水山根遺跡および寒沢II遺跡を含めて16箇所が発掘調査されている。

早期の遺跡としては鳶ヶ長根IV遺跡（4-123）があり、縄文早期の貝殻文土器が多量に出土している。また横沢遺跡（12-13）でも尖底貝殻文土器が出土している。このほか山館上ノ山遺跡（4-71）・本堂端遺跡（12-19）・野沢岱遺跡（C）からも早期の土器が出土している。

山館上ノ山遺跡（4-71）では縄文早期～晚期にかけての遺物が大量に出土したが、その主体をなすのは前期の円筒下層式土器である。これらは該期の遺構内のほか、沢状地形を呈する「土器捨て場」から大量に出土したものである。また鋒形石器2点も出土している。このほか鳶ヶ長根IV遺跡（4-123）・上聖遺跡（B）・野沢岱遺跡（C）・谷地中館遺跡（12-24）でも前期の土器が出土している。

中期の遺跡としては本堂端遺跡（12-19）があり、竪穴住居跡が23軒検出され、円筒上層式土器とともに大木式土器が出土している。本堂端遺跡は比内町扇田字本堂端に所在するが、冷水山根遺跡および寒沢II遺跡とは米代川をはさんで対峙する位置関係にある。また山館上ノ山遺

遺跡の立地と環境



第2図 冷水山根遺跡・寒沢II遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡No	遺跡名称	種別	遺構	遺物	所蔵者
4-70	山越	範跡	縄文平安堅穴住居跡・土坑	土師器, 阿祖器	
4-71	山越上・山	集落跡	縄文平安堅穴住居跡・土坑	縄文前・中・後・晚, 石器, 土師器	大館市教育委員会
4-72	雄毛岱	包含地		縄文中・後, 滅思器	田村栄
4-73	鬼沢	包含地		縄文	田村栄
4-74	寒沢	包含地		縄文中・山上d, 廉製石斧	高橋昭悦
4-75	冷水山根	包含地		縄文前・中・後, 石器	田村栄
4-76	野沢岱I	包含地		縄文前	田村栄
4-77	野沢岱II	包含地		縄文中, 石器	
4-78	野沢岱III	包含地		縄文, 背窓刀形石器, 廉製石器	高橋昭悦
4-79	野沢岱IV	包含地		縄文, 石器, 土師器, 滅思器	
4-80	下原	包含地		縄文前・中・後	
4-81	森峰	集落跡	縄文堅穴住居跡・空塗	縄文後, 土師器, 陶磁器	埋蔵文化財センター
4-82	縣井沢新築	包含地		土師器, 陶器	
4-90	十二所古跡	範跡	郭・堀塁		
4-91	十二所城	範跡		土師器, 滅思器, 鉄伴, 陶磁器	大館市教育委員会
4-92	大晦古窪	範跡		土師器, 陶器	大館市教育委員会
4-93	雄塔岱	包含地		土師器, 滅思器, 鉄伴	大館市教育委員会
4-119	山崎	地		土師器	大館市教育委員会
4-120	沢口	包含地		縄文後	大館市教育委員会
4-121	東ヶ若林I	集落跡	上塙	縄文晚, 石器	大館市教育委員会
4-122	東ヶ若林II	集落跡	縄文堅穴住居跡・土坑	縄文晚, 石器	大館市教育委員会
4-123	東ヶ若林IV	集落跡	縄文堅穴住居跡・土器埋設遺構・他	縄文早・前・後・晚, 麦生	大館市教育委員会
12-6	狹跡	範跡	郭・空塗		
12-7	火日堂前	範跡	堅穴住居跡・溝状造構跡・土坑	縄文・土師器	
12-8	十嵐城	範跡	郭・空塗		
12-9	森珠掛	包含地		縄文晚・土師器	
12-10	味噌内	包含地	配石遺構	縄文後	
12-11	宿内中岱	包含地		縄文前・後	
12-12	袖・沢	集落跡	平安堅穴住居跡・土坑・溝状遺構・他	土師器	埋蔵文化財センター
12-13	横沢	集落跡	縄文平安堅穴住居跡・土坑	溝状土窯, 土師跡, 縄文早・中	埋蔵文化財センター
12-14	太岱	包含地		縄文前, 土師器	埋蔵文化財センター
12-15	横沢	包含地		土師器	
12-16	真館	範跡	堅穴住居跡・土坑	土師器, 滅思器	比内町教育委員会
12-17	長岡城	範跡	廣野・堀跡		
12-18	市川	包含地			
12-19	本堂塚	集落跡	堅穴住居跡・土坑・墓石遺構	縄文早・前・中・晚	比内町教育委員会
12-23	小堤	包含地		縄文前	
12-24	谷地中岱	範跡	堅穴住居跡・地上遺構	縄文前・後・晚, 土師器, 滅思器	

遺跡No	遺跡名称	種別	遺構	遺物	所蔵者
A	家ノ後	集落跡	堅穴住居跡・粘土採掘坑・土礫墓・他	縄文前・晚, 麦生	埋蔵文化財センター
B	上塙	集落跡	土坑・配石遺構・焼土遺構	縄文中	埋蔵文化財センター
C 4-78	野沢岱	集落跡	堅穴住居跡・土坑	縄文早・後	埋蔵文化財センター
D 4-75	冷水山根	集落跡	堅穴住居跡・土坑	縄文中・晚	埋蔵文化財センター
E	寒沢II	集落跡	屋外炉	縄文前・後	埋蔵文化財センター

第1表 周辺の遺跡一覧表

## 遺跡の立地と環境

跡（4-71）・野沢岱遺跡（C）・横沢遺跡（12-13）でも中期の竪穴住居跡が検出されている。このほか大日堂前遺跡（12-7）・上聖遺跡（B）・家ノ後遺跡（A）でも中期の土器が出土している。

後期の遺跡としては萩岬遺跡（4-81）があり、竪穴住居跡が10軒検出され、十腰内I式土器が出土している。また家ノ後遺跡（A）では竪穴住居跡や土坑のほか、粘土探査坑が検出されている。このほか山館上ノ山遺跡（4-71）・大日堂前遺跡（12-7）・横沢（12-13）・蒿ヶ長根IV遺跡（4-123）・谷地中館遺跡（12-24）でも後期の土器が出土している。

晩期の遺跡としては家ノ後遺跡（A）があり、後期後半～晩期後半の多くの復元可能な土器が型式学的な断絶なく出土している。また該期に属する土壙墓群も検出された。このほか山館上ノ山遺跡（4-71）・蒿ヶ長根II遺跡（4-121）・蒿ヶ長根III遺跡（4-122）・蒿ヶ長根IV遺跡（4-123）・谷地中館遺跡（12-24）でも晩期の土器が出土している。

## 参考文献

- 大館市教育委員会『大館市山館「上ノ山遺跡」発掘調査報告書』大館市史編さん調査資料第15集、1975  
大館市史編さん委員会『大館市史』第一巻、1979  
秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第84集、1981  
比内町教育委員会『大日堂前遺跡発掘調査報告書』、1982  
比内町教育委員会『比内町埋蔵文化財調査報告書 本堂端遺跡』、1986  
比内町教育委員会『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』、1978  
秋田県教育委員会『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 一袖ノ沢遺跡・横沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第169集、1988  
秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I 一上ノ山I遺跡・上ノ山II遺跡』秋田県文化財調査報告書第173集、1988  
秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II 一上ノ山II遺跡第2次調査』秋田県文化財調査報告書第193集、1990  
大館市教育委員会『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』、1990  
秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 IV 一上ノ山I遺跡第2次調査』秋田県文化財調査報告書第211集、1991  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集、1990  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集、1991  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集、1992  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第239集、1993  
秋田県教育委員会『秋田県遺跡図鑑（県北版）』、1991  
秋田県教育委員会『曲田地区農免農道整備事業に係る発掘調査報告書 I 一上聖遺跡』秋田県文化財調査報告書第219集、1992  
秋田県教育委員会『曲田地区農免農道整備事業に係る発掘調査報告書 II 一家ノ後遺跡』秋田県文化財調査報告書第229集、1992  
秋田県教育委員会『曲田地区農免農道整備事業に係る発掘調査報告書 III 一野沢岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第237集、1993

— 冷水山根遺跡 —  
(2HMYN)

## 第1章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

冷水山根遺跡は大館市の南部、JR大滝温泉駅の北西約3.0kmにあり、西流する米代川の右岸に形成された河岸段丘（第3段丘）上に立地する。遺跡付近の河岸段丘は中山集落の東辺を流れる中山沢とその支谷群により北東から南西方向に開析されている。遺跡は東側から西側にのびる舌状台地の全城にわたると考えられ、調査区はその南西側斜面に位置する。

台地上縁と斜面下の田地との比高は9mである。標高は台地上が86m、斜面部が80~85m、斜面の平均傾斜角は約21°である。

現況は台地上部が果樹園、斜面部は伐採済みの原野である。前年度実施した範囲確認調査の結果、台地上に広がると思われる集落の「土器捨て場」と認識されていた。しかし本調査において調査区北西にかかる台地上縁の平坦面で竪穴住居跡を検出したほか斜面中腹にも平坦部を検出し、竪穴住居跡をはじめとする遺構群を検出した。

### 第2節 調査の方法（第3図）

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の1点（工事用杭IP13）を選定し、これを仮原点とした。この仮原点から東方に約20m離れた任意の1点（工事用杭IP12）とを結ぶ基準線を設定し、この基準線に直交する4m×4mのグリッドを設定した。また3箇所の杭を水準測量してレベル原点とした。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す…LS・LT・MA・MB…というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す…48・49・50・51…の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東端をグリッドの名称とした。

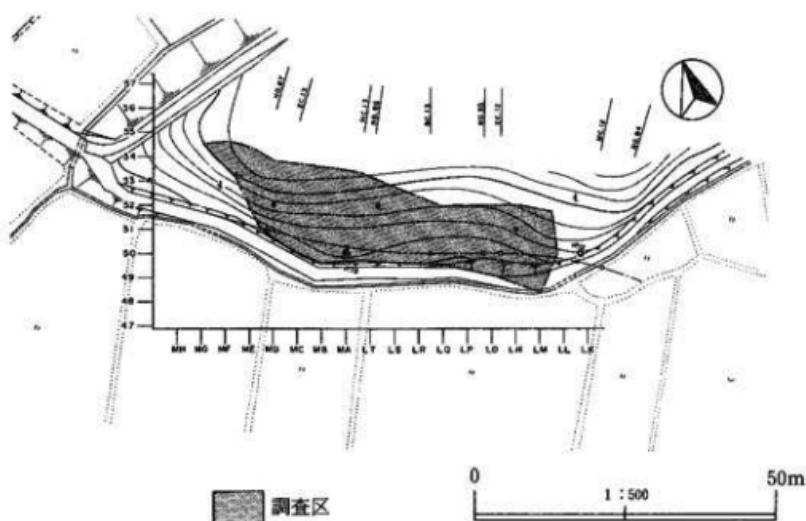
遺物は、遺構外出土のものは出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。基本的に竪穴住居跡は十字に土層観察用のベルトを残し、4分割して精査した。土坑は長軸に沿って2分割して精査した。調査の記録は主に図面と写真によった。図面は基本的には1/20の縮尺で平・断面図を作図した。写真撮影は35mmのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理では、遺構は現場で作図した平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・註記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

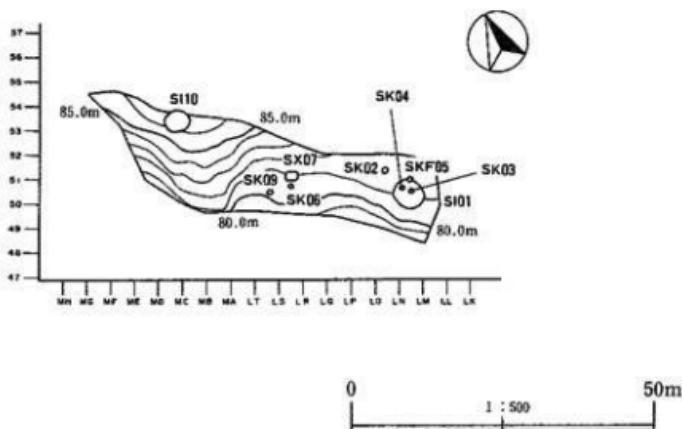
### 第3節 発掘調査の経過

- 4月19日 調査開始。池内遺跡に仮置きしていた発掘器材を搬入し、調査区に散乱する杉の枝葉を除去した。昨年調査を行った野沢岱遺跡に近い東側部分から粗掘を開始した。
- 4月20日 旧県立大館東高校（現・大館市総合歴史センター）に仮置きしていた発掘器材を搬入。現地に発掘器材を収納するための小屋を仮設した。
- 4月22日 基本層序確認のため東ベルト断面図をとった。図面作成開始。
- 4月26日 東側部分粗掘、III層～IV層が遺物包含層のようである。V層は斜面上部の部分的な堆積であった。東側部分東端に複式炉を検出（S I 0 1）。
- 4月27日 SK 0 2 プラン確認。東端部分断面図作成。
- 4月28日 発電機・ベルトコンベア等の発掘調査用リース機材到着。東側部分粗掘完了。
- 5月6日 中央部分～西側部分の抜根作業を進めた。
- 5月7日 発電機とベルトコンベアとの配線工事完了。東側部分 S I 0 1 のプラン確認のため調査区を拡張。
- 5月10日 SK 0 2 精査開始。S I 0 1 プラン確認のための拡張完了。
- 5月11日 S I 0 1 精査開始。中央部分粗掘開始。
- 5月13日 西側部分抜根作業。S I 0 1・SK 0 2 はV層から掘りこんでいた。
- 5月14日 S I 0 1 と重複する形でSK 0 3～0 5 を検出。
- 5月17日 SK 0 2 精査終了。SK 0 3～0 5 精査開始。
- 5月20日 中央部分粗掘終了。SK 0 6～0 9 プラン確認。西ベルト断面図作成。西側部分粗掘開始。SK 0 6・SX 0 7 精査開始。
- 5月21日 SX 0 7 精査終了。西側部分ベルト寄りの部分には大量（厚さ約1m）の山砂が堆積していた。
- 5月24日 北西側上部平坦面粗掘、石開炉を検出（S I 1 0）。西側急斜面にトレーナー設定。SK 0 6 精査終了、SK 0 9 精査開始。SK F 0 5 内より逆さに埋められたほぼ完形の深鉢形土器を検出。
- 5月25日 北西側上部平坦面で検出したS I 1 0 のプラン確認のため調査区を拡張、精査開始。西側急斜面のトレーナー粗掘完了。SK 0 3～0 5・0 9 精査終了。地形測量開始。
- 5月28日 S I 1 0 の石開炉の下から埋設土器を検出。精査終了。
- 5月31日 S I 0 1 精査終了。
- 6月1日 全ての作業を終了し、冷水山根遺跡の発掘調査の全工程を終了した。

冷水山根遺跡



第3図 冷水山根遺跡 調査区および地形図



第4図 冷水山根遺跡 遺構配置図

## 第2章 調査の記録

### 第1節 遺跡の基本土層（第5図）

調査区は舌状台地の南西に面する斜面にある。現地形は東側部分が緩傾斜、西側部分では急傾斜となっており、地形変化に富んでいる。しかし調査の結果、現地形とはかなり違う様相を呈すること明らかになった。

調査区東側部分から中央部分にかけての斜面中腹に平坦面を確認し、遺構の集中が認められた。また傾斜が大きく変化する中央部分～西側部分にかけての急傾斜下には1mもの山砂の堆積を確認した。西側部分は急傾斜のため堆積土も非常にうすく、密生する木根の発達により堆積土が浮いている状態であった。

遺跡の基本層序は次のとおりである。

- I 層 黒色 (7.5YR1.7/1) を呈する表土。地山（鰐石）粒をごく少量含む
- II 層 黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、十和田火山起源の大湯浮石を中量含む
- IIb層 黒褐色 (10YR2/1) を呈し、細礫をごく少量含む
- III 層 黒褐色 (10YR3/1) を呈し、細礫をごく少量含む
- IV 層 黒褐色 (10YR3/2) を呈し、細礫を少量含む
- V 層 褐色 (7.5YR4/3) を呈し、細礫を多量に含む。粘性強い
- VI 層 橙色 (7.5YR6/8) を呈する地山土。砂礫および細礫を少量含む。酸化鉄分含む

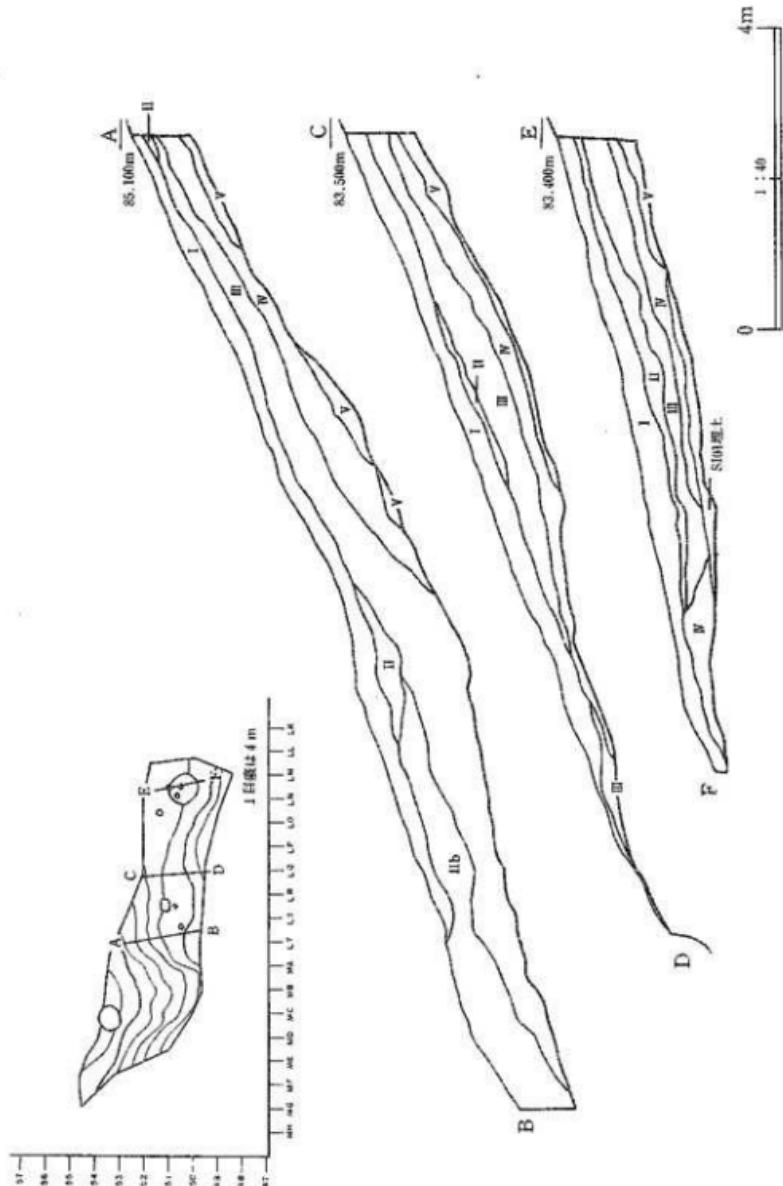
遺構確認面はV層およびVI層（地山）上面である。V層は調査区東側部分～中央部分の斜面上部における部分的堆積であり、斜面上部にかかるS101およびSK02・05はV層から掘りこんでいるが、その他の遺構はVI層の地山を直接掘りこんでいる。

### 第2節 検出遺構と出土遺物（第4図、第6図～第16図）

今回の調査では縄文時代中期の竪穴住居跡を含む9基の遺構を検出した。

- |         |                       |
|---------|-----------------------|
| 竪穴住居跡   | 2軒 (S101・10)          |
| プラスコ状土坑 | 1基 (SKF05)            |
| 土坑      | 5基 (SK02・03・04・06・09) |

冷水山根遺跡



第5圖 冷水山根遺跡 調查区土層堆積状態実測図

性格不明 遺構 1基 (S X 0 7)

(1) 穴住居跡

S I 0 1 (第6図～第9図)

[検出位置] 調査区東端のLL50・LM49・LM50・LM51・LN49・LN50グリッドで検出した。掘りこみ面は部分的に堆積するV層の上面で、IV層まで掘りこんで構築されている。

[形態と規模] 長軸510cm、短軸470cmの略円形を呈し、床面積は19.6m<sup>2</sup>をはかる。馬蹄形複式炉を持ち、炉の中軸方向が短軸となる。

[壁] 南西部は斜面の傾斜に沿って壁面が消失するが、北東部での壁面の残りはよい。壁高は最大で54cmをはかる。

[床面] 遺構中央部の床面でSK03・04を検出した。両土坑とも確認面(S I 0 1床面)で一部焼土化しており、S I 0 1構築以前の土坑である。また北辺に接してSKF05が重複するが、切り合い状況からSKF05の方が新しい。

[柱穴] 6本の主柱穴が確認されている。

[炉] 遺構南西部に馬蹄形複式炉を持つ。石組部の内側はよく加熱され、赤変している。ほかに遺構中央部にSK03・04を一部覆う形で焼土を確認した。

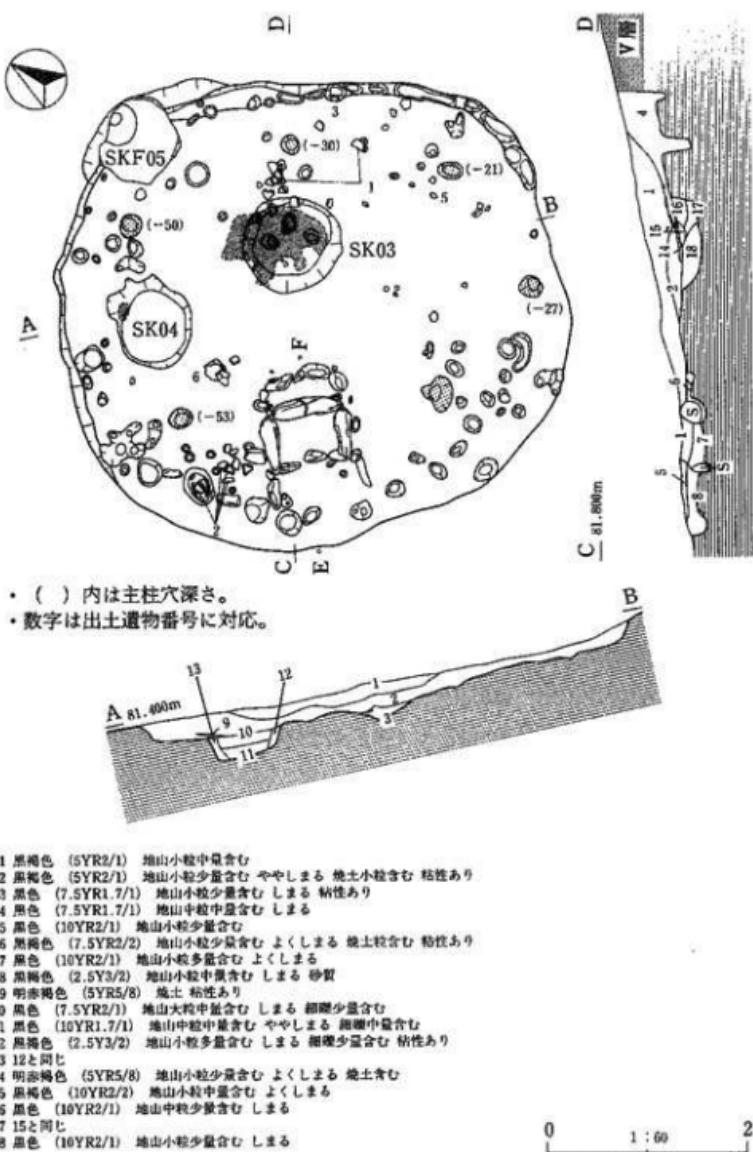
[出土遺物] 繩文中期後葉～中期末の土器および剝片が出土した。1は弱く外反する口縁に小突起を有し胴部がやや張る深鉢で渦巻状の文様を沈線で胴部に描き、その内部にLR繩文を充填している。内面には炭化物が付着している。2は1とほぼ同じ器形を呈し、全体にLR繩文を施文している。胴部上半にススが付着している。3は沈線で稍円状の文様を描き、その外部にLR繩文を充填している。4は小破片のため全容を知り得ないが、弱く外反する口縁で、ススが付着している。5は口縁が弱く外反し、沈線で区画された内部に、RL繩文が充填される。6は器面にLR繩文が施文され、綱代痕を有する土器底部である。また剝片を少数出土したほかに、石器は出土しなかった。

S I 1 0 (第10図～第12図)

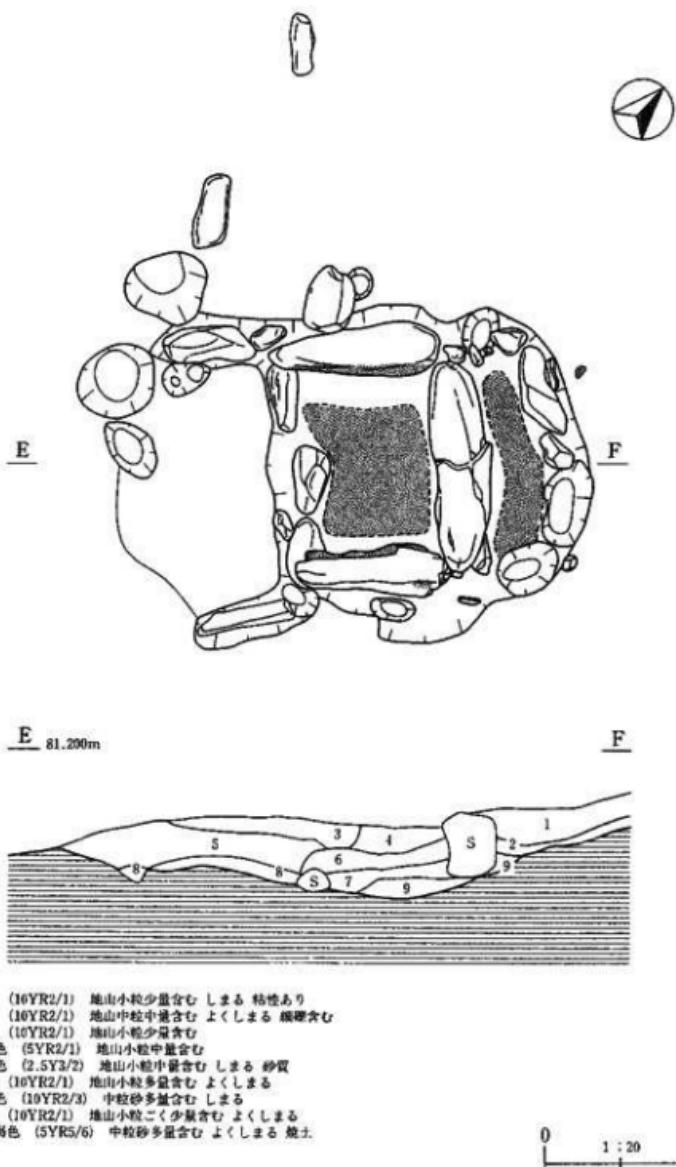
[検出位置] 調査区北西部の台地上縁部MB53・MC52・MC53グリッドで検出した。VI層(地山)を掘りこんで構築されている。

[形態と規模] 平面形は径約400cmの略円形を呈すると思われる。床面積は10.6m<sup>2</sup>をはかる。台地上縁に果樹園の防風ネットが張られており、その支柱付近まで遺構が広がるため一部は調査できなかった。

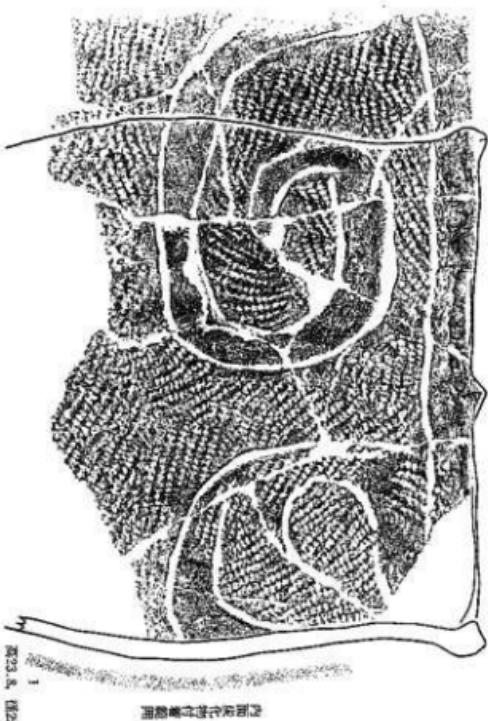
冷水山根遺跡



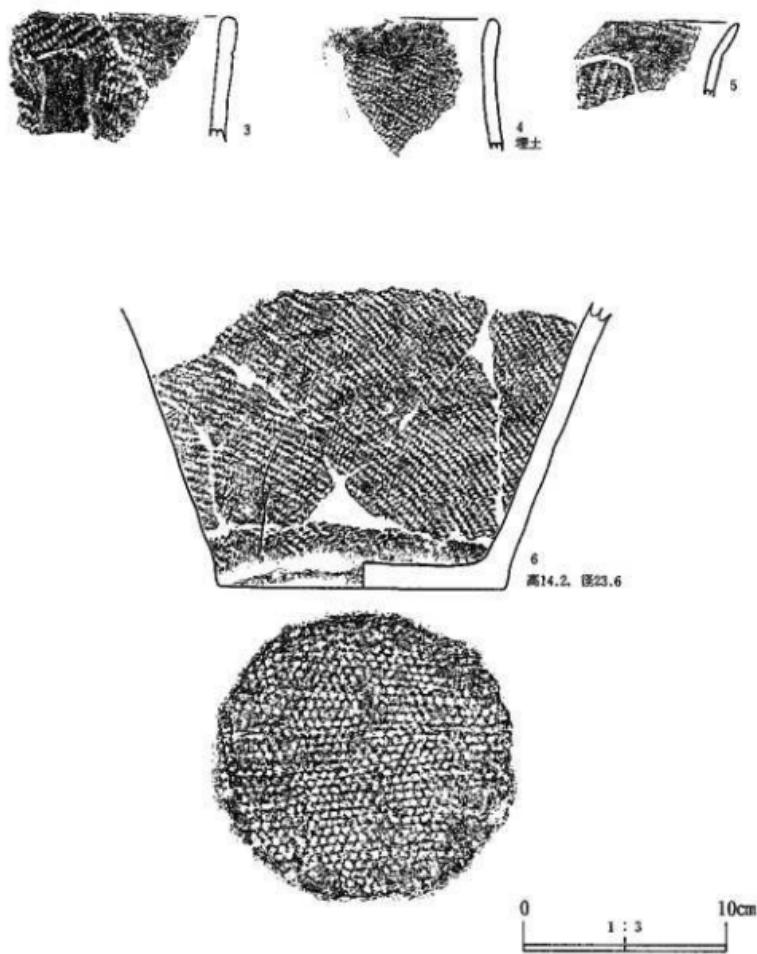
第6図 SI01竪穴住居跡、SK03・SK04土坑



第7図 SI01 炉



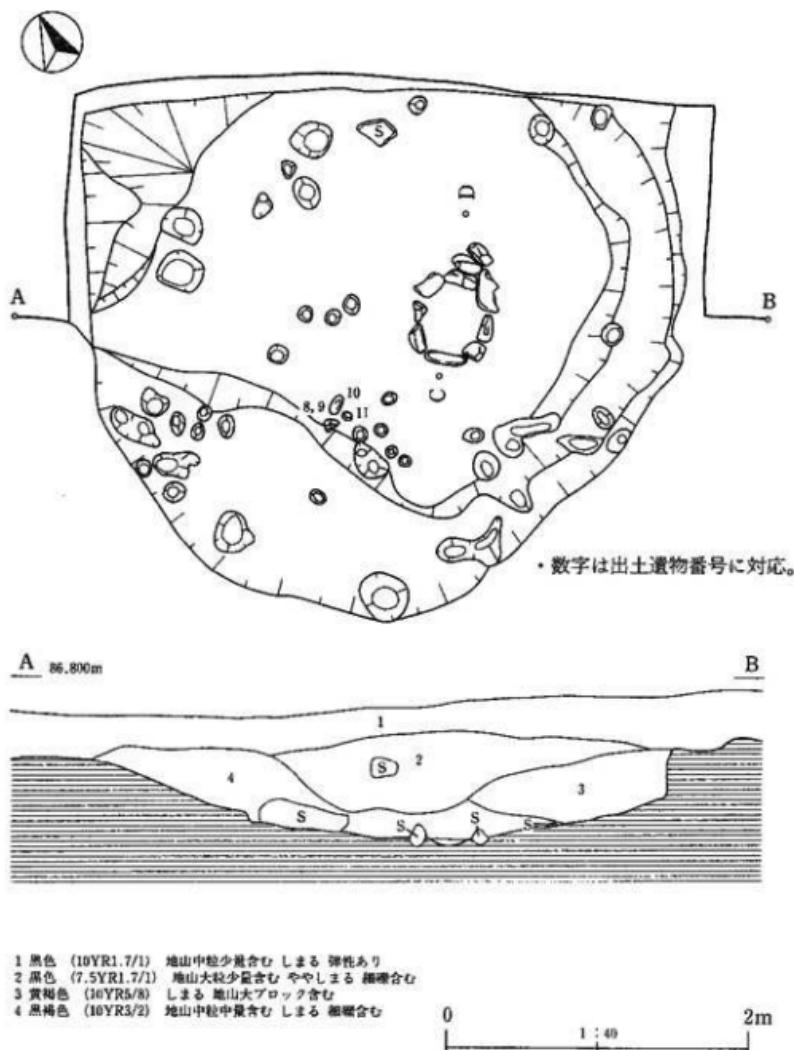
第8図 SI01 遺構内出土土器(1)



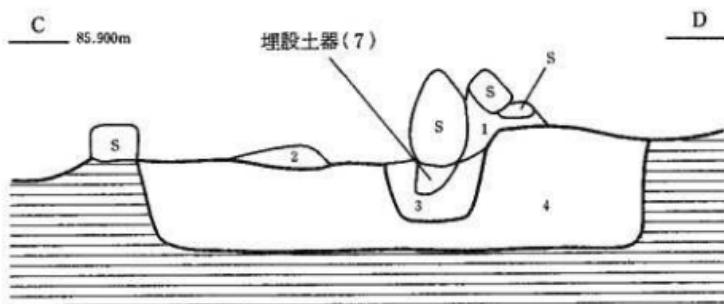
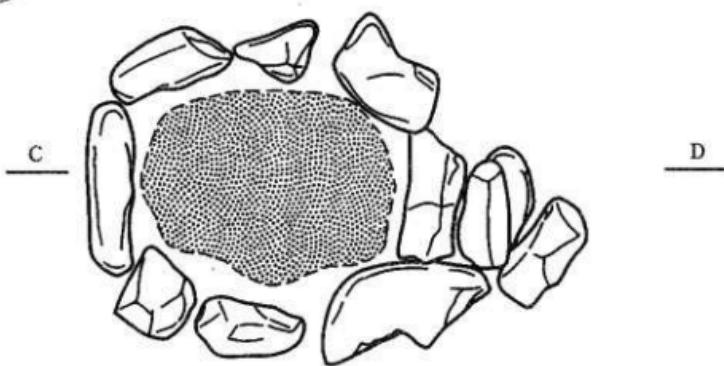
第9図 SI01 遺構内出土土器(2)

【壁】遺構北東部の防風ネット側での残りがよく、床面から2段階に立ち上がっている。壁高は最大で46cmをはかる。

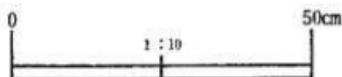
【床面】中央部に石圓炉、周囲に多くの小ピットを検出した。ピットは遺構の壁面に沿って巡



第10図 SI10 壺穴住居跡

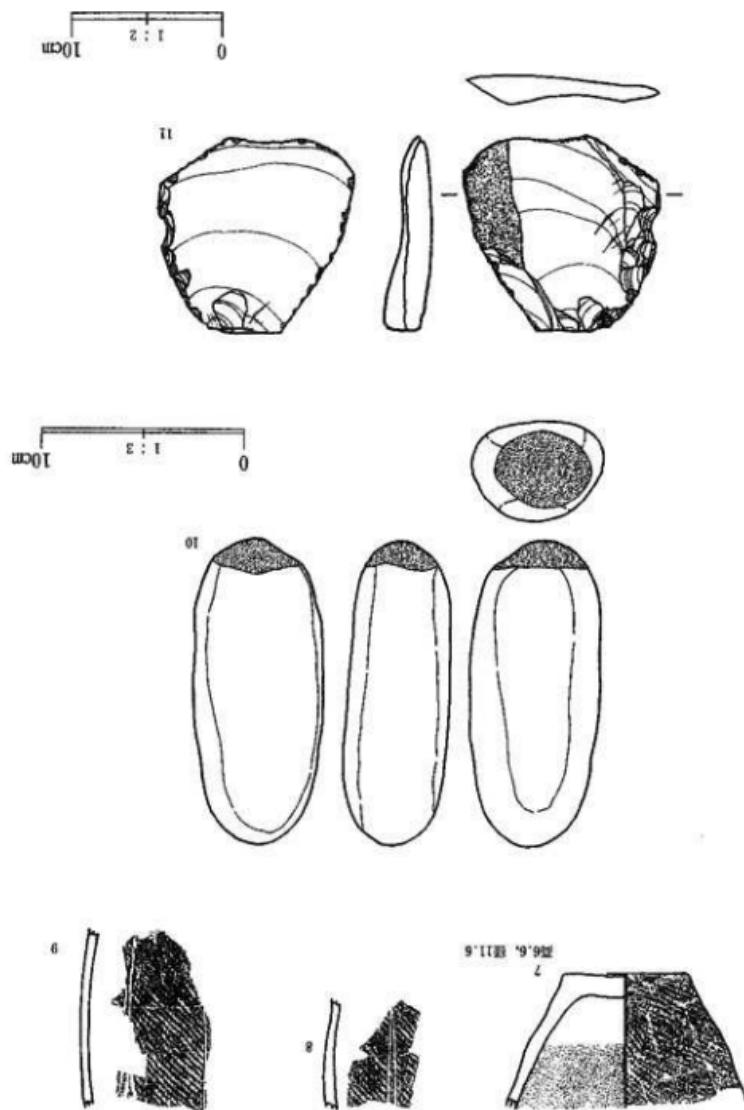


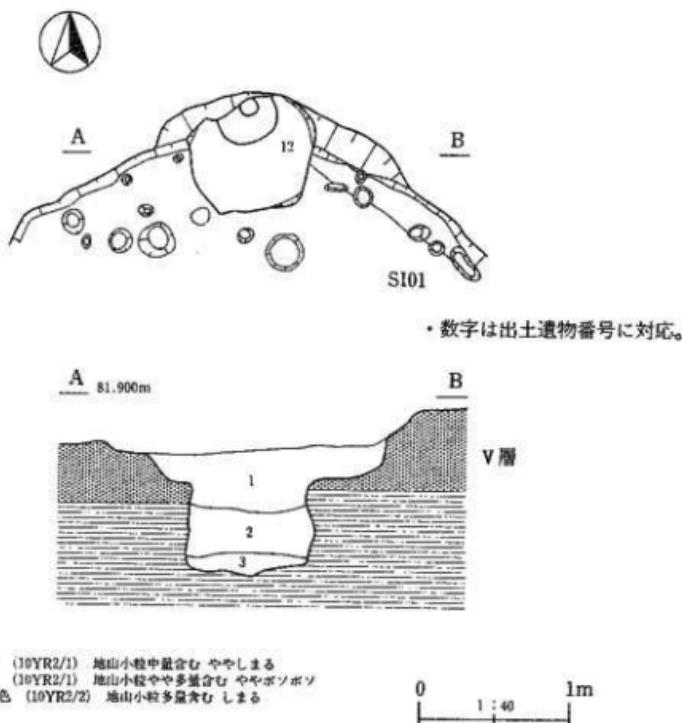
- 1 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 地山中粒ごく少含む ややしまる 弹性あり  
 2 橙色 (5YR6/8) よくしまる 硬土  
 3 黄色 (7.5YR4/6) 地山大粒少含む よくしまる  
 4 地山土



第11図 SI10 炉

第12圖 S110 漆器內出土遺物





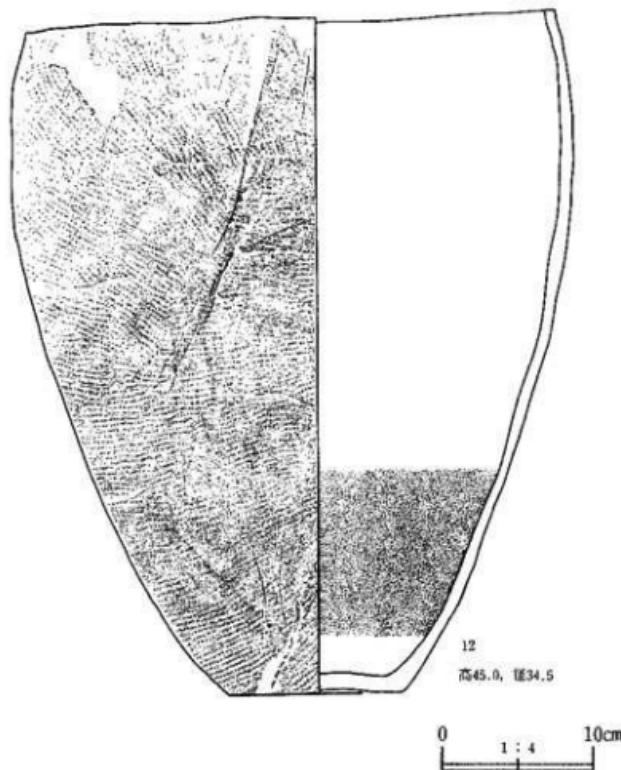
第13図 SKF05 フラスコ状土坑

る。また床面は遺構南西部斜面に向かって崩落していく。

【柱穴】主柱穴は不明であるが、壁面に沿って小ピットが巡る。

【炉】中央に石圓炉があり、炉石の直下から埋設土器を検出した。炉の断面精査を行ったところ、石圓炉構築以前の土器埋設炉と判明した。VI層（地山）の崩落によりプランが不明瞭なため建て替え痕跡は検出し得ないが、炉に関しては少なくとも①土器埋設炉→②石圓炉という再構築が認められる。

【出土遺物】縄文中期後葉の土器および石器が出土した。7は石圓炉の炉石下部から出土した埋設土器で、胴部にはR L縄文が施文される。内部には炭化物が付着している。8・9は地文縄文に沈線による区画がなされている。石器は敲石（10）、削器（11）が出土した。



第14図 SKF05 造構内出土土器

## (2) フラスコ状土坑

SKF05 (第13図、第14図)

【検出位置】 S I 0 1 の北東端に重複する形で見つかった。S I 0 1 と同様V層から掘りこまれており、LM5 0・LM5 1 グリッドで検出した。

【形態と規模】 平面形は略円形を呈すると思われ、確認できた開口部で最大径160cm、口頸部で径80cm、底部で径90cmをはかる。V層上面からの深さは最大で96cmをはかり、断面形はフラスコ形を呈する。

【壁・床面の状況】 坑底面および壁面は比較的平坦で滑らかである。

【出土遺物】 繩文晩期と思われるほぼ完全な形の深鉢形土器が伏せられた状態で出土した(12)。

L R 繩文が全面に施文されている。胴部外面上半にススが付着し、また内面の胴部下半に炭化物が付着している。

[その他] S I 0 1 と重複しているが貼床痕跡もなく、S I 0 1 の北壁を掘りこんで構築されており、SKF 0 5 の方が新しい。

### (3) 土坑

#### SK 0 2 (第15図)

[検出位置] LN 5 1 グリッドで検出。V層から掘りこまれて構築されている。

[形態と規模] 平面形は開口部で径100cm、底部で径90cmの円形を呈する。V層上面からの深さは最大で50cmをはかり、断面形は鍋底形を呈する。

[壁・床面の状況] 坑底面および壁面は比較的滑らかであり、床面中央西寄りに1つのピットを検出した。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### SK 0 3 (第6図)

[検出位置] LM 5 0 グリッド、S I 0 1 の床面から検出した。S I 0 1 床面中央部に検出した焼土により大部分が覆われている。

[形態と規模] 平面形は確認面 (S I 0 1 床面) で径100cm、底部で径80cmの円形を呈する。S I 0 1 床面からの深さは最大で26cmをはかり、断面形は鍋底形を呈する。

[壁・床面の状況] 坑底面および壁面は比較的滑らかである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[その他] S I 0 1 焼土の堆積状況から、S I 0 1 の方が新しい。

#### SK 0 4 (第6図)

[検出位置] LM 5 0 ・ LN 5 0 グリッドで検出。S I 0 1 床面中央部北寄りに検出した焼土により一部が覆われている。

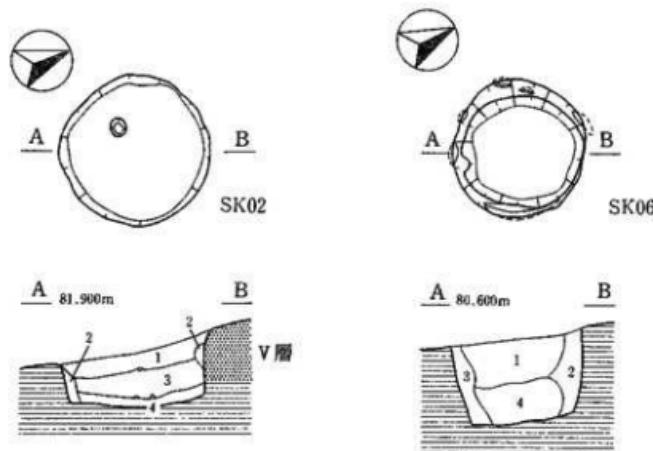
[形態と規模] 平面形は確認面 (S I 0 1 床面) で径90cm、底部で70cmの円形を呈する。S I 0 1 床面からの深さは最大で26cmをはかり、断面形は鍋底形を呈する。

[壁・床面の状況] 坑底面および壁面は比較的滑らかである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

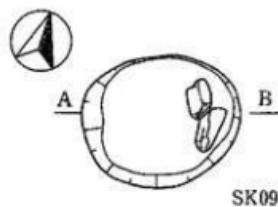
[その他] S I 0 1 焼土の堆積状況から、S I 0 1 の方が新しい。

冷水山根遺跡



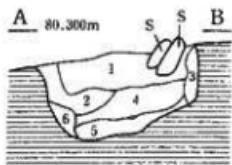
SK02

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 地山中粒少量含む
  - 2 黄褐色 (7.5YR4/3) 地山中粒少量含む よくしまる 粘性あり
  - 3 黑褐色 (10YR2/3) 地山小粒少量含む ややしまる
  - 4 黑褐色 (10YR3/1) 地山大粒中量含む よくしまる 粘性あり
- SK06
- 1 黒色 (10YR1.7/1) 地山小粒中量含む しまる
  - 2 黄褐色 (2.5Y3/2) 地山中粒多量含む ややしまる 粘性あり
  - 3 黑褐色 (2.5Y3/1) 地山小粒多量含む ややしまる 粘性あり
  - 4 黑色 10YR2/1 地山中粒中量含む ややしまる



SK09

- 1 黒色 (7.5YR1.7/1) 地山中粒少量含む ややしまる
- 2 黄褐色 (2.5Y3/1) 地山中粒多量含む しまる
- 3 と同じ
- 4 黑色 (2.5Y2/1) 地山小粒ごく少量含む しまる 粘性あり
- 5 黑褐色 (2.5Y3/1) 地山小粒少量含む ややしまる 粘性あり
- 6 地山大ブロック しまる



0 1 : 40 1m

第15図 SK02・SK06・SK09土坑

**S K 0 6 (第15図)**

【検出位置】 LR 5 0 グリッドで検出。VI層（地山）を掘りこんで構築されている。

【形態と規模】 平面形は開口部で80cm、底部で60cmの円形を呈する。プラン確認面であるVI層（地山）上面からの深さは最大で64cmをはかり、断面形は鍋底形を呈する。

【壁・床面の状況】 壁面の凹凸が激しい。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

**S K 0 9 (第15図)**

【検出位置】 LS 5 0 グリッドで検出。VI層（地山）を掘りこんで構築されている。

【形態と規模】 平面形は開口部で最大径100cm、底部で最大径90cmの略円形を呈する。プラン確認面であるVI層（地山）上面からの深さは最大で64cmをはかり、断面形は鍋底形を呈する。プラン確認の時に、プラン中央部東側寄りに大きな礫2個が出土した。

【壁・床面の状況】 壁面はSK 0 6 同様凹凸が激しい。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

**(4) 性格不明遺構****S X 0 7 (第16図)**

【検出位置】 LR 5 0・LR 5 1 グリッドで検出。VI層（地山）を掘りこんで構築されている。

【形態と規模】 平面形は縦130cm、横200cmの長方形を呈する。プラン確認面であるVI層（地山）上面からの深さは最大34cmをはかり、断面形は長方形を呈する。

【壁・床面の状況】 壁面は激しく凹凸し、床面にはビットを多数検出した。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

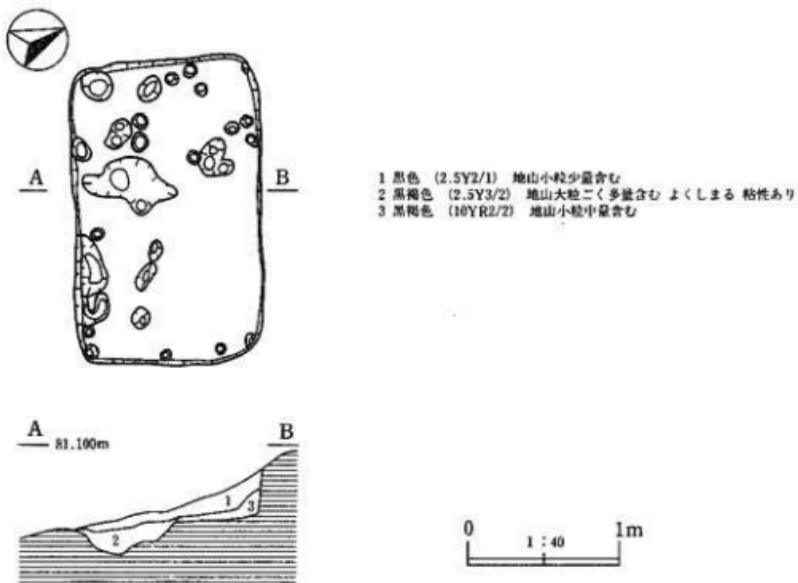
**第3節 遺構外出土遺物 (第17図～第20図)****(1) 層序と堆積状態**

調査区は舌状台地の南西側斜面に位置する。調査の結果、調査区のうち東側部分～中央部分の斜面中腹に平坦面を検出し、遺構の集中が見られた。西側部分は急傾斜のため堆積土もうすく、台地上縁にかかるSI 1 0以外に遺構は検出できなかった。

調査区内に堆積する基本層序としてI～VI層を確認したが、V層は斜面上部のみで確認できる部分的堆積である。

遺構外検出遺物の大部分は東側部分～中央部分出土の遺物であり、西側部分出土のものはS

冷水山根遺跡



第16図 SX07性格不明遺構

I 10 下方の斜面から出土した少數の土器片だけである。主たる遺物包含層はIII層であり、V層からの遺物の出土はなかった。出土した遺物の主体をなすのは縄文時代中期後葉の土器とそれとともになる石器等である。

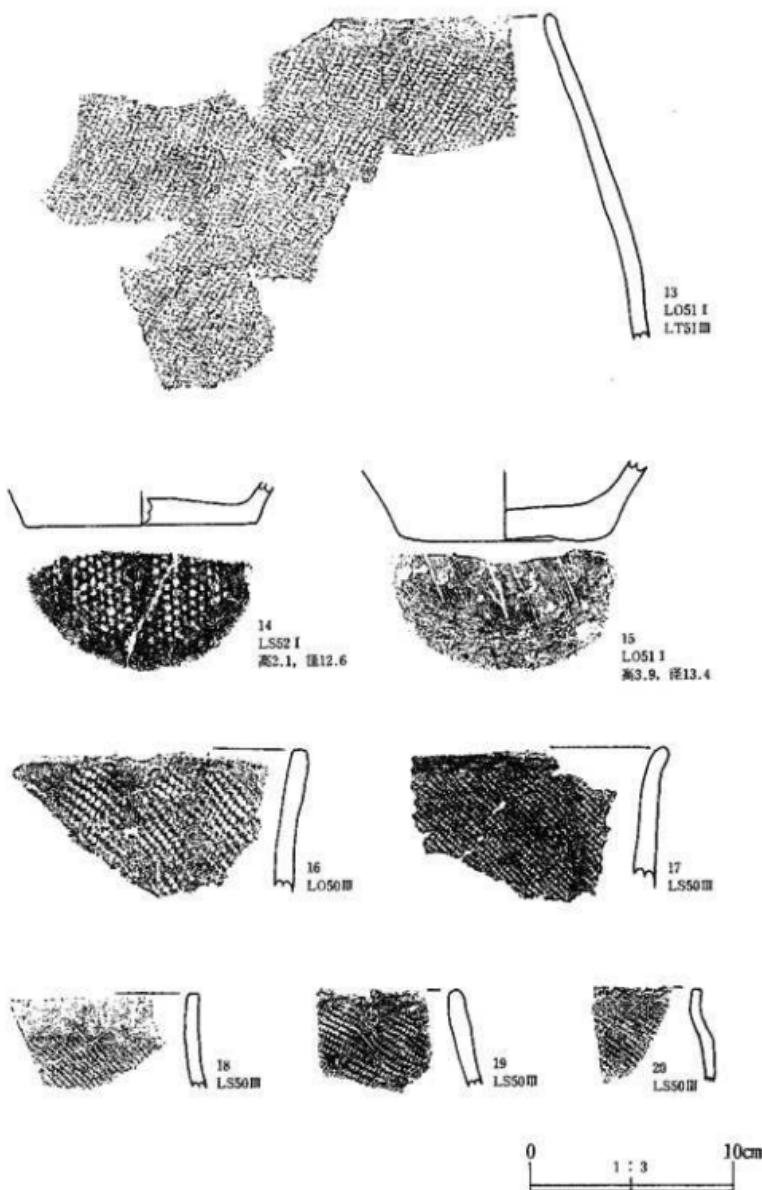
出土量は縦34cm×横54cm×深さ18cmの遺物収納用コンテナで7箱であった。

(2) 第I層出土遺物 (第17図)

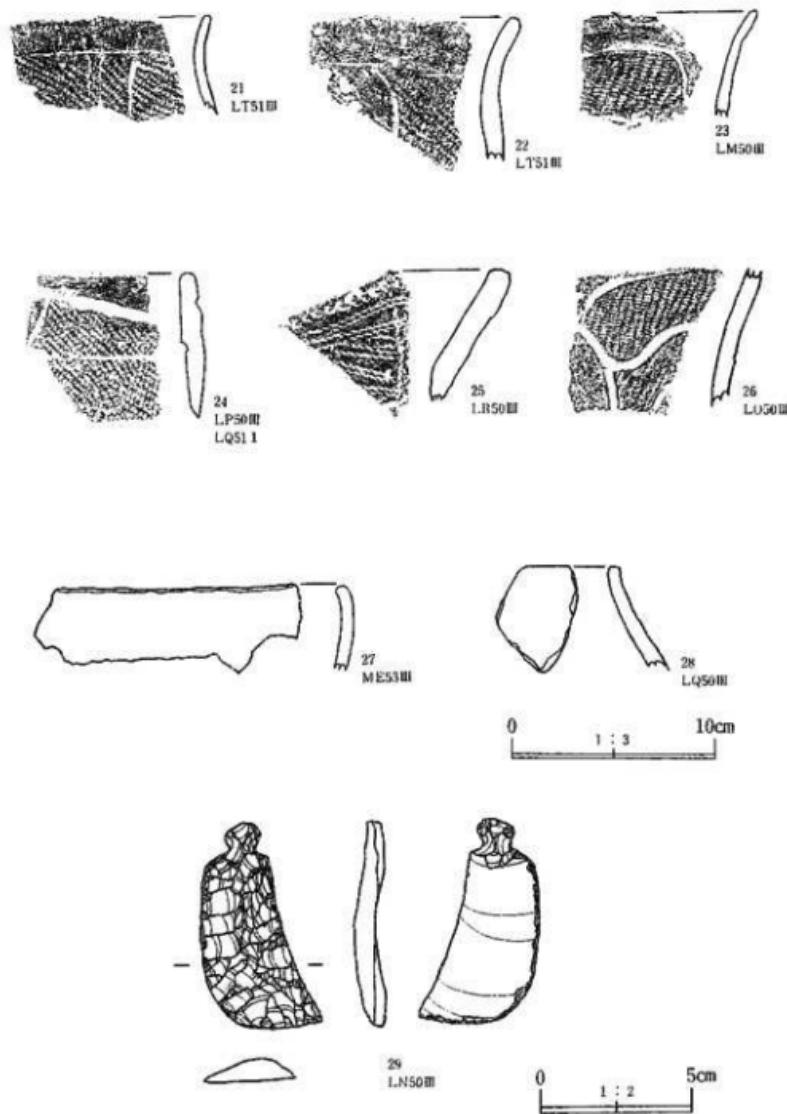
13は口縁がやや内傾し、全面にR L縄文を施文している。外面下部にはススが付着している。14は綱代底のある土器底部である。15は綱代ではなく範状工具の痕跡のある土器底部である。

(3) 第III層出土遺物 (第17図～第19図)

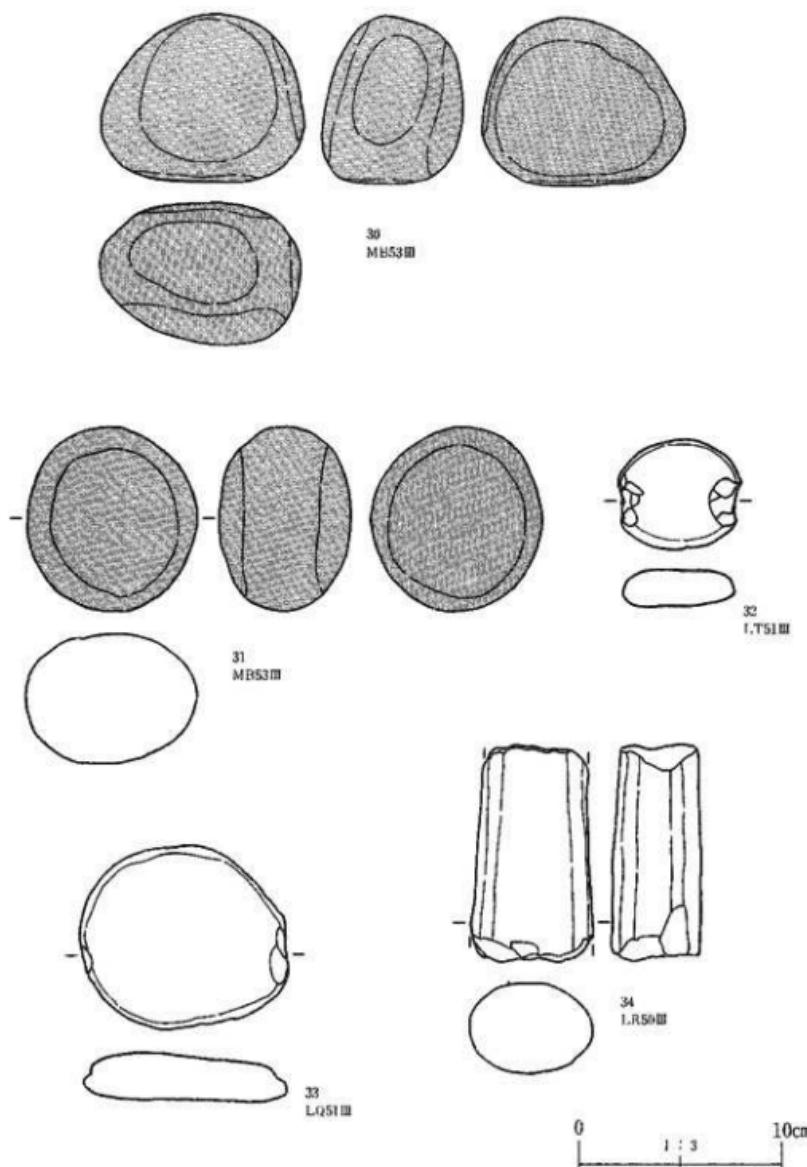
16は口縁が外傾し、L R縄文が施文されている。17はL R縄文が施文されている。18は口縁が直立もしくはやや内傾し、L R縄文を施文している。19は全面に縄文が施文されている。20は口縁が内弯しつつ直線的に立ち上がり、R L縄文を施文している。21は外反する口縁に縄文が施文され、縦位に沈線が施されている。22は口縁が外反し、沈線で区画された内部に縄文が充填され、沈線に沿った区画内に円形竹管文が施文されている。23は口縁が外反し、沈線で区



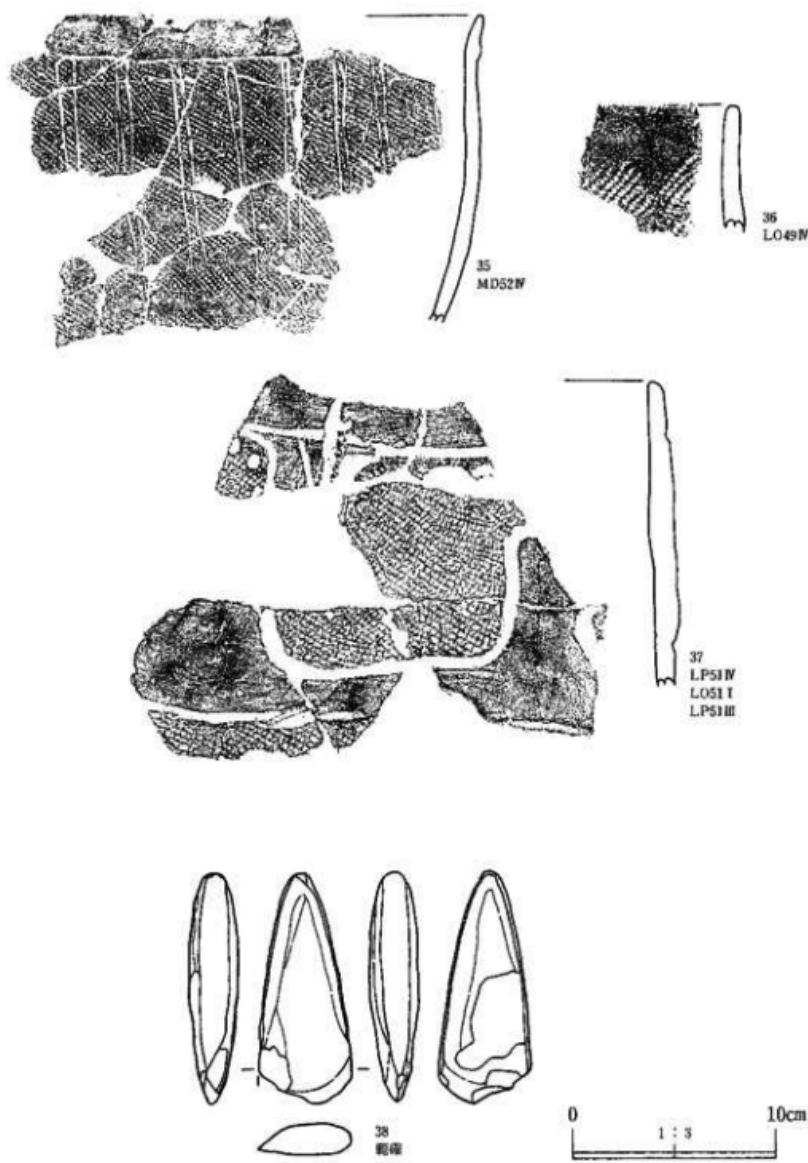
第17図 造構外出土遺物(1) 1層・III層



第18図 遺構外出土遺物(2) III層



第19図 造構外出土遺物(3) III層



第20図 遺構外出土遺物(4) IV層・他

画された内部にLR縄文が充填されている。24は口縁がやや内傾し、沈線で区画された範囲にLR縄文を充填している。25は外傾する口縁に押圧縄文が幾何学的に施文され、口唇に半截竹管による連続刺突が施文されている。26は曲線を描く沈線で区画された内部に、LR縄文が充填されている。27は口縁がやや内弯し、内外面に炭化物が付着している無文の土器である。28は内傾する口縁を持つ無文の土器である。

29は縦形の石匙で、全体がよく調整されている。30・31は円礫の全面を擦っている擦り石である。32・22は円形の礫の両端に抉りを持つ石錐である。34は石棒と思われるが、両端が欠損している。

#### (4) 第IV層出土遺物（第20図）

35は口縁が弱く外反し、腹部がやや張る器形を呈する。腹部には全面にRL縄文が施文され、縦位に細長い「人」字形の沈線が施されている。36は口縁が内傾し、RL縄文が施文されている。37は口縁が内傾し、波状の沈線で区画された内部にLR縄文が施文されている。沈線に沿った区画内に竹管円文が施されている。

#### (5) その他の出土遺物（第20図）

38は範囲確認調査時に出土した磨製石斧であるが、刃部が欠損している。

## 第3章　まとめ

### 遺構と遺物について

本調査で検出した遺構は9基であり、その内訳は竪穴住居跡2軒、フラスコ状土坑1基、土坑5基、性格不明遺構1基である。

出土遺物により帰属時期が明らかな遺構は、2軒の竪穴住居跡（SI01・10）と1基のフラスコ状土坑（SKF05）である。SI01はV層から掘りこまれており、SKF05およびSK03・04と重複する。SK03・04はSI01の床面で検出したが、SI01床面上の焼土がSK03・04を一部覆う形で堆積している。SK03・04はSI01構築以前から存在し、SI01構築の際に埋められたものである。SKF05はV層から掘りこまれ、SI01の北東端に切り合う形で重複する。SI01北東側の埋土および壁（V層）を切る形でSKF05の埋土が堆積しており、SKF05がSI01より新しい時期に構築されたこと

### 冷水山根遺跡

がわかる。S I 10は調査区北西端の台地上縁部に検出し、VI層（地山）を掘りこんで構築されている。しかし地山がいわゆる「シラス」で斜面に向かって崩落しているため、遺構の残存状況は悪い。出土遺物からS I 01と同時期かやや先行する時期のものと考えられる。

その他の遺構（SK 02・06・09、SX 07）では遺物が検出されなかった。SK 02はV層上面から掘りこんで構築されているため、同様にV層上面から掘りこんで構築されているS I 01あるいはSKF 05に近接する時期のものと考えられる。

SK 06・09は断面形が鍋底形を呈し、両土坑とも壁面が激しく凸凹している。SK 09では遺構確認面に突き出す形で大きな礫が2つ配されていることから、これらは土壙墓の可能性も考えられる。SX 07は平面形長方形を呈する土坑であるが、性格は不明である。以上3基の遺構（SK 06・09、SX 07）は調査区中央部の平坦面で検出し、VI層（地山）を掘りこんで構築されている。そのため他の時期の明らかな遺構と同時期かそれにやや先行する時期のものと考えられる。

本調査で出土した遺物は遺構内および斜面全域から出土したもので、その大部分は縄文時代中期の土器とそれにともなう石器・石製品である。出土した土器は縄文時代中期後葉～中期末（大木9～10式）および縄文晩期（12）の土器であり、遺構もほぼ該期のものと考えられる。しかし大木10式に比定される遺構内出土土器1についてはS I 01がある程度埋没してから投棄されたものと考えられ、2軒の竪穴住居跡は大木9式期に属すると考えられる。

### 遺跡の立地について

本調査の発掘地点は台地上に広がると思われる集落に暮らした人々が生活用具等を捨てた「土器捨て場」と認識していたが、斜面中腹の狭い平坦面にも集中して遺構を検出した。現地形では全域が傾斜面を呈しているものの、調査区東側部分～中央部分にかけての斜面中腹に平坦部が存在していた。また調査区西部の台地上縁部に検出した竪穴住居跡（S I 10）の存在は、台地上の平坦面（現況果樹園）への集落の存在を示しているといえよう。斜面中腹の東南端に検出した竪穴住居跡（S I 01）は馬蹄形複式炉を伴い、土坑2基を埋めてつくられていた。またこの竪穴住居跡は新しいフラスコ状土坑（SKF 05）によって切られている。この土坑からはほぼ完形の深鉢形土器（12）が伏せられた形で出土した。

これらのことから本遺跡は今回の調査区となった斜面のみならず、台地全体に広がるものであると考えられる。また台地上には縄文時代中期後葉～中期末、あるいは縄文晩期の集落が営まれていたと考えられる。

— 寒沢 II 遺跡 —  
(2SZII)

## 第1章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

寒沢II遺跡は大館市の南部、JR大滝温泉駅の北西約3.0kmにあり、西流する米代川の右岸に形成された河岸段丘（第3段丘）上に立地する。遺跡付近の河岸段丘は中山集落の東辺を流れる中山沢とその支谷群により北東から南西方向に開析されている。遺跡は西側を中山沢、東と南側をその支谷に囲まれた舌状台地の全域にわたると考えられ、調査区はその南東側先端部に位置する。

台地上縁と斜面下の水路との比高は13mをはかる。標高は台地上が88m、調査区の斜面部が75~83m、斜面の平均傾斜角は約27°である。

現況は台地上部が果樹園、斜面が原野および畑地である。前年度実施した範囲確認調査の結果、台地上に広がると思われる集落の「土器捨て場」と認識されており、MFラインを中心とする沢状地形に「土器捨て場」を検出したほかには、斜面中腹の平坦部に屋外炉を1基検出したのみである。

### 第2節 調査の方法（第21図）

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の1点（工事用杭No.9-5）を選定し、これを仮原点とした。この仮原点から西方に約20m離れた任意の1点（工事用杭No.9-6）とを結ぶ基準線を設定し、この基準線に直交する4m×4mのグリッドを設定した。また3箇所の杭を水準測量してレベル原点とした。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す…LS・LT・MA・MB…というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す…48・49・50・51…の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東端をグリッドの名称とした。

調査区全域が斜面に存在する「土器捨て場」であることから、層位毎に遺物の精査・収納を行った。遺物は、平面図に位置（形）・出土層位・レベルを記録した後、完形品あるいはそれに近い形状の出土は単独の遺物番号で取り上げ、数個体分の土器が密集して出土したときはそのまま毎に一つの遺物番号を付して取り上げた。まとまりのみられない遺物については、各グリッド毎に出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに一括して取り上げた。調査の記録は主に図面と写真によった。図面は基本的には1/20の縮尺で平・断面図を作図した。写真撮影は35mmのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

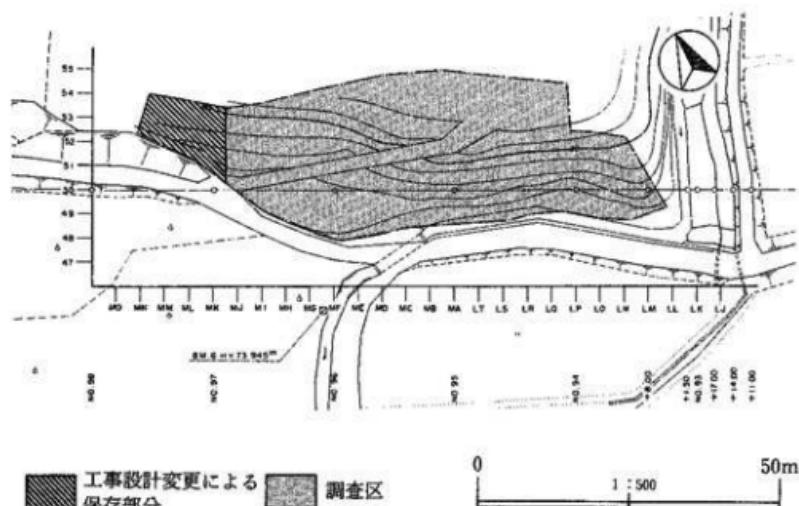
室内における整理では、遺構は現場で作図した平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・註記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

### 第3節 発掘調査の経過

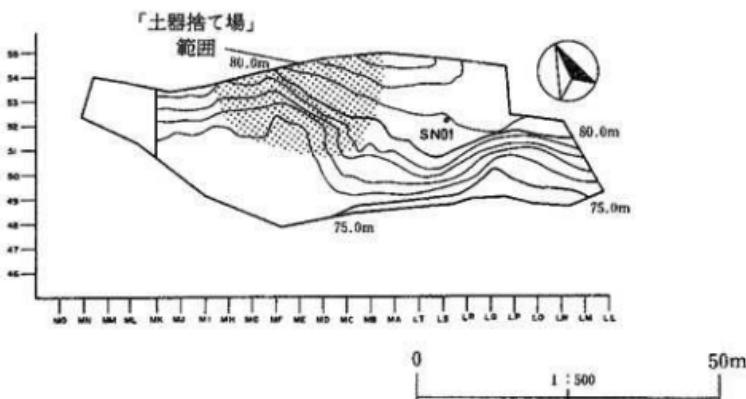
寒沢Ⅱ遺跡の調査面積は当初1,100m<sup>2</sup>であったが、北秋田農林事務所による農道の工事設計変更にともない、調査面積も1,521m<sup>2</sup>に変更となった。調査区中央に台地上の果樹園へ通じる唯一の農道があり閉鎖できないため、調査は農道の上部・下部と2段階に分けて実施した。発掘調査は冷水山根遺跡に引き続いで6月2日から実施した。

- 6月2日 発電機・ベルトコンベア等の発掘調査用リース機材到着、プレハブ用地内の整備を行った。
- 6月3日 発電機とベルトコンベアとの配線工事完了。調査区内の枝・丸太を除去。調査区下に水路があるため、土留め棚を設置。
- 6月4日 メインベルト2本を設定し、農道上部西側より粗掘開始。I層から縄文中期～後期の土器が出土した。斜面の堆積のため、だいぶ擾乱・逆転がみられた。
- 6月14日 基本層序確認のため、粗掘と並行して西側ベルト脇にトレンチを設定。
- 6月23日 西側トレンチ上半分の掘下げ終了。MF54付近では3mもの深さにおよび、湧水により作業不能になった。主たる遺物包含層はIII層～V層である。
- 6月28日 西側トレンチ掘下げ終了。湧水により下部は1m程度水没している。最も厚い遺物包含層はIV層である。
- 7月1日 農道上部中央部分精査終了。
- 7月6日 排土置場に余裕が無くなってきたため、排土の除去について北秋田農林事務所に依頼。
- 7月7日 北上市内の遺跡整備に関して、北市教育委員会高橋文明主査ら来跡。当遺跡出土の大型自然礫を環状列石復元のため持ち帰りたいとのこと。また農道上部西側の地山付近に多量の礫の混入を検出。
- 7月16日 農道上部東側部分の調査にかかった。
- 7月19日 農道上部西側部分精査終了。
- 7月20日 北秋田農林事務所と調査区中央をはしる農道の付替工事について打ち合わせ。
- 7月21日 農道上部東側部分精査終了。これをもって農道上部の精査を全て終了した。
- 7月22日 ベルトコンベアをセットし、農道下部西側部分より粗掘を開始。

寒沢II遺跡



第21図 寒沢II遺跡 調査区および地形図



第22図 寒沢II遺跡 造構配置図

- 7月26日 農道付替工事のため現場での作業を中止した。
- 7月27日 工事未了のため農道下部東側の急斜面にトレンチを入れた。3本のトレンチにより、地滑りを起こしていることを確認。
- 7月29日 前日からの豪雨により、沢の増水・激しい湧水・埋土の崩落などの危険のため現場での作業を中止した。
- 7月30日 農道下部西側部分の精査終了。
- 8月2日 農道下部中央部分の粗掘を開始。
- 8月4日 調査区中央を走る農道に沿って中央継断面図の実測を開始。
- 8月9日 農道下部中央部分の精査終了。農道下部東側部分の急斜面にトレンチを追加。
- 8月10日 農道下部東側部分 L R 5 2 グリッドに S N 0 1 (屋外炉) 検出。石開炉を呈し、周囲には炭が散乱していた。
- 8月24日 S N 0 1 の精査終了。
- 8月25日 農道下部東側部分の急斜面にさらに1本のトレンチを入れ、急斜面部分の精査を終了した。
- 8月26日 農道下部東側部分の精査終了。中央継断面およびメインベルト下部の実測を終了。
- 8月27日 平面図および断面図のチェックを行い、並行して未洗浄の土器を洗浄した。
- 8月31日 発掘現場の発掘器材を整理し、寒沢II遺跡発掘調査の全工程を完了した。

## 第2章 調査の記録

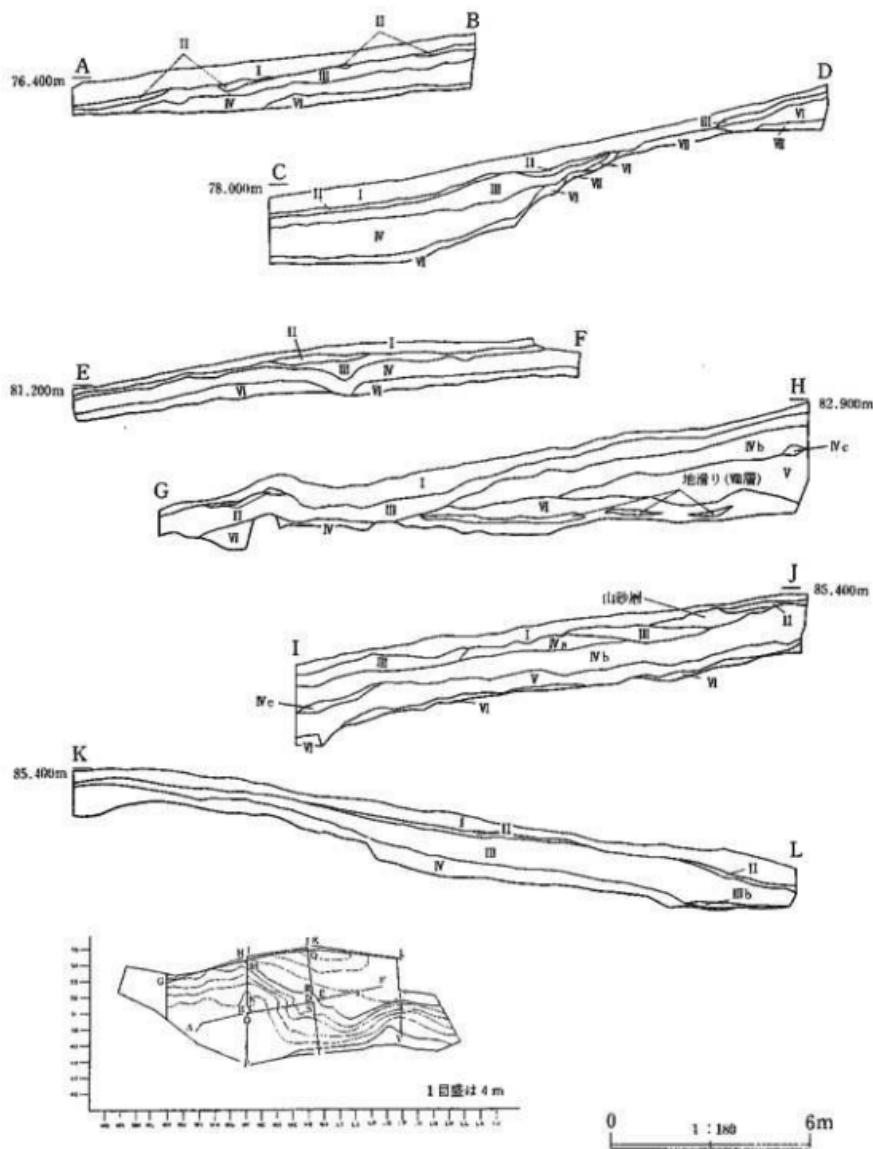
### 第1節 遺跡の基本土層 (第23図、第24図)

調査区は南東に面した斜面にあり、地形も大きく変化している。現地形は斜面中腹を農道が走り、斜面の下部には沢が流れている。農道上部の中央部分～西側部分 (MFライン付近) では3mもの堆積土を確認し、急傾斜および湧水のため作業は困難を窮めた。また地山 (VII層) の精査を進めるにつれ、かなり広い範囲で地滑りを検出した。農道下部の中央部分～西側部分では部分的に斜度が40°を越え地滑りが顕著で、一部はトレンチによる精査を実施した。

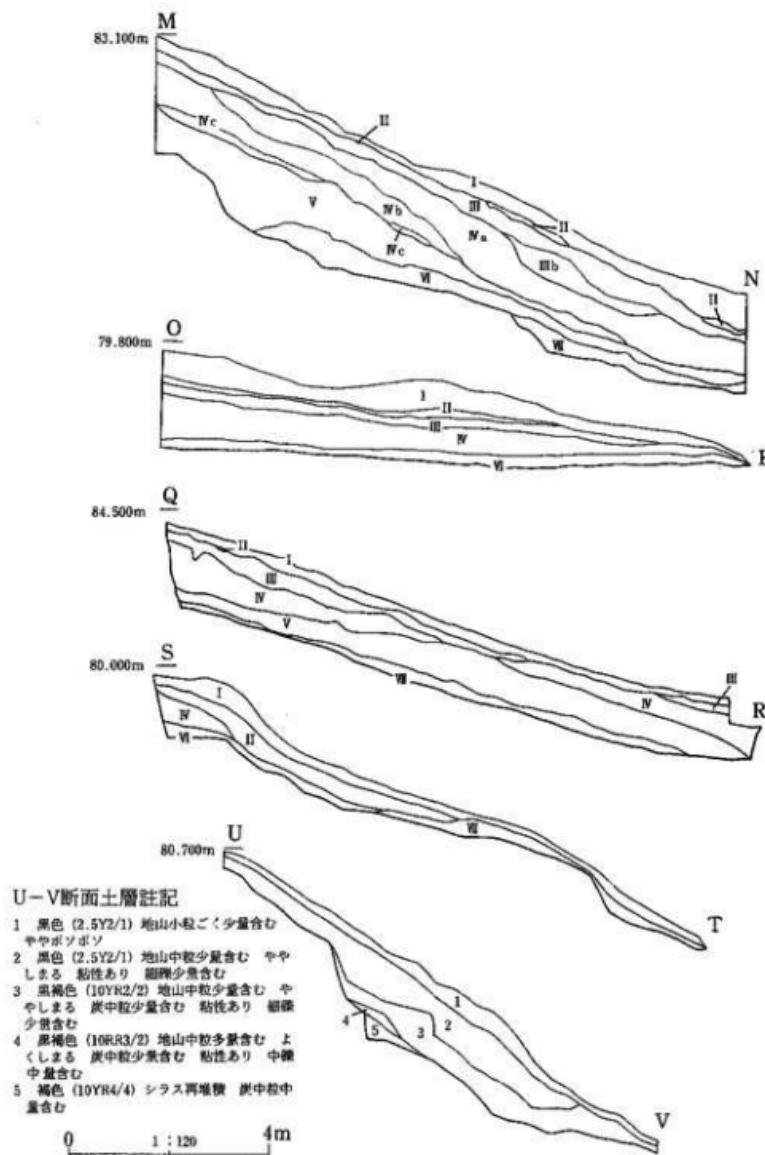
遺跡の基本層序は次のとおりである。

- I 層 黒色 (10YR2/1) を呈する表土。地山 (軽石) 粒をごく少量含む。
- II 層 黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、十和田火山起源の大湯浮石を中量含む。

寒沢II遺跡



第23図 寒沢II遺跡 調査区土層堆積状態実測図(1)



第24図 寒沢II遺跡 調査区土層堆積状態実測図(2)

## 寒沢II遺跡

- III 層 黒褐色 (10YR2/2) を呈する。
- IIIb層 黒褐色 (10YR2/3) を呈し、細礫をごく少量含む。粘性強い。
- IVa層 暗褐色 (10YR3/3) を呈し、細礫をごく少量含む。
- IVb層 暗褐色 (10YR3/4) を呈し、細礫を中量含む。よく締まる。粘性強い。
- IVc層 暗褐色 (10YR3/4) を呈し、地山ブロック多量混入。
- V 層 黒褐色 (10YR3/2) を呈し、地山大粒多量混入。炭大粒多量混入。やや緩い。
- VI 層 黒 色 (10YR2/1) を呈し、湧水。やや緩い。
- VII 層 褐 色 (10YR4/6) を呈する漸移層。細礫及び地山大粒中量混入。粘性強い。
- VIII 層 橙 色 (7.5YR6/8) を呈する地山土。砂礫及び細礫を少量含む。酸化鉄分含む。

IV層中から屋外炉を検出した。地山はいわゆるシラスであるが、その下部に河成礫層が堆積しており部分的に露出している。

## 第2節 検出遺構と出土遺物（第22図、第25図）

今回の調査では縄文時代中期に属すると思われる屋外炉1基を検出した。

### 屋外炉 1基 (S N 0 1)

屋外炉はIV層の堆積土のはば中央部分で検出し、周囲には炭の散乱が認められた。

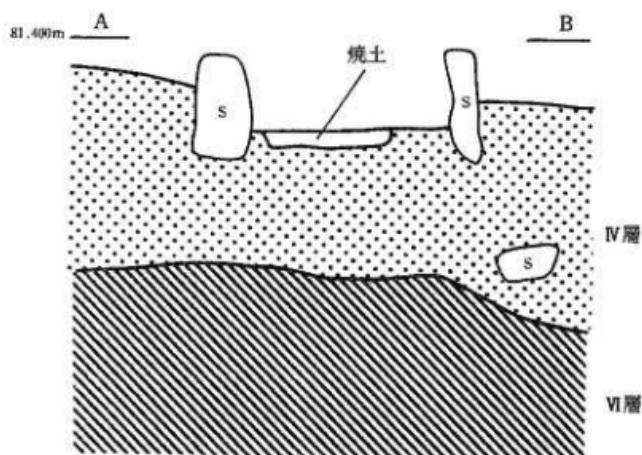
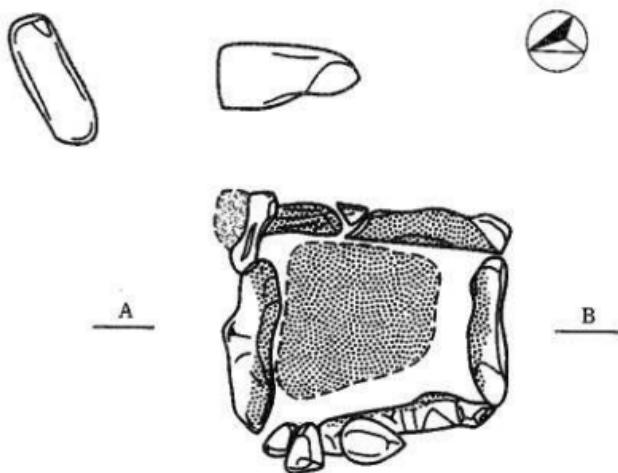
また調査区全域が斜面に位置するため全域にわたって縄文時代前期後半～後期中葉の遺物が出土するが、調査区のMFラインを中心とする範囲 (MB 5 2～5 4・MC 5 1～5 4・MD 5 1～5 4・ME 5 2～5 4・MF 5 2～5 4・MG 5 2～5 4グリッド) は特に遺物が集中して出土する「土器捨て場」となっている。この範囲はMFラインを中心として沢状地形を呈し、現地表から地山までの深さは3m余りに達する。主たる遺物包含層はIII層～V層である。

#### (1) 屋外炉

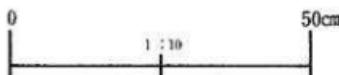
##### S N 0 1 (第25図)

[検出位置] 調査区東側の中央部、台地の斜面中腹に開けた小平坦地の縁辺部であるL R 5 2グリッドで検出。主として縄文中期前葉の遺物を出土するIV層中から検出した。S N 0 1付近におけるIV層の層厚は50～60cmで、S N 0 1はIV層の堆積土層厚のはば中間部分で検出した。

[形態と規模] 石圓炉で長軸50cm、短軸45cmをはかる。炉を構成する石は加熱され赤変してい



炉（焼土）  
棗色（GYR6/8）よくしまる 捶土



第25図 SN01層外炉

## 寒沢II遺跡

た。炉の内側ではIV層堆積土が3cmほど焼土化していた。周囲からは柱穴および堆積土を掘りこんだ形跡は認められなかった。炉を中心とする2m×4mほどの範囲に、径1cm程度の炭化物が散乱していた。

### 第3節 遺構外出土遺物（第26図～第78図）

#### （1）層序と堆積状態

調査の結果、MFラインを中心とする沢状地形が確認され、MB52～54・MC51～54・MD51～54・MF52～54・MG52～53グリッドにわたる範囲への遺物の集中がみられた。面積260m<sup>2</sup>、深さ3mにおよぶこの「土器捨て場」では、3層にわたる遺物包含層から多くの土器・石器が出土した。

基本層としてI～VII層を確認した。本遺跡における唯一の遺構であるSN01はIV層中から検出したが、共伴する遺物は確認できなかった。すなわち本遺跡における出土遺物はすべて遺構外から出土したものである。

「土器捨て場」メインセクション（MFライン）の堆積土はI～VII層に大別され、III～V層が主たる遺物包含層である。I層は表土、II層はいわゆる大湯浮石層であるが、両者とも台地上部からの崩落・流れ込みなどの影響を受けていると考えられ、遺物の出土量も極めて少ない。またVI層以下からの遺物の出土はなかった。出土した遺物は縄文時代前期後半～後期中葉の土器・石器などである。このうち主体をなすのは中期前葉の遺物である。後期の遺物は全体の1割程度であり、前期の遺物は散見されるにすぎない。

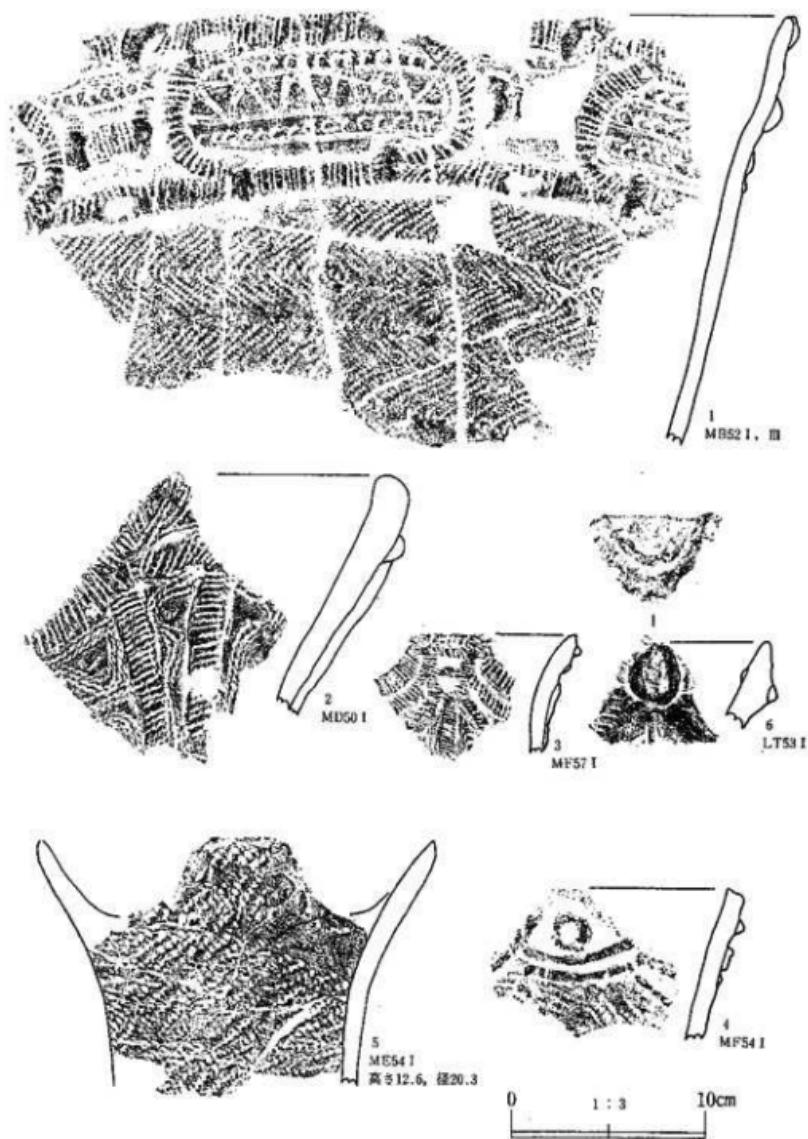
出土量は縦34cm×横54cm×深さ18cmの遺物収納用コンテナで90箱にのぼった。

#### （2）第I層出土遺物（第26図～第30図）

第I層から出土した遺物は、II群（縄文時代中期の土器：1a・1b・2～5・7・9・10類）・III群（縄文時代後期の土器：1類）の土器、石槍（II・IV類）、石匙（II類）、竪状石器（III類）、搔器（I・II類）、削器（III類）、半円状扁平打製石器（IV類）、凹み石（III類）、擦り石（II-a、II-b類）、石皿（I類）、不定形石器である。

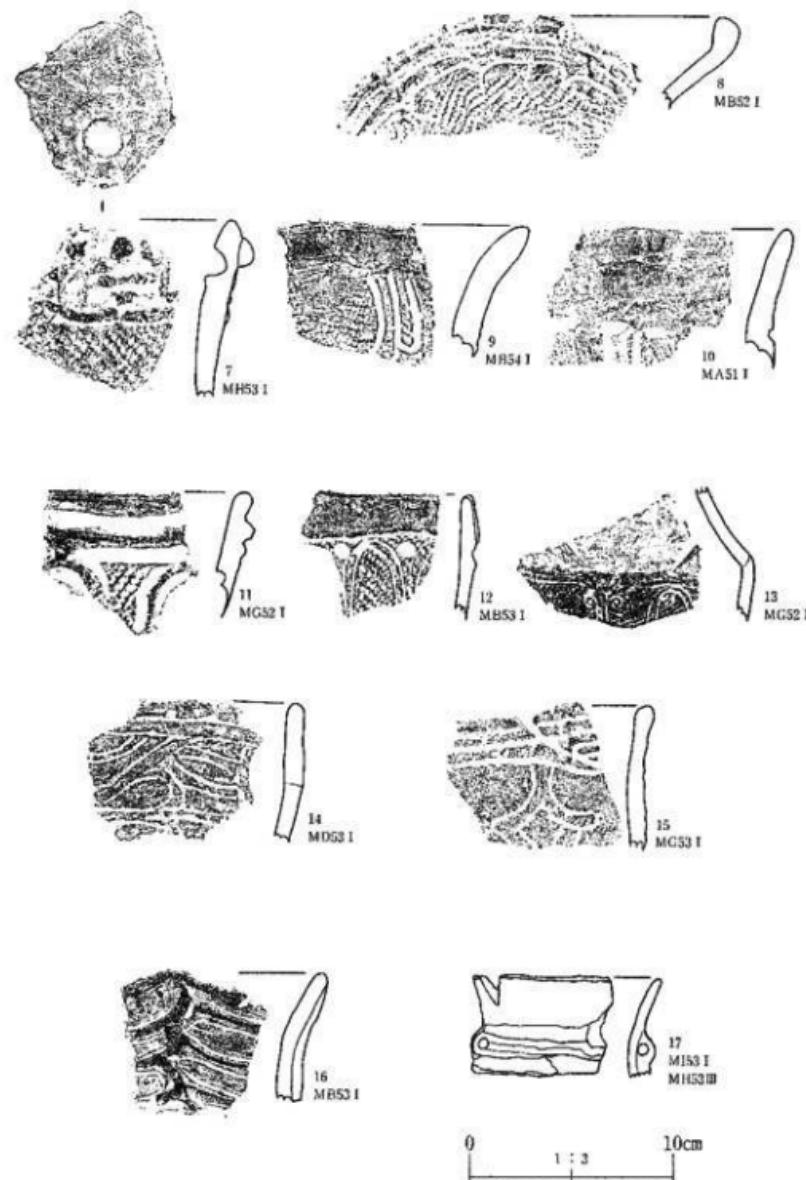
#### （3）第II層出土遺物（第30図）

第II層から出土した遺物は石錘（II類）のみである。

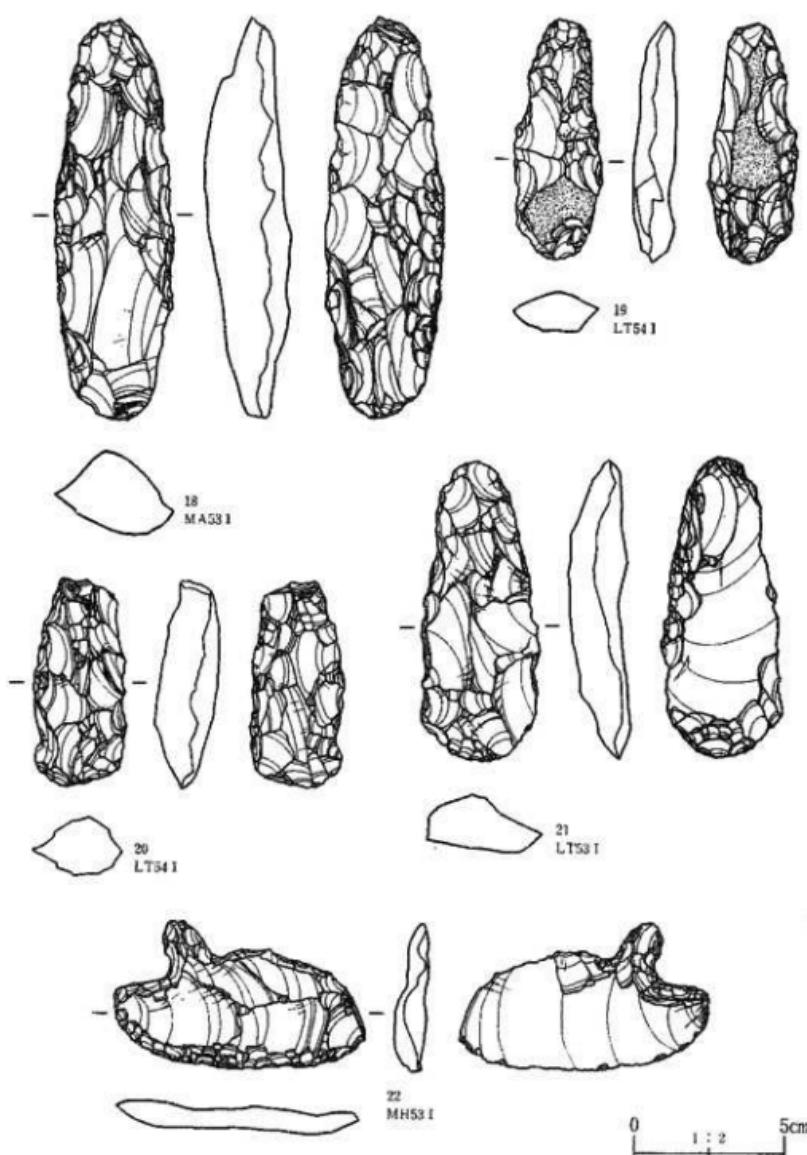


第26図 造構外出土遺物(1) I層 土器

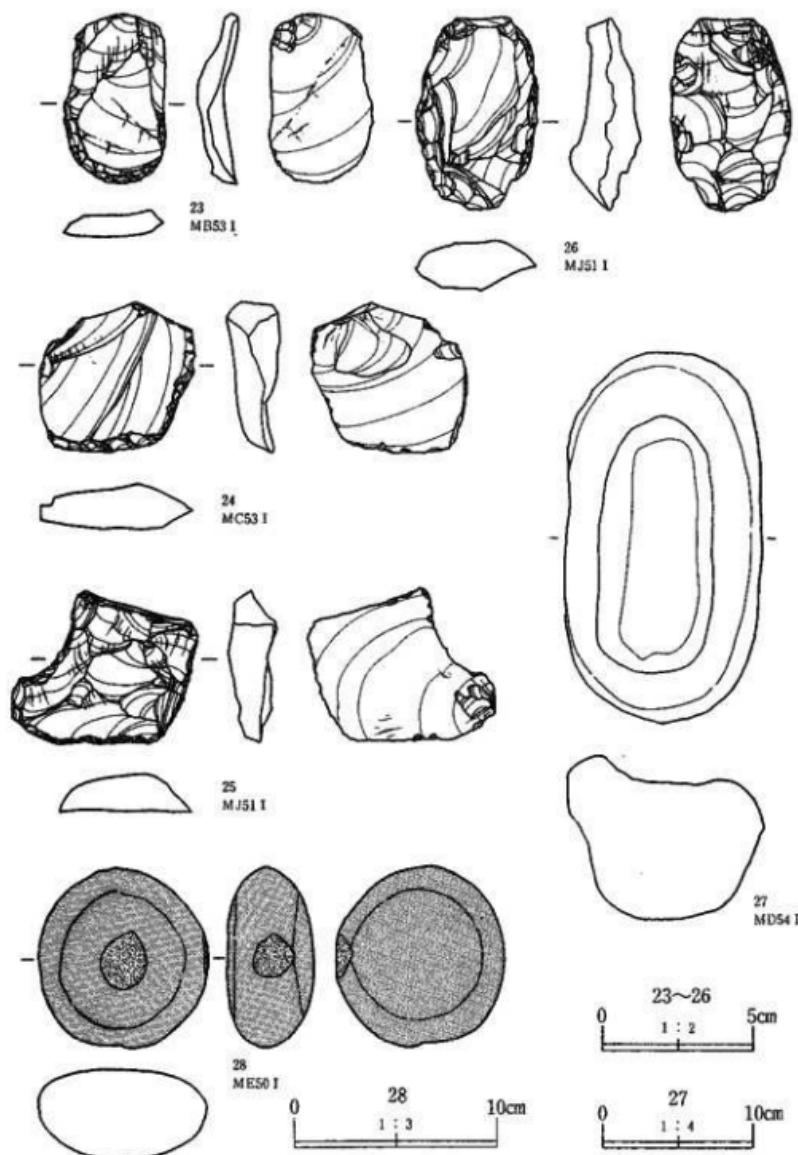
寒沢II遺跡



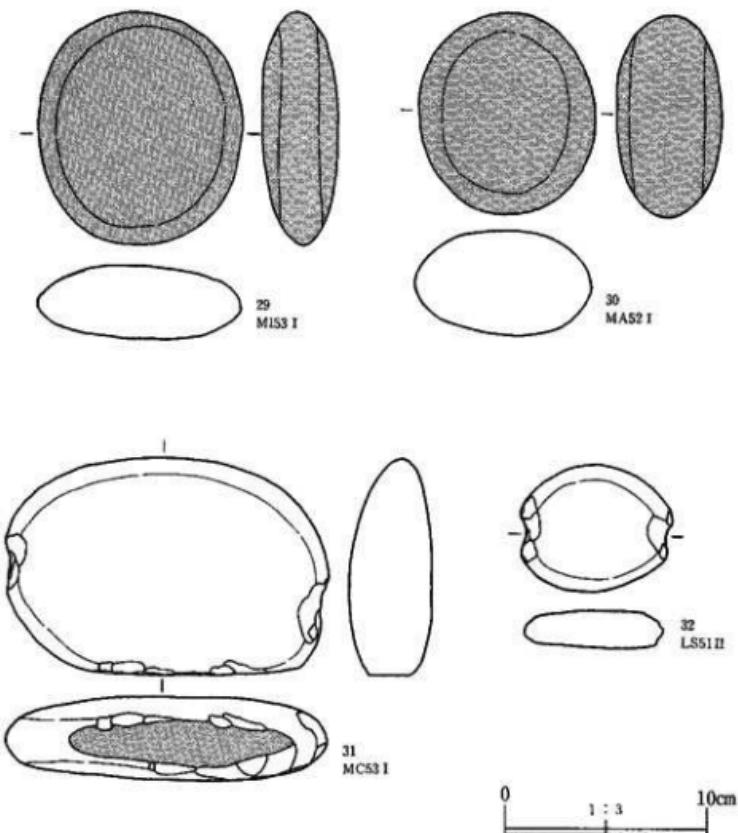
第27図 造構外出土遺物(2) I層 土器



第28図 造構外出土遺物(3) I層 石器



第29図 造構外出土遺物(4) I層 石器

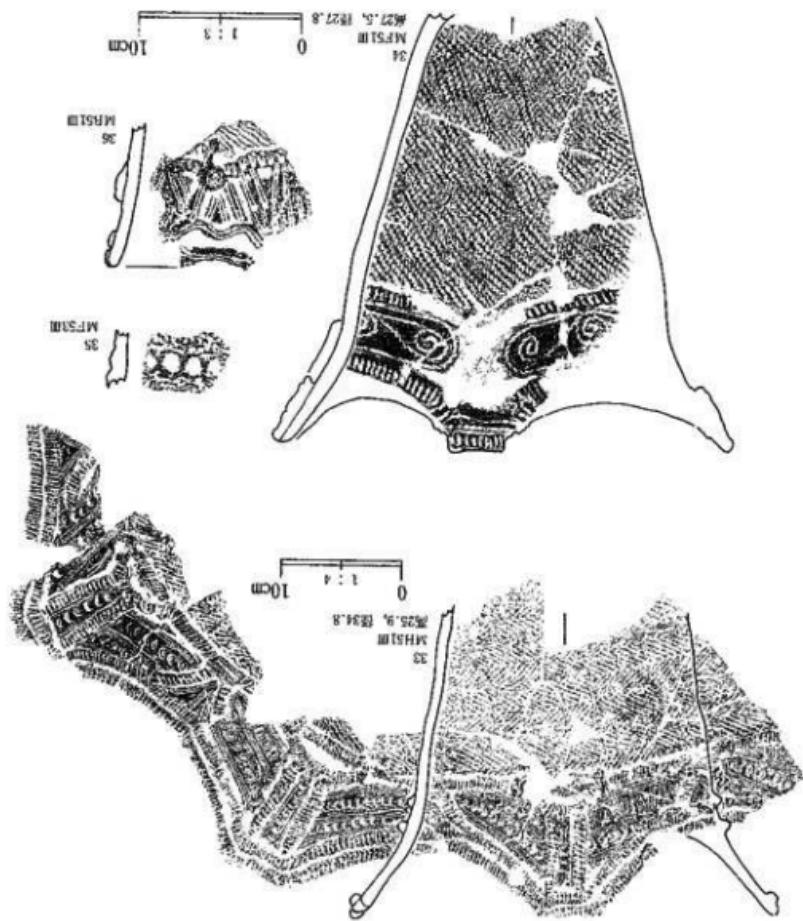


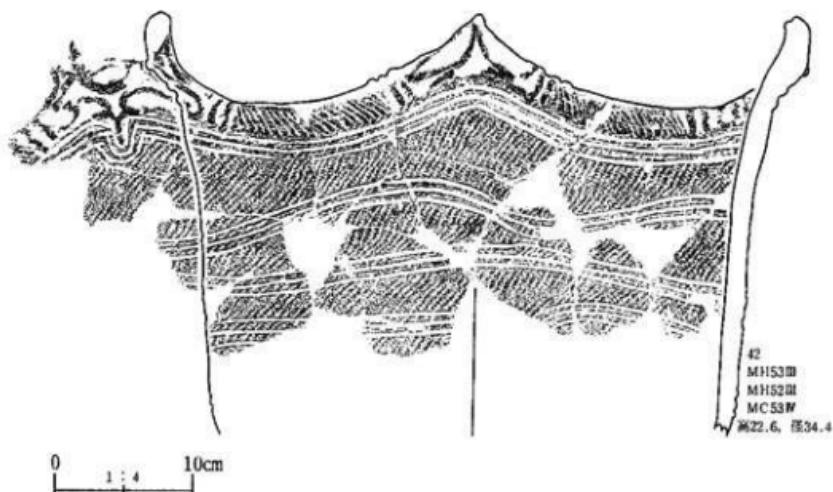
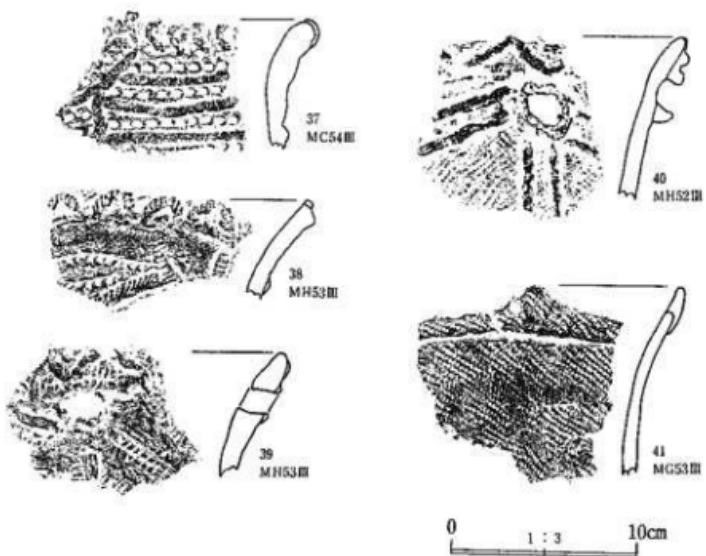
第30図 遺構外出土遺物(5) I層・II層 石器

## (4) 第III層出土遺物 (第31図~第43図)

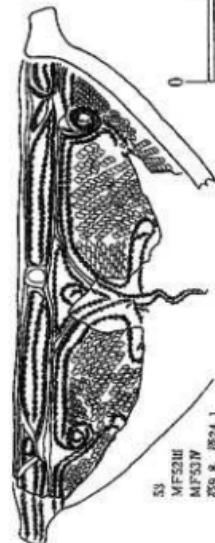
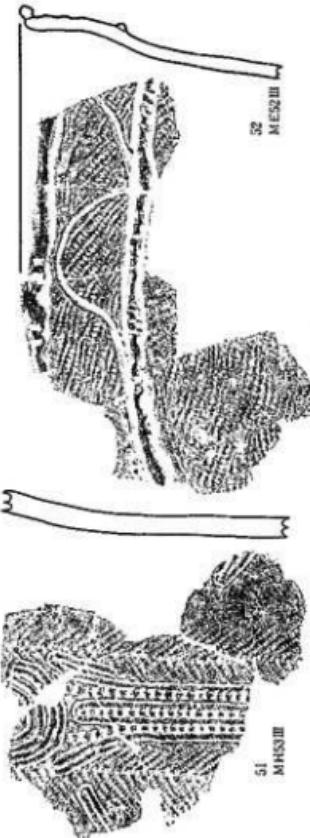
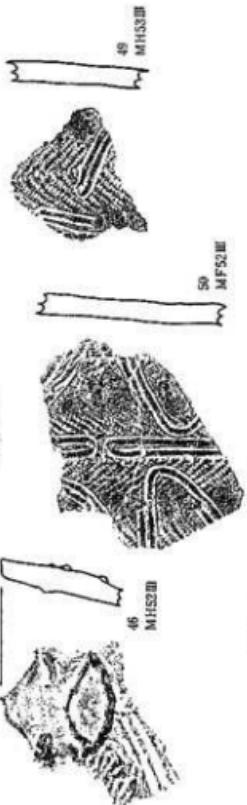
第III層から出土した遺物は、I群（縄文時代前期の土器：1b類）・II群（縄文時代中期の土器：1a・1b・1c・2～10・12類）・III群（縄文時代後期の土器：1・2類）の土器、石槍（III類）、

第31圖 遺構外出土遺物(6) III層 土器





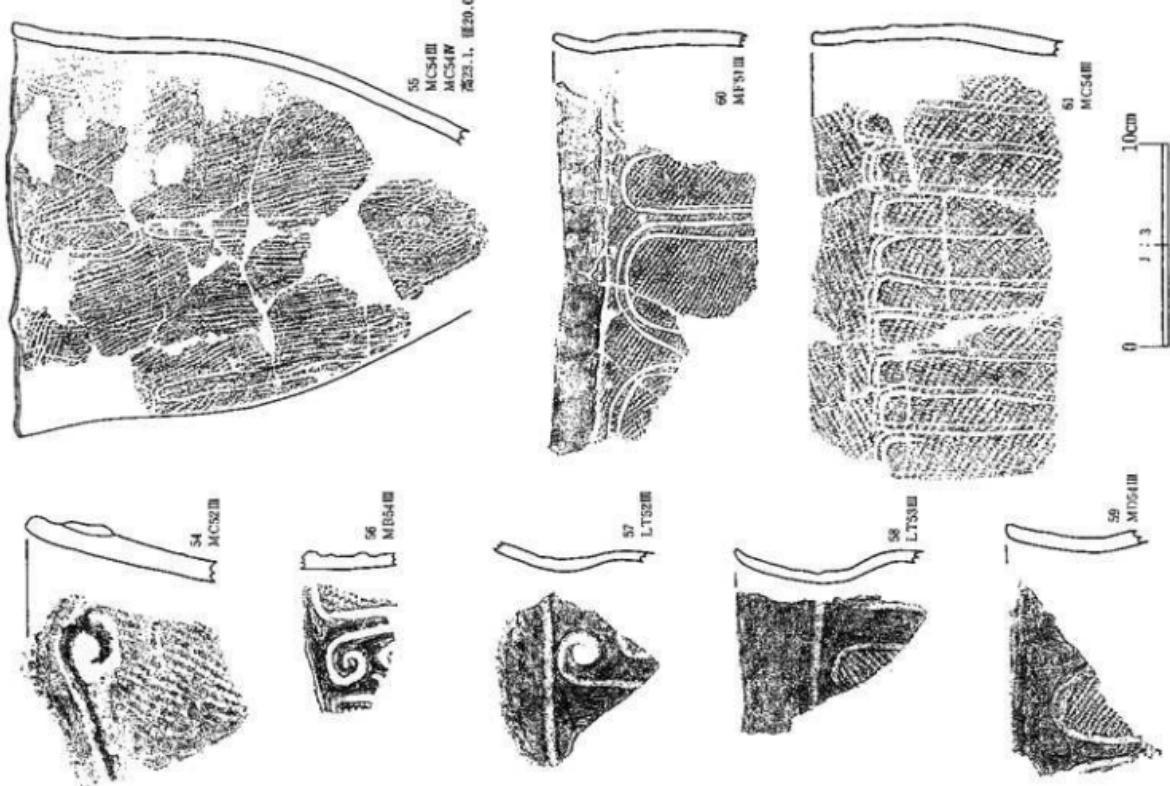
第32図 造構外出土遺物(7) III層 土器



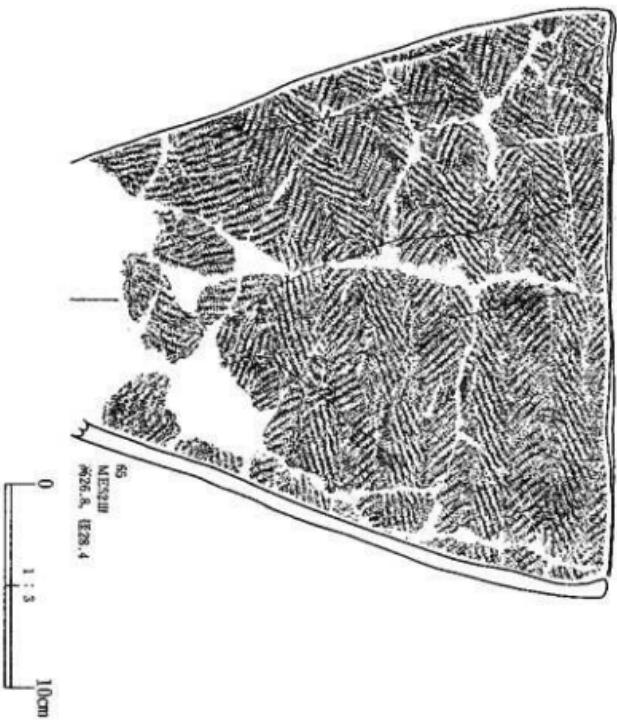
53  
M TS3 III  
M TS3 IV  
259 R. 8224.1

1 : 3

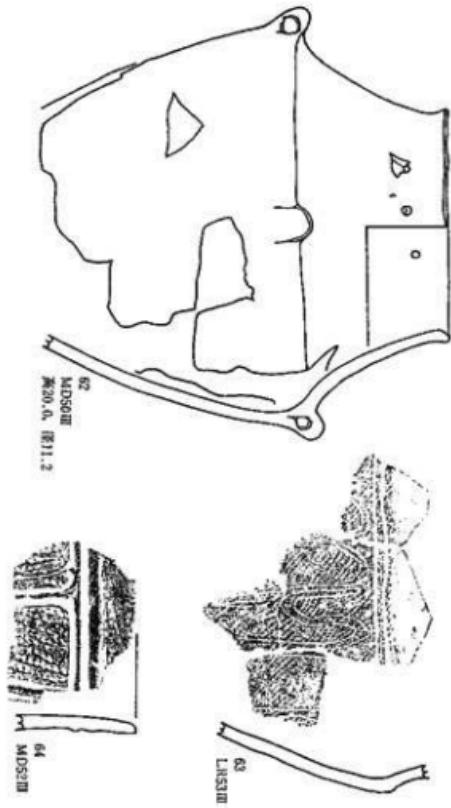
第33图 透栏外出土遗物(8) III层 壁器

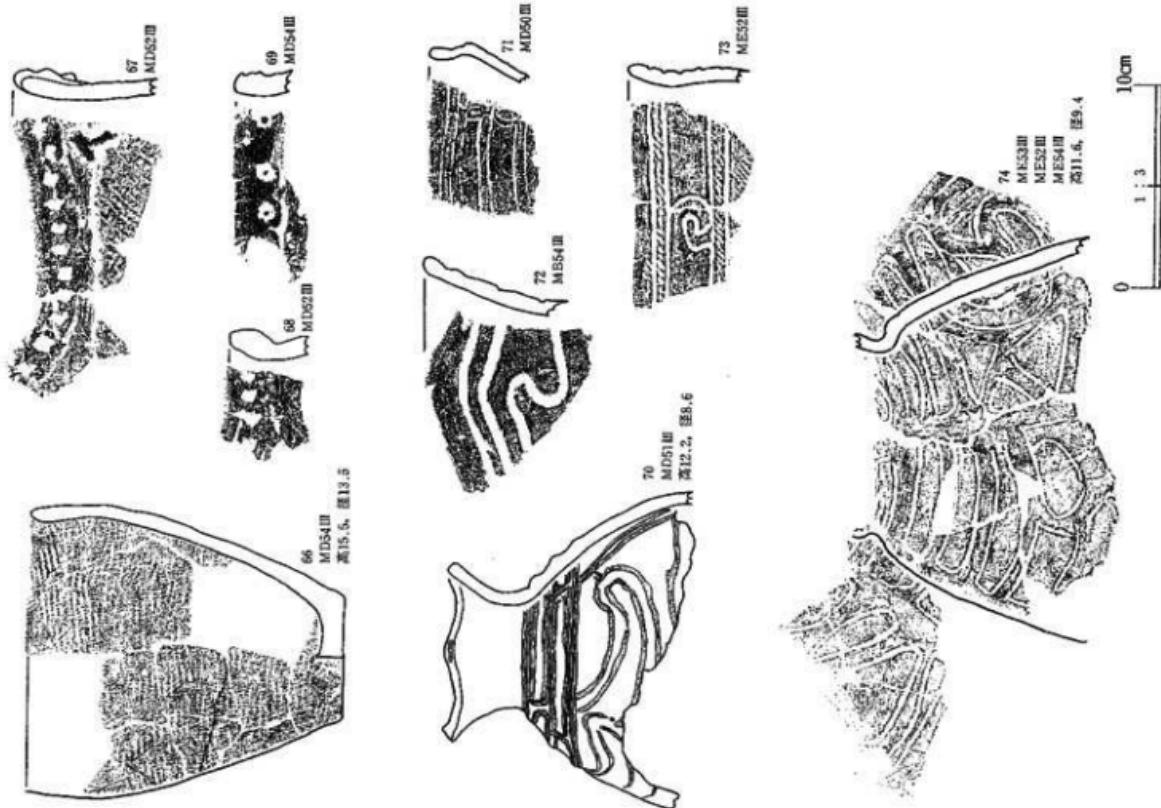


第34図 速水外出土遺物(9) III層 土器



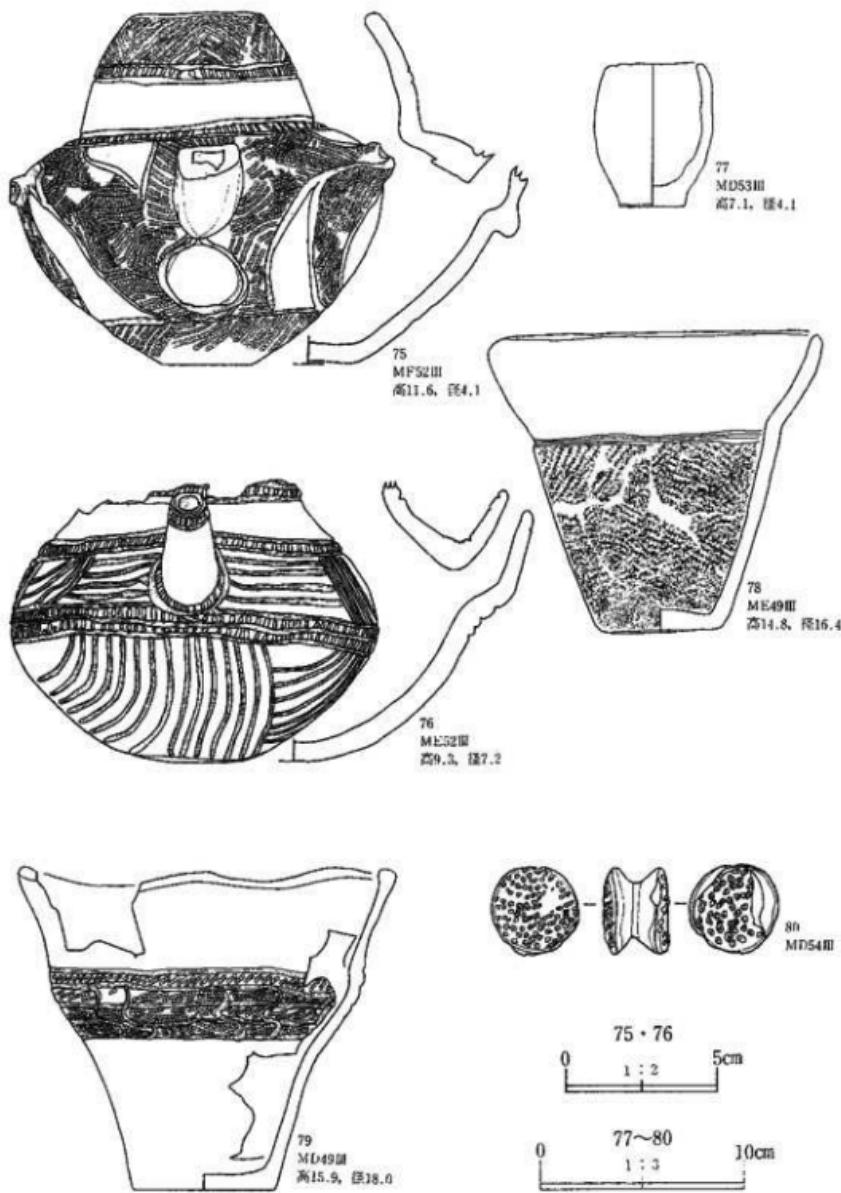
第35図 遺構外出土遺物(10) 三層 土器



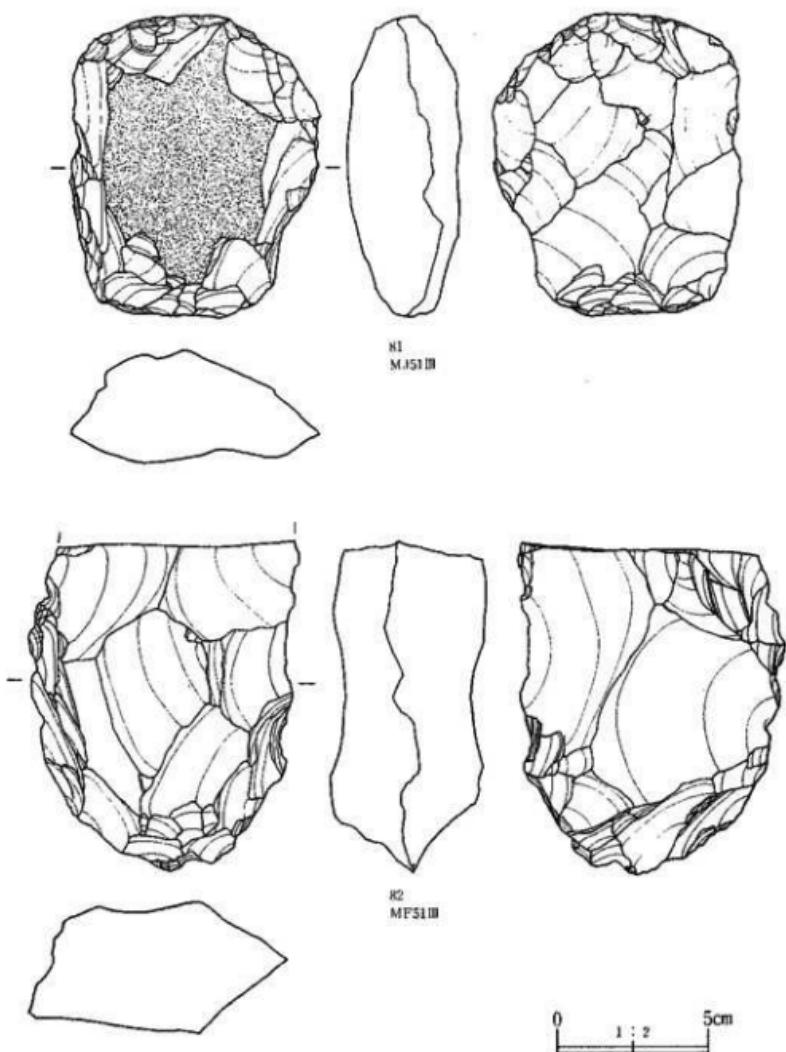


第36図 遠構出土遺物(11) III層 土器

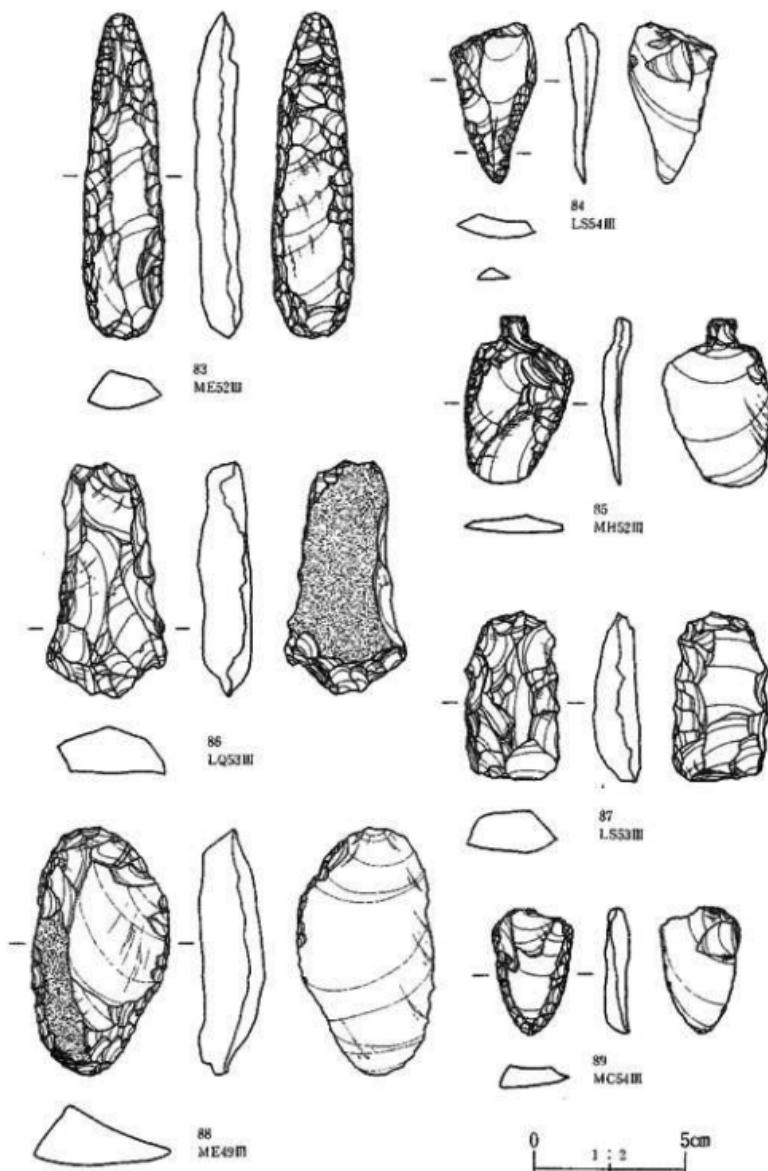
寒沢Ⅱ遺跡



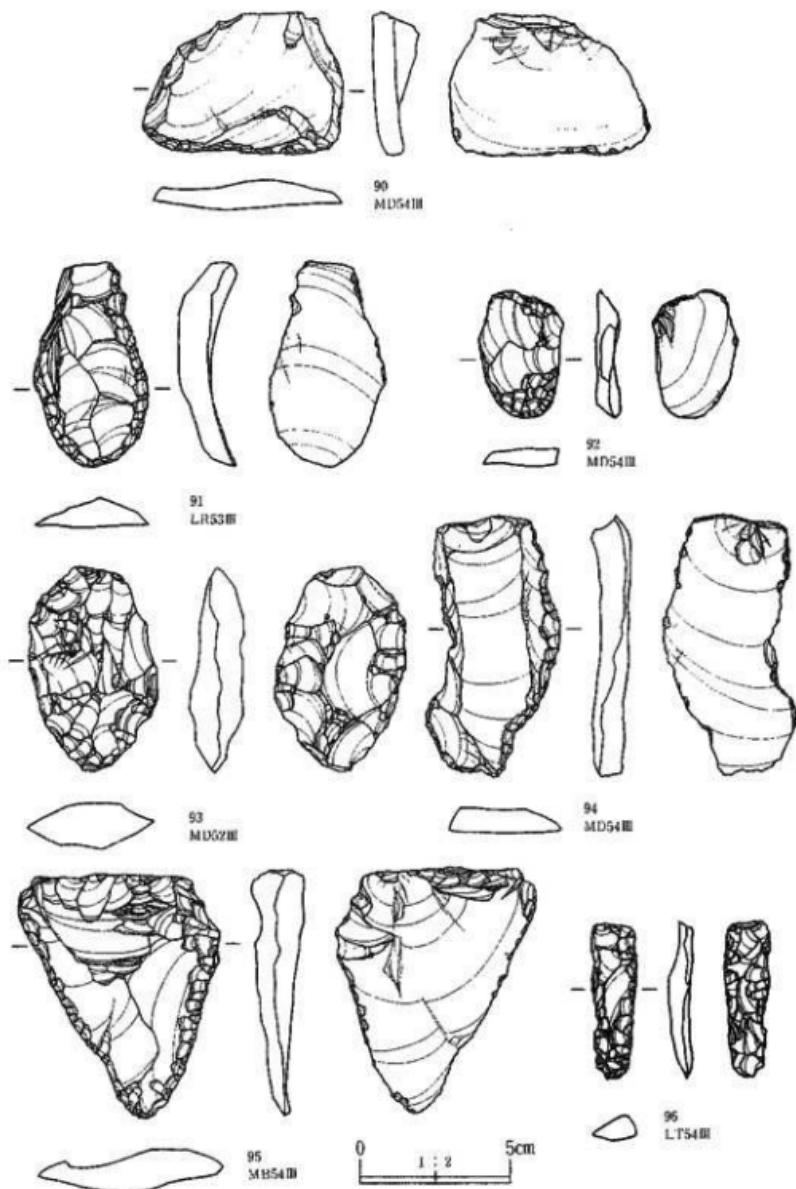
第37図 造構外出土遺物(12) III層 土器・土製品



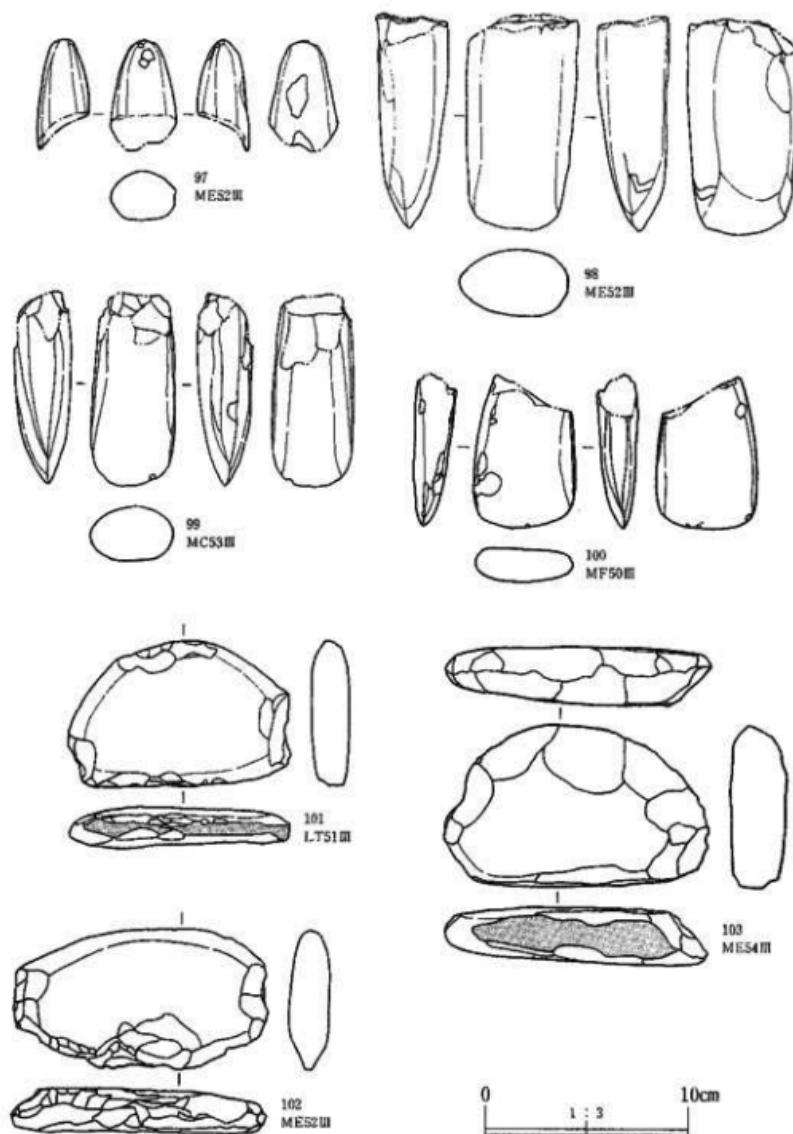
第38図 造構外出土遺物(13) Ⅲ層 石器



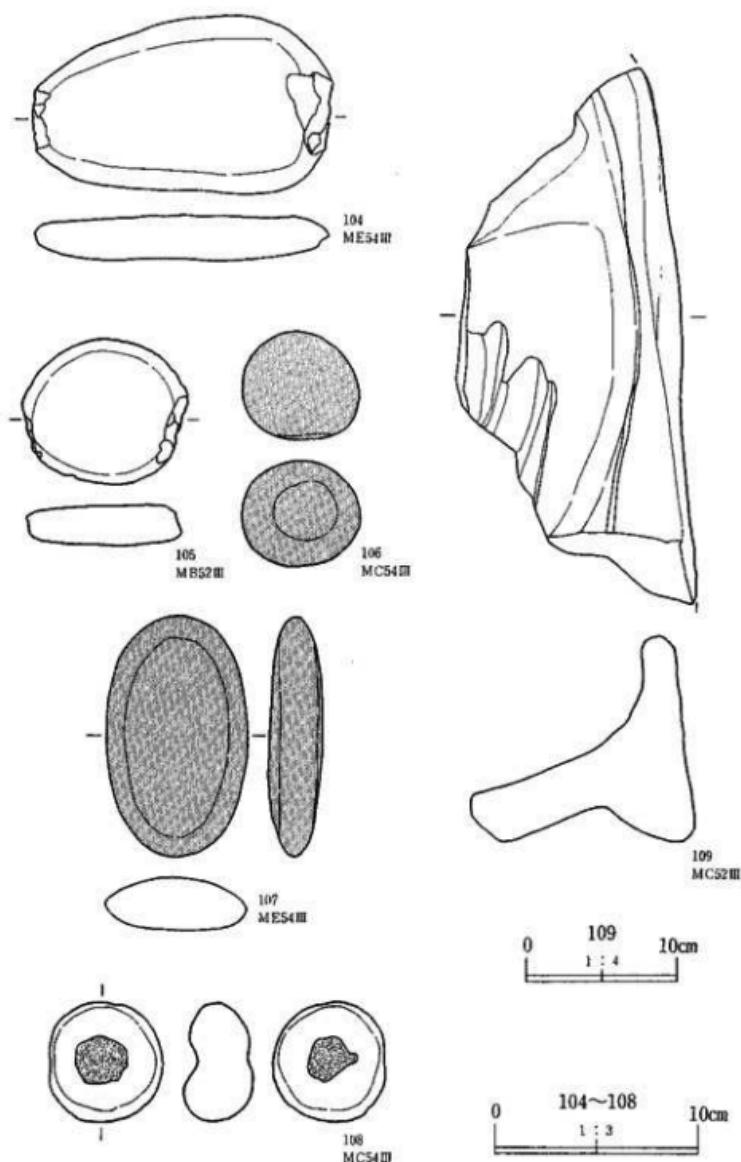
第39図 遺構外出土遺物(14) III層 石器



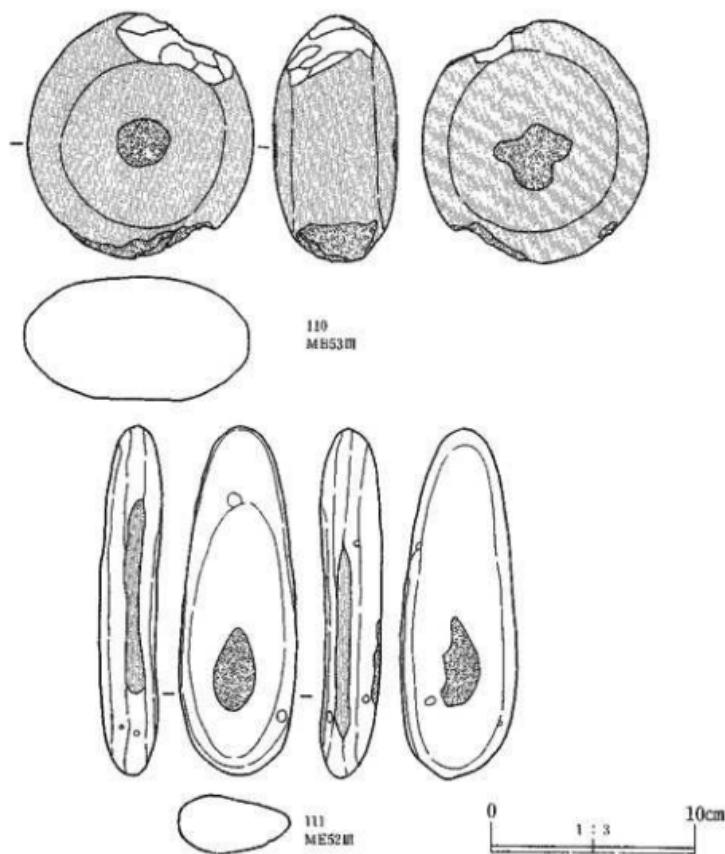
第40図 造構外出土遺物(15) 田層 石器



第41図 遺構外出土遺物(16) III層 石器

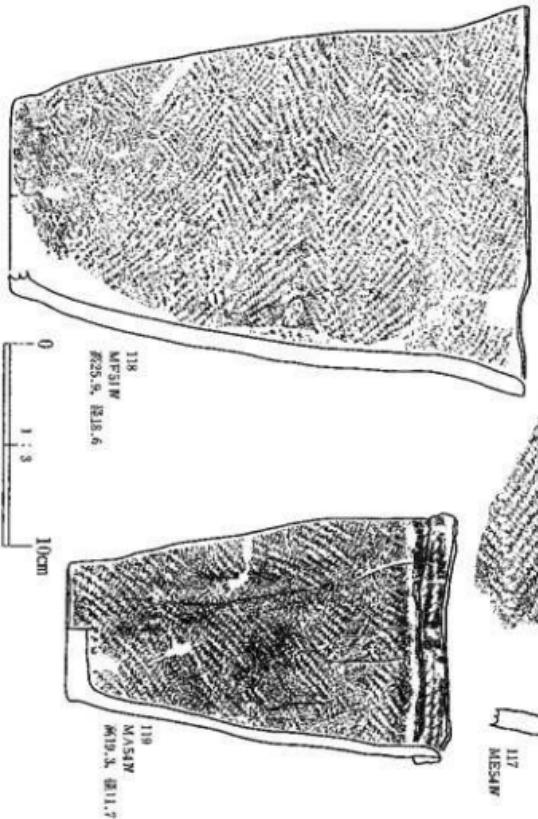
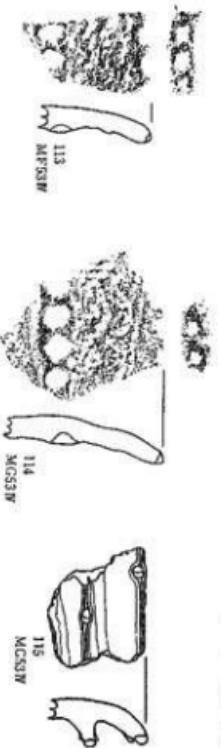


第42図 造構外出土遺物(17) III層 石器

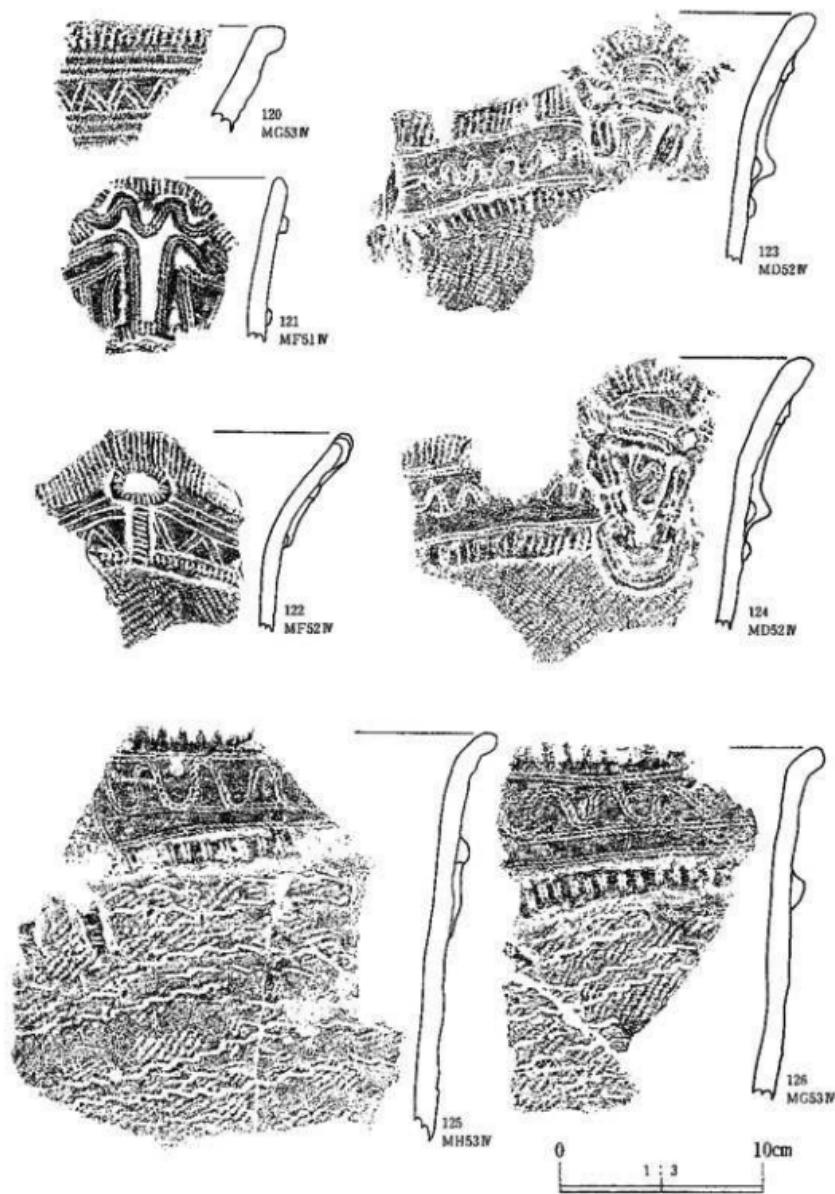


第43図 遺構外出土遺物(18) Ⅲ層 石器

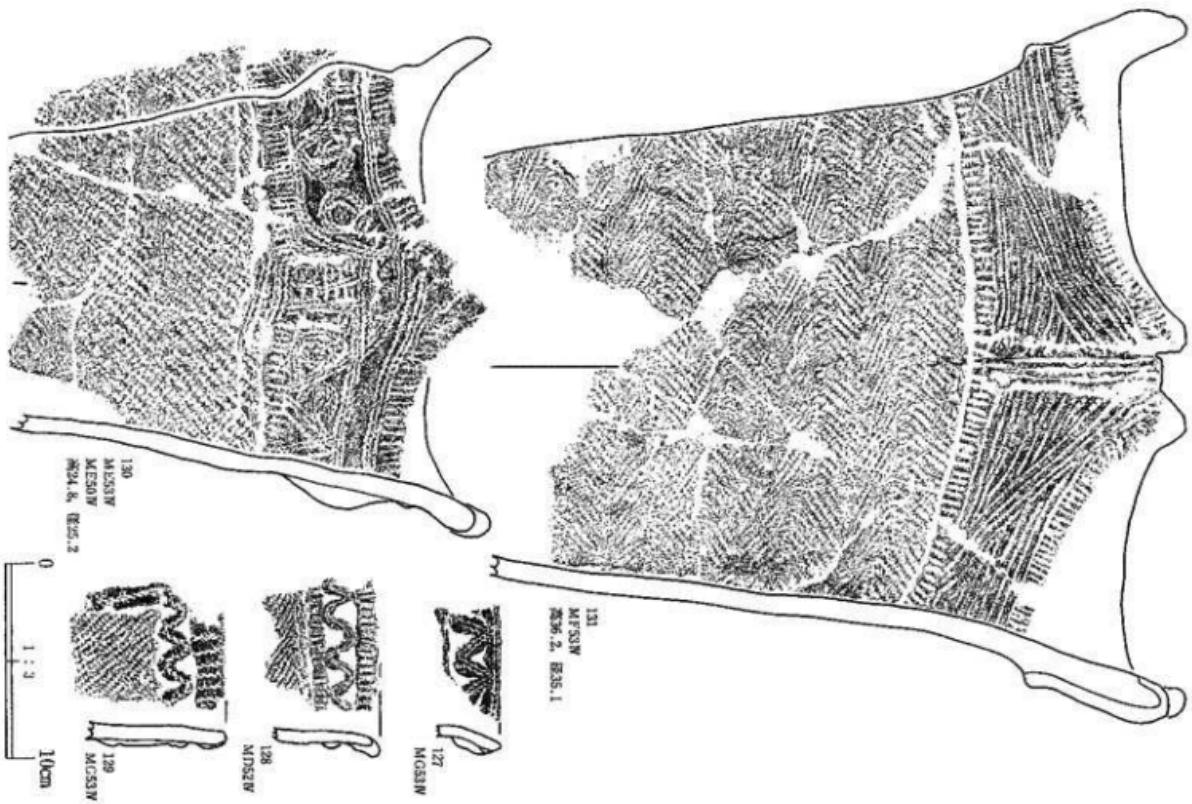
打製石斧（I・II類）、石錐（II類）、石匙（I類）、笠状石器（III・IV類）、搔器（I・II類）、削器（II・III類）、磨製石斧（I-b・II-a・II-b類）、半円状扁平打製石器（I・III類）、石錐（I・II類）、凹み石（I-a・II-a類）、擦り石（I・III-b類）、石皿（I類）、不定形石器・耳飾りである。



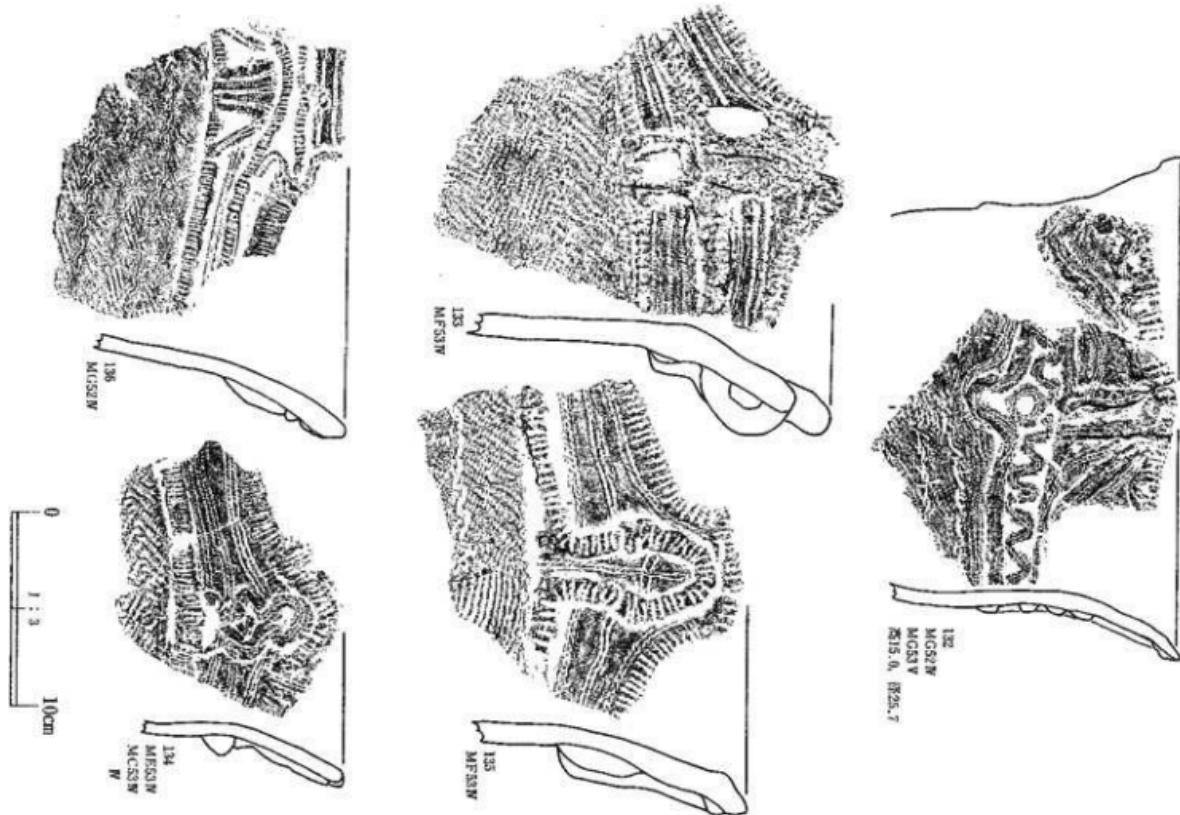
第44図 遺構外出土遺物(19) IV層 土器



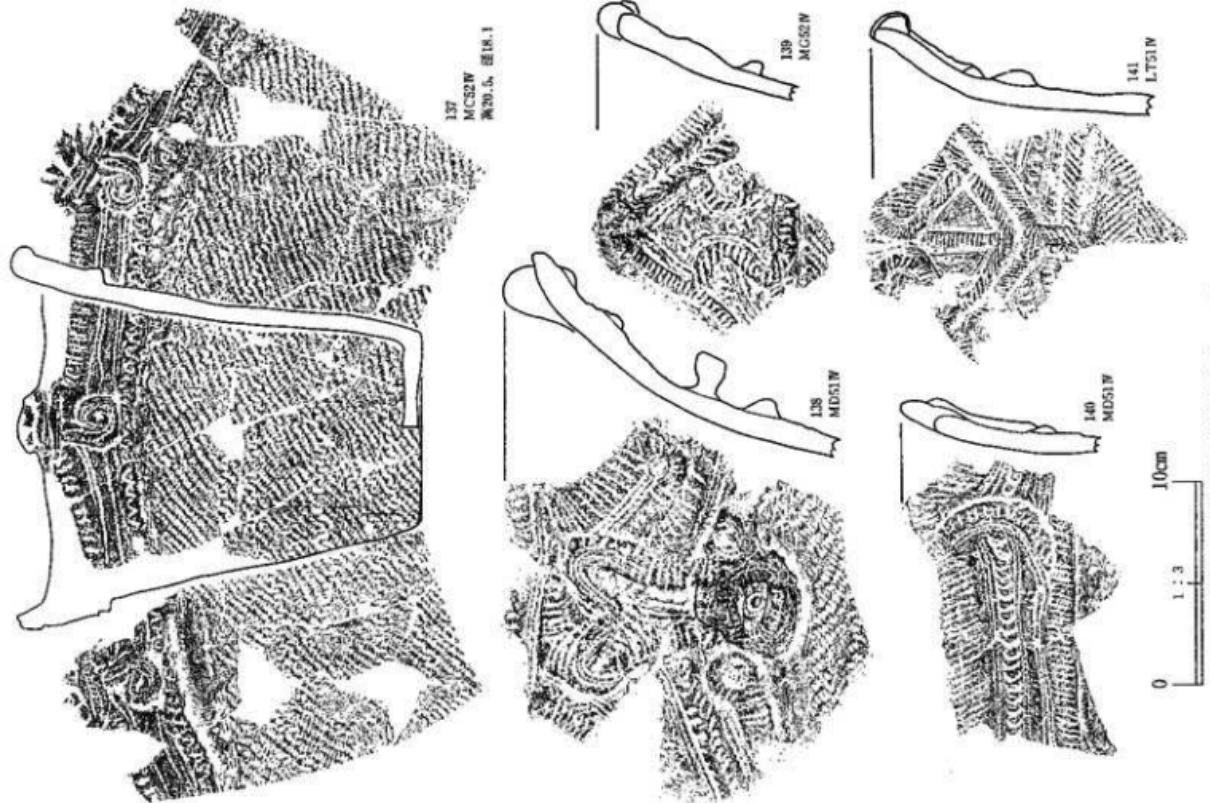
第45図 造構外出土遺物(20) IV層 土器



第46図 遺構出土遺物(21) IV層 土器

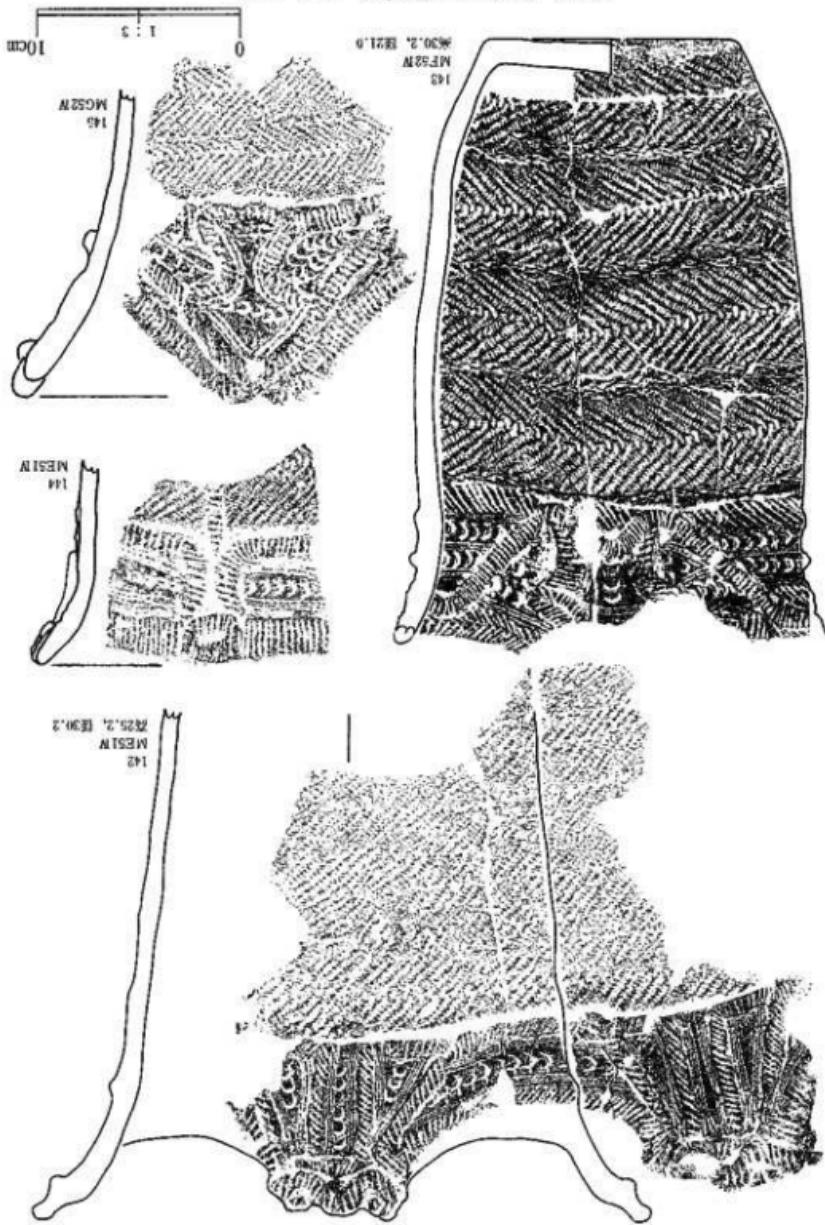


第47図 遺構外出土遺物(22) IV層 土器

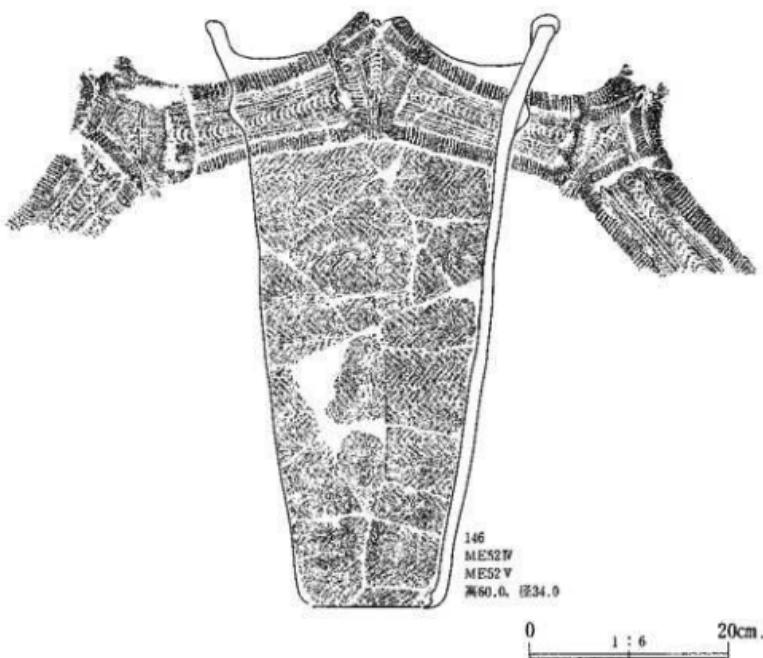


第48図 連続出土遺物(23) IV層 土器

第49圖 遺算外出土遺物(24) IV層 玉器



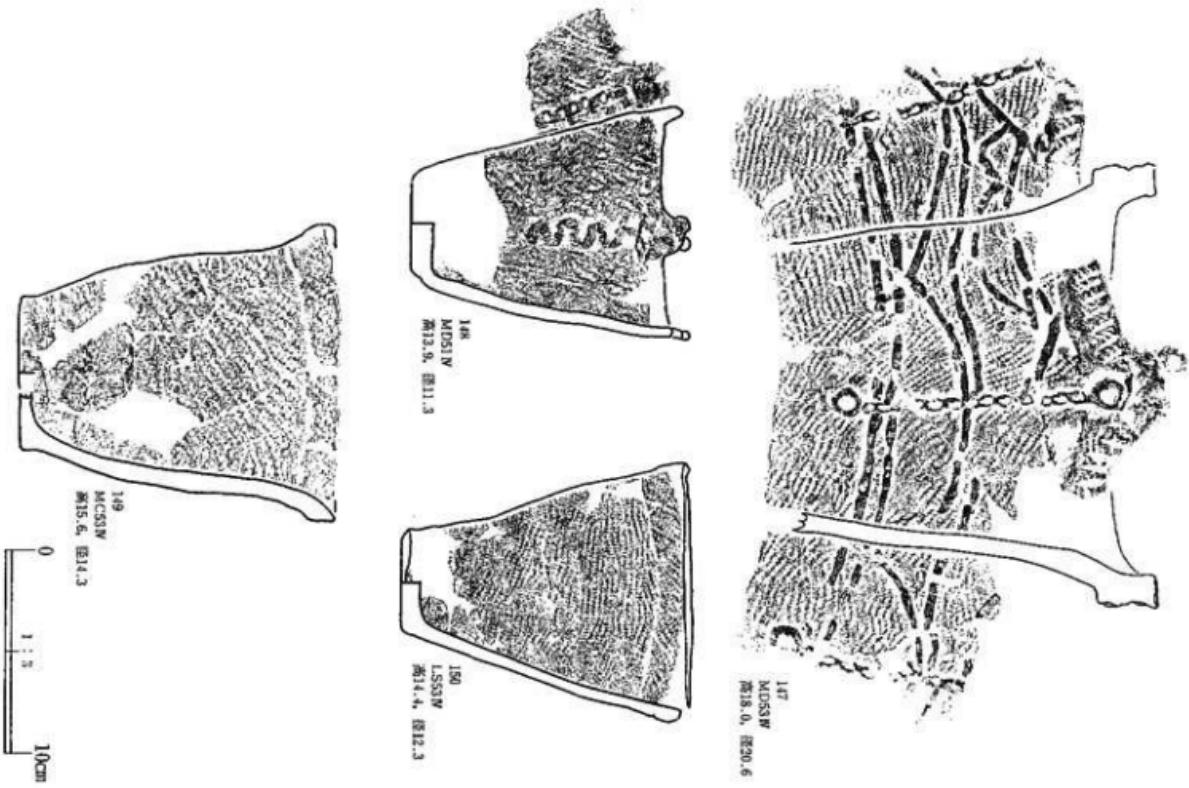
卷之三



第50図 遺構外出土遺物(25) IV層 土器

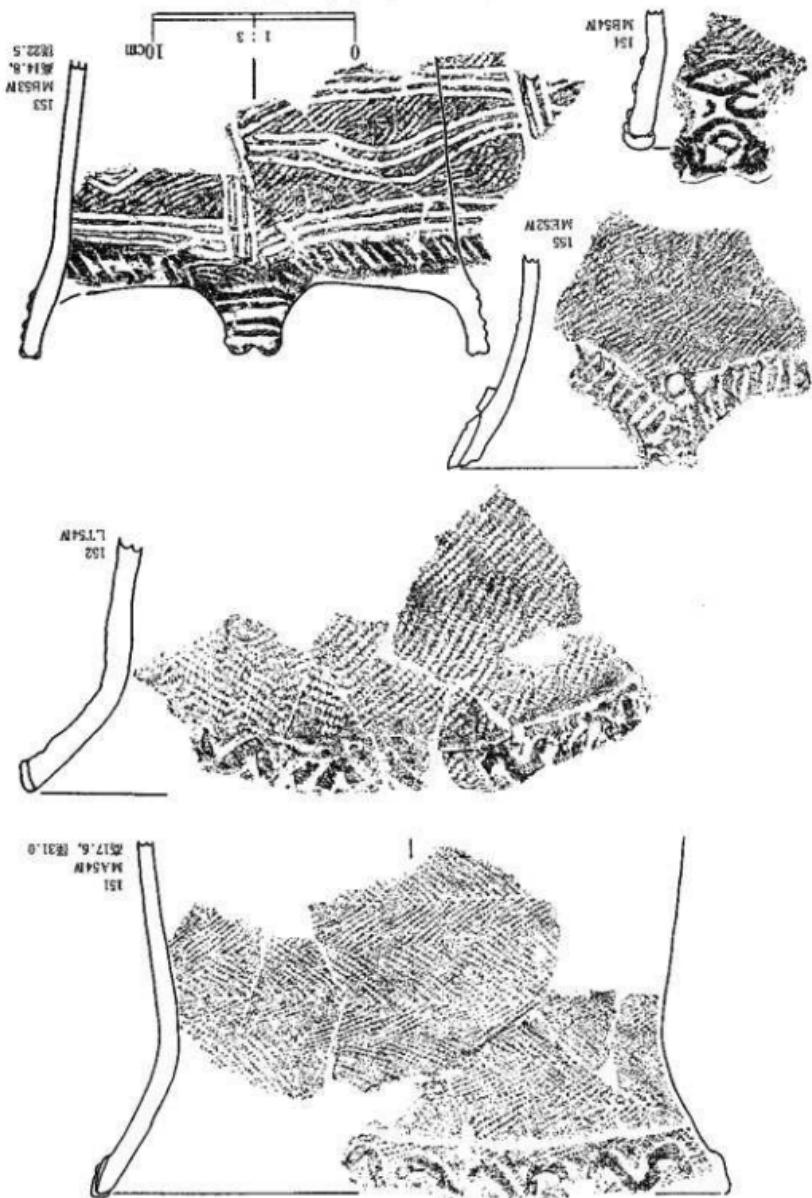
## (5) 第IV層出土遺物 (第44図~第65図)

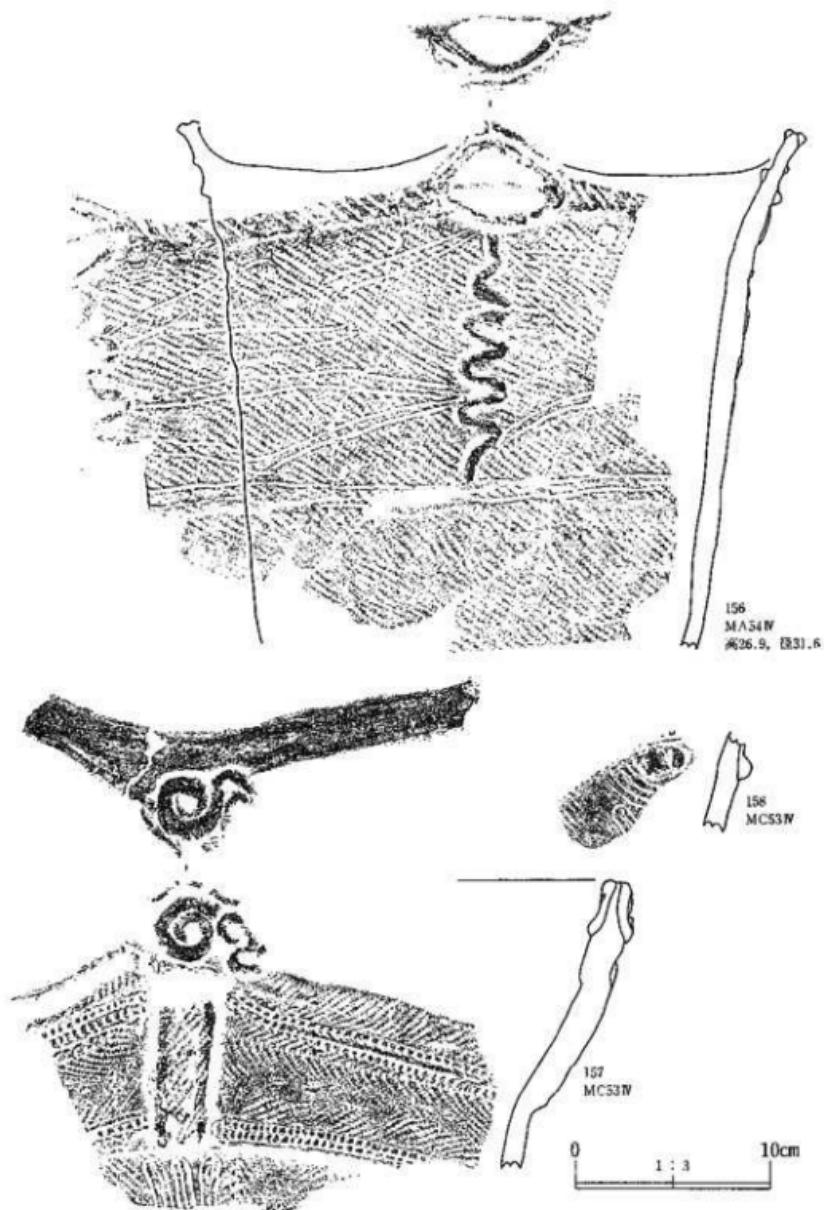
第IV層から出土した遺物は、I群（縄文時代前期の土器；1a・1b・2a・2b・3類）、II群（縄文時代中期の土器；1a・1b・2～9・11・12類）、III群（縄文時代後期の土器；1類）、IV群の土器、石鍬（I・III類）、石槍（I・II・IV類）、打製石斧（I・III類）、石錐（I類）、石匙（I～III類）、鎹状石器（I・II・V類）、搔器（I・II類）、削器（I類）、磨製石斧（I-a・II-b類）、半円状扁平打製石器（II～IV類）、扁平磨製石器、石錘（I類）、凹み石（I-a・I-b・II-a・II-b・III類）、擦り石（II-a・II-b・III-a類）、石皿（I類）、敲石、円盤状石製品（I～III類）、石棒である。



第51図 造構外出土遺物(26) IV層 土器

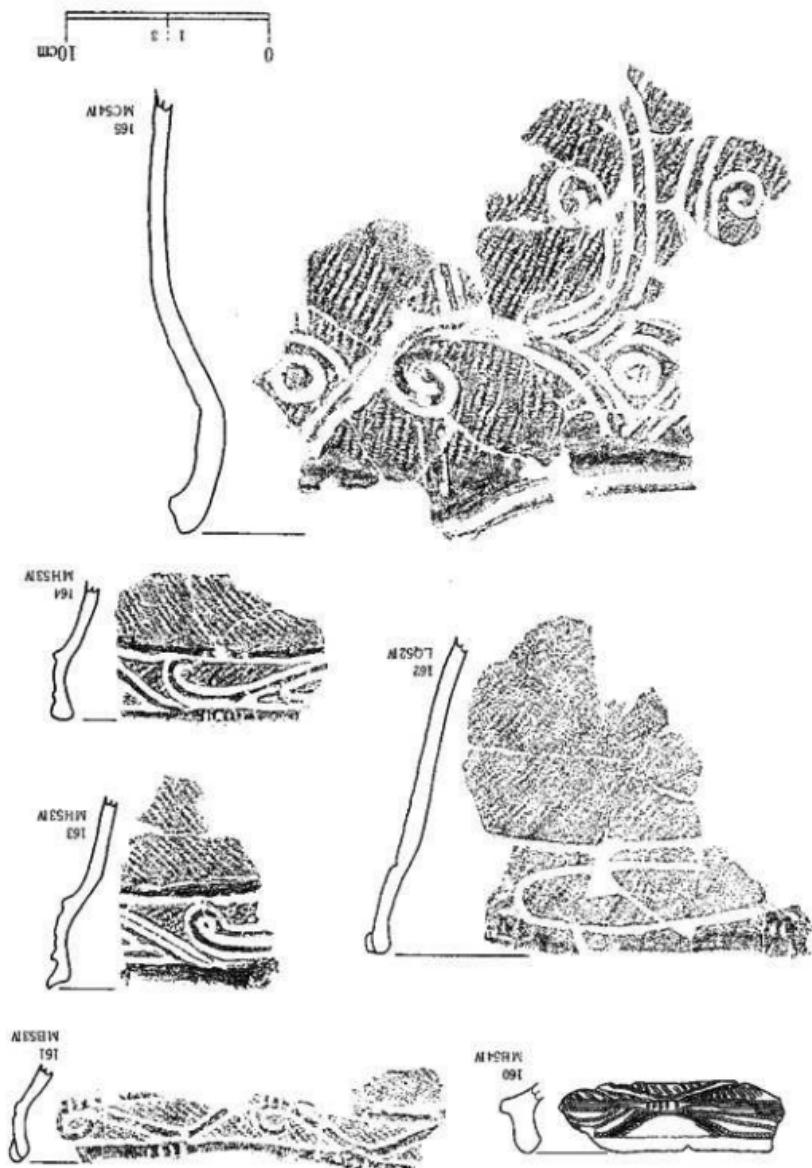
第52圖 遷都外出土遺物(27) IV層 土器



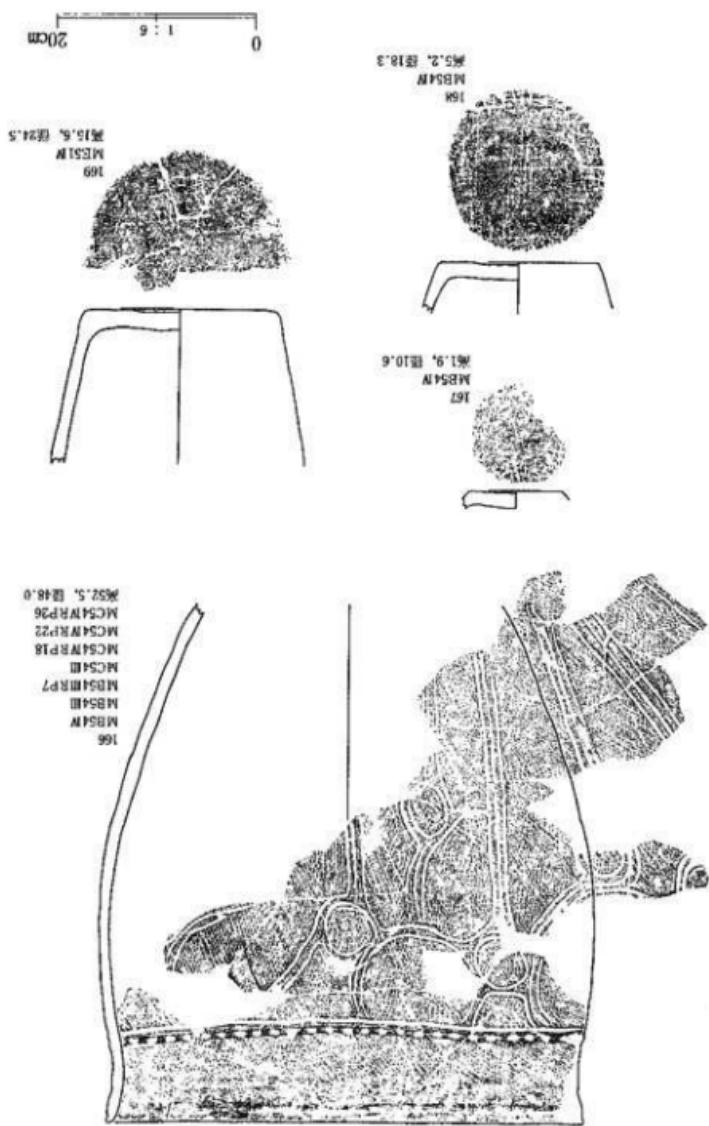


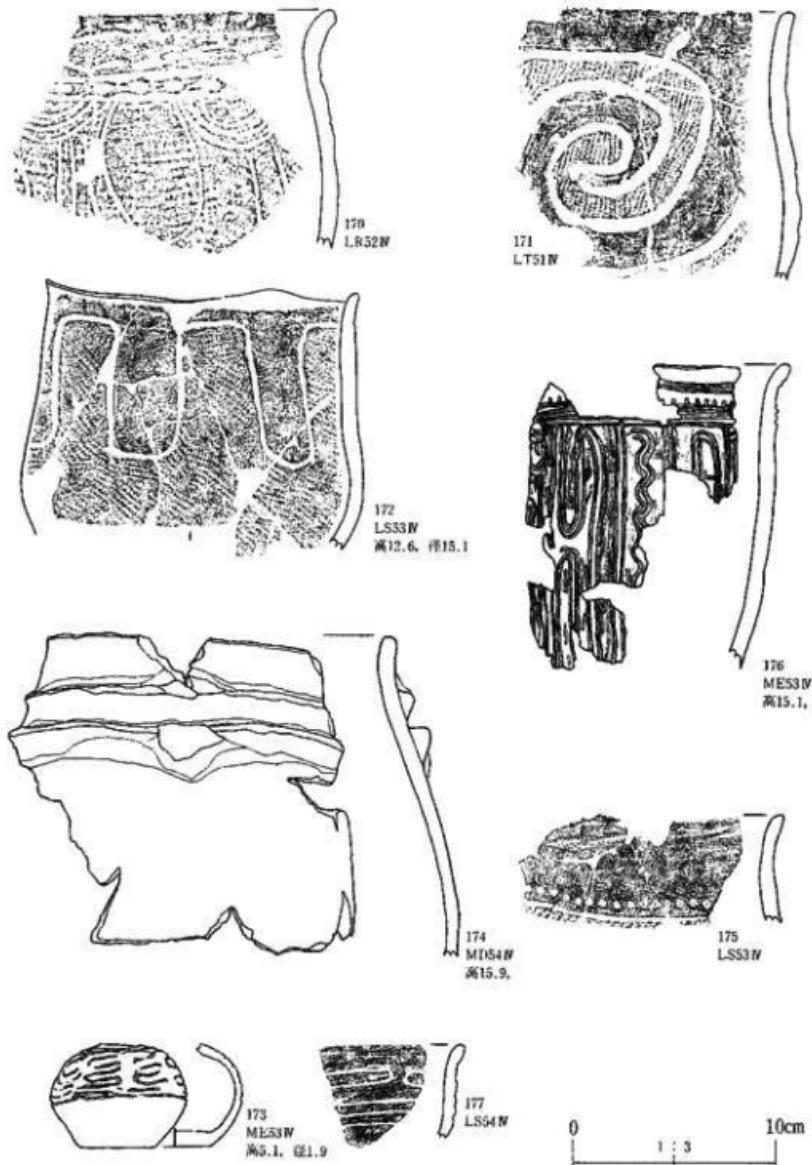
第53図 遺構外出土遺物(28) IV層 土器

第54圖 遷都外出土遺物(29) IV器 土器

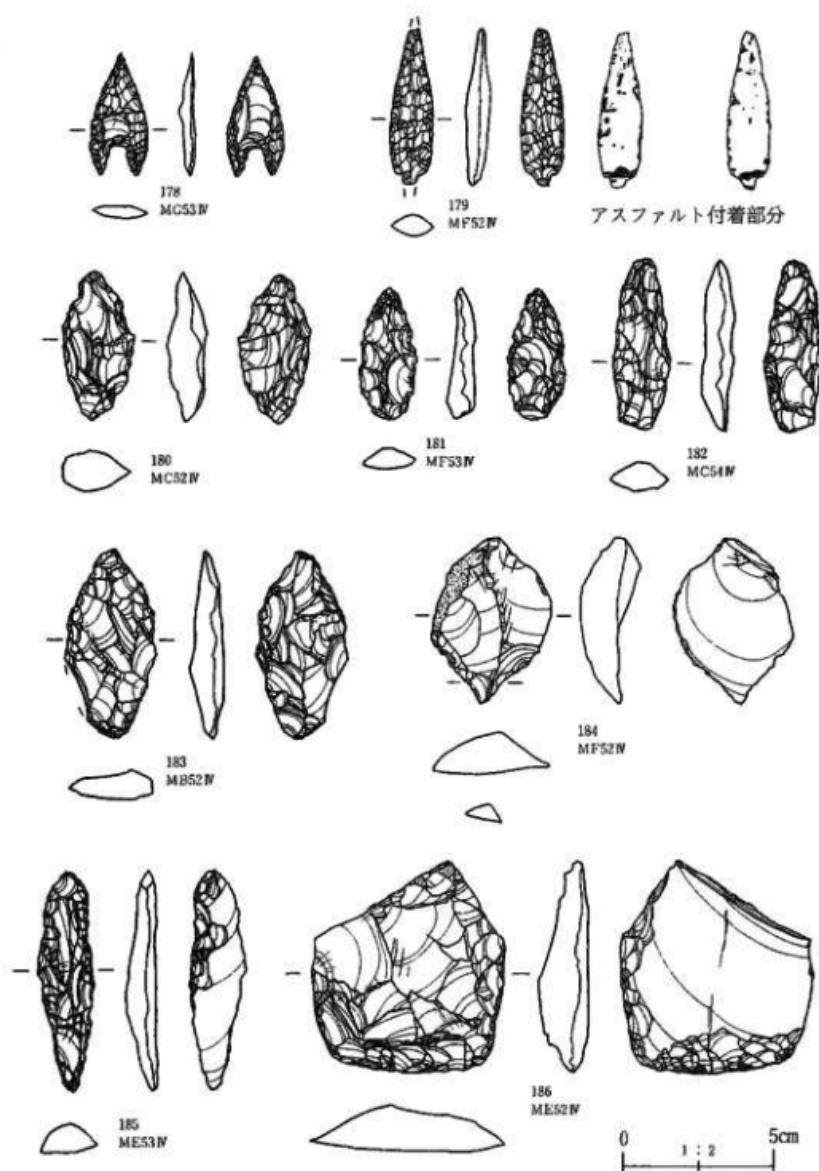


第五五圖 遷都外出土遺物(30) IV層 土器

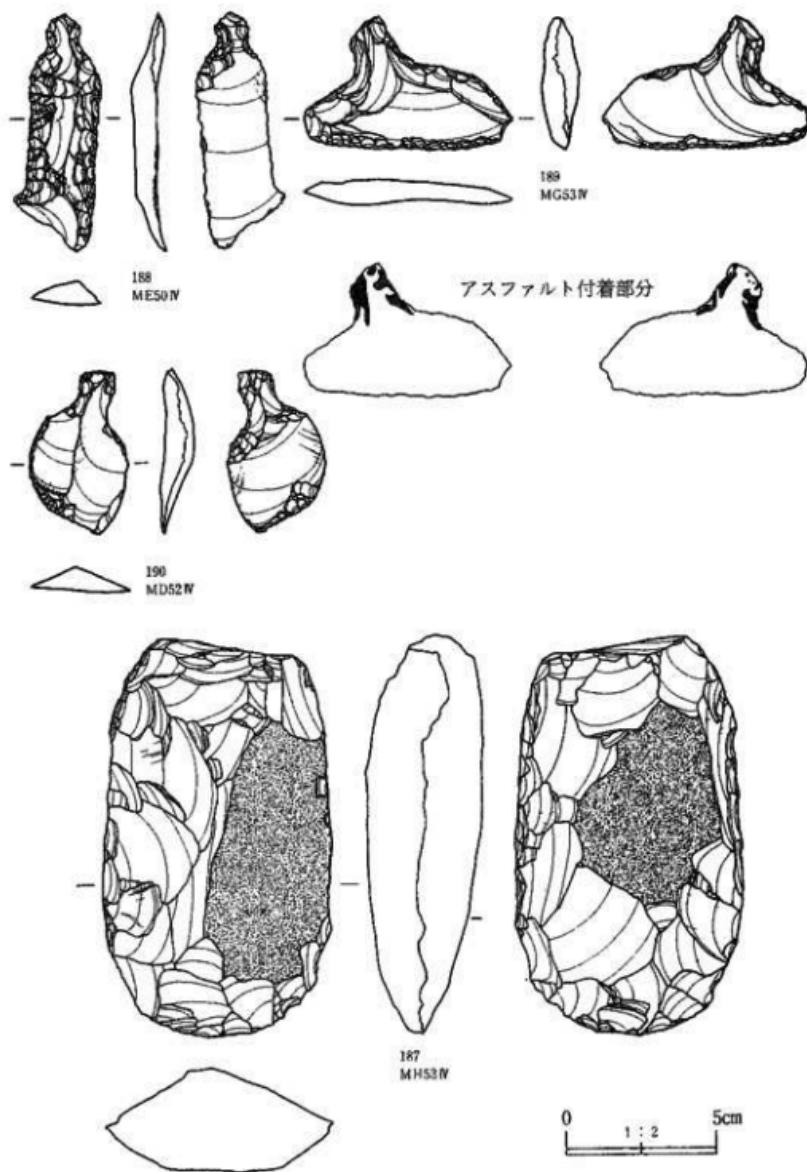




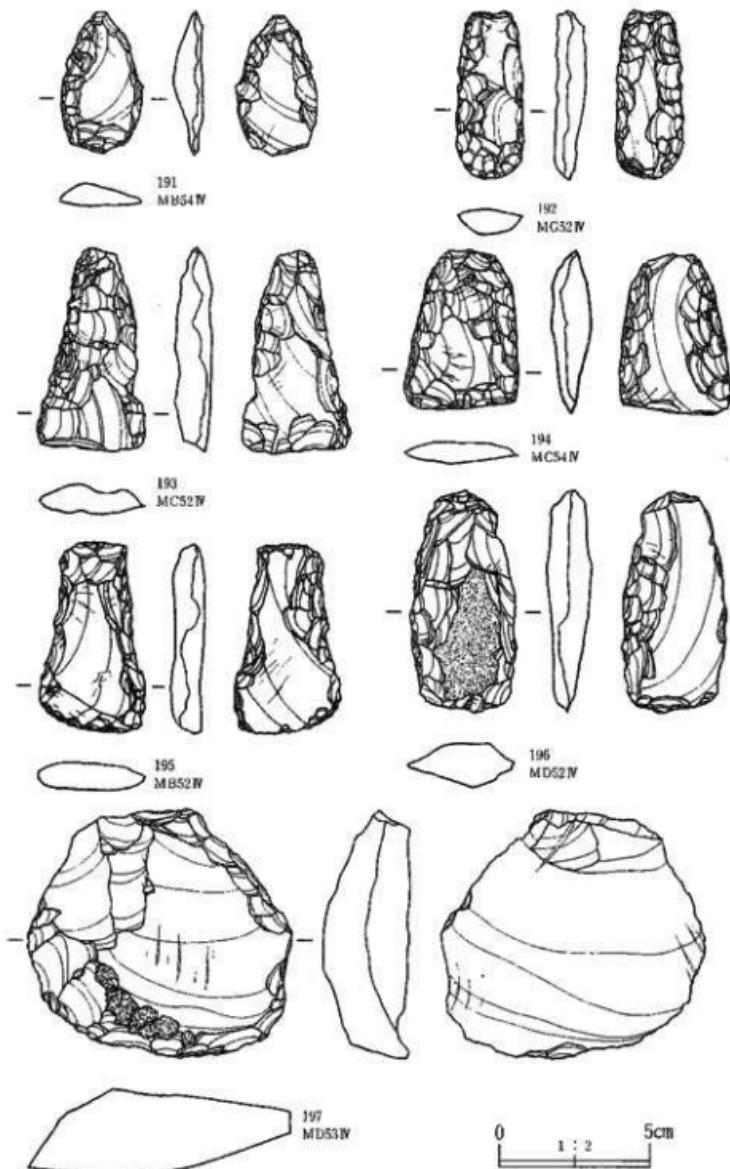
第56図 造構外出土遺物(31) IV層 土器



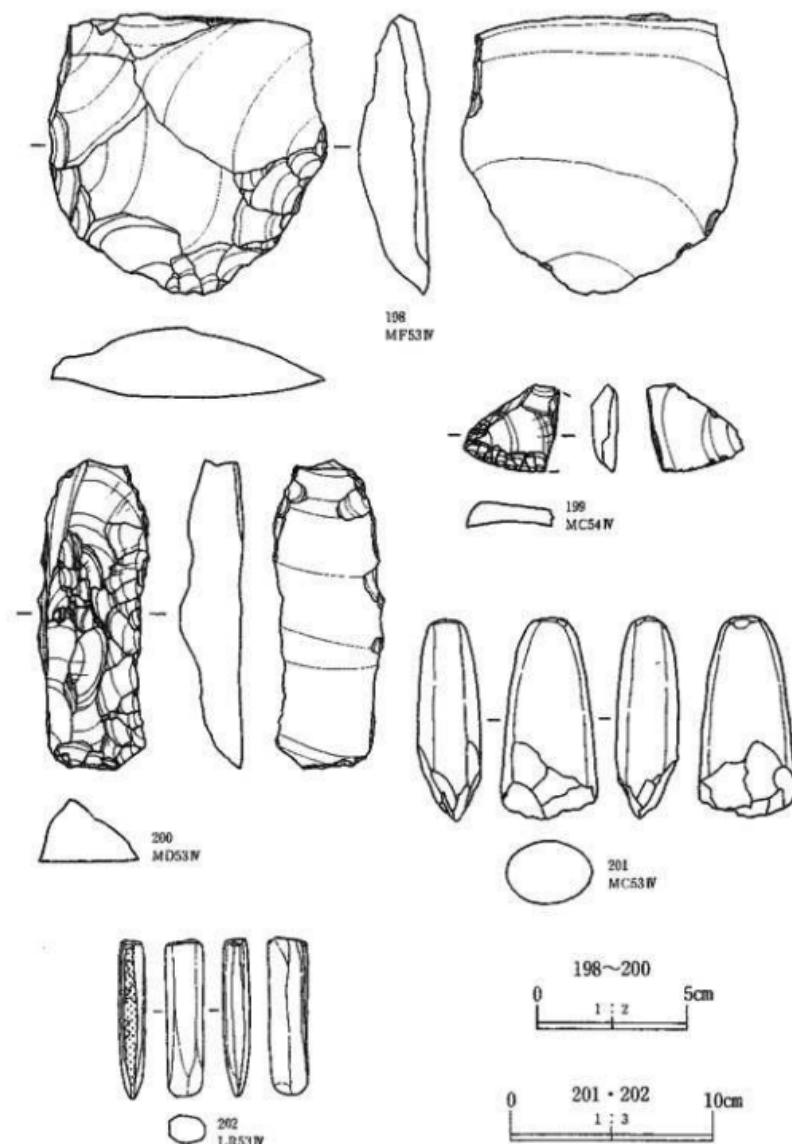
第57図 造構外出土遺物(32) IV層 石器



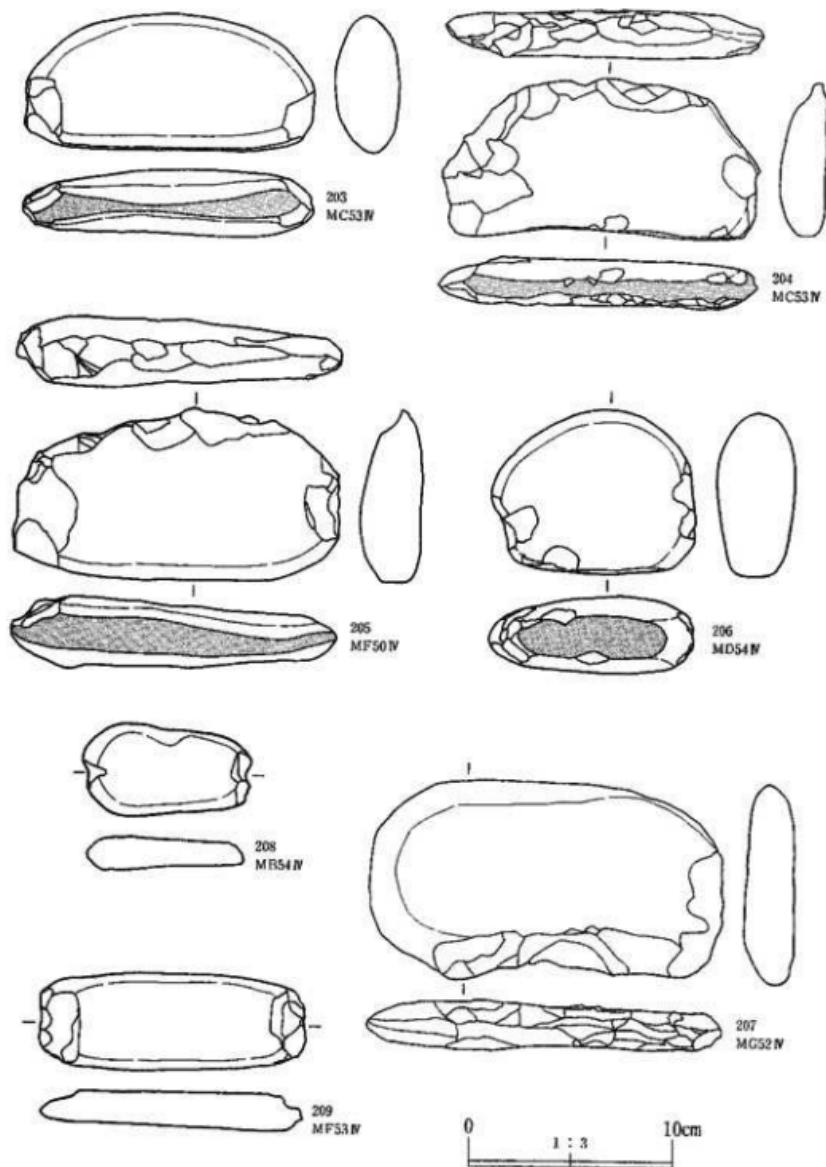
第58図 造構外出土遺物(33) IV層 石器



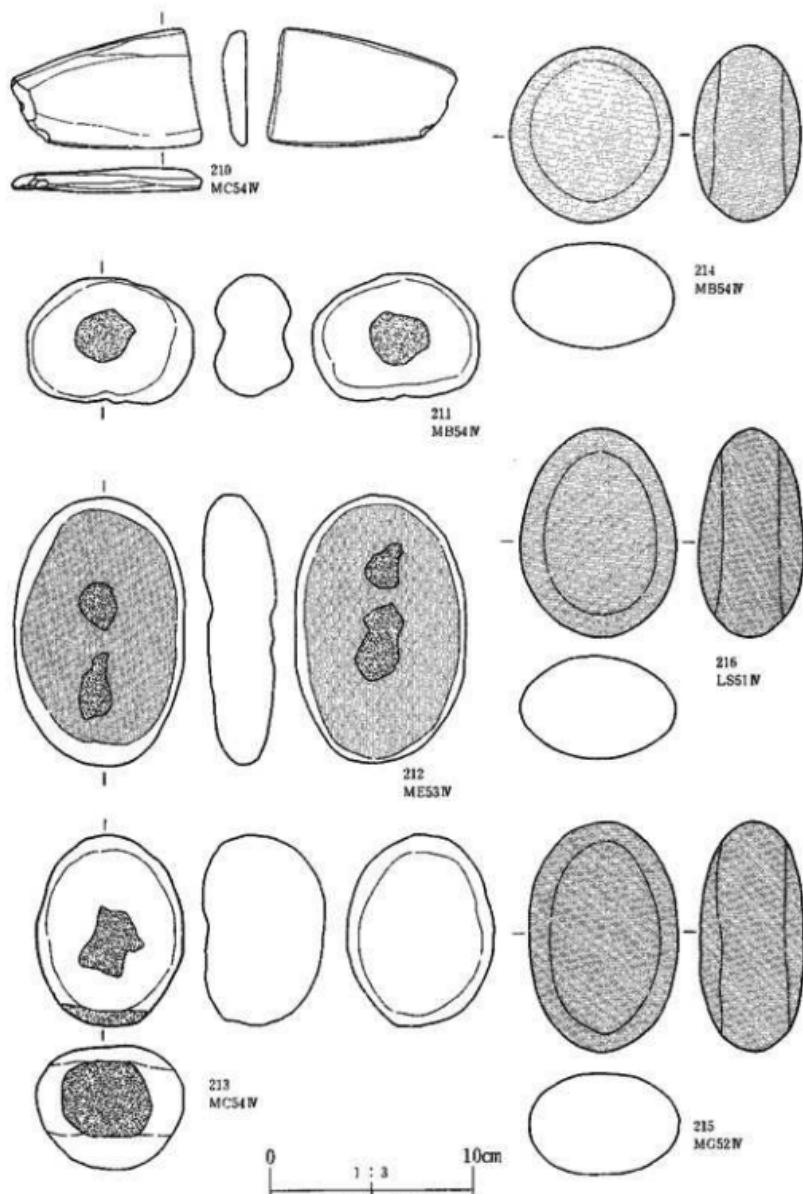
第59図 造構外出土遺物(34) IV層 石器



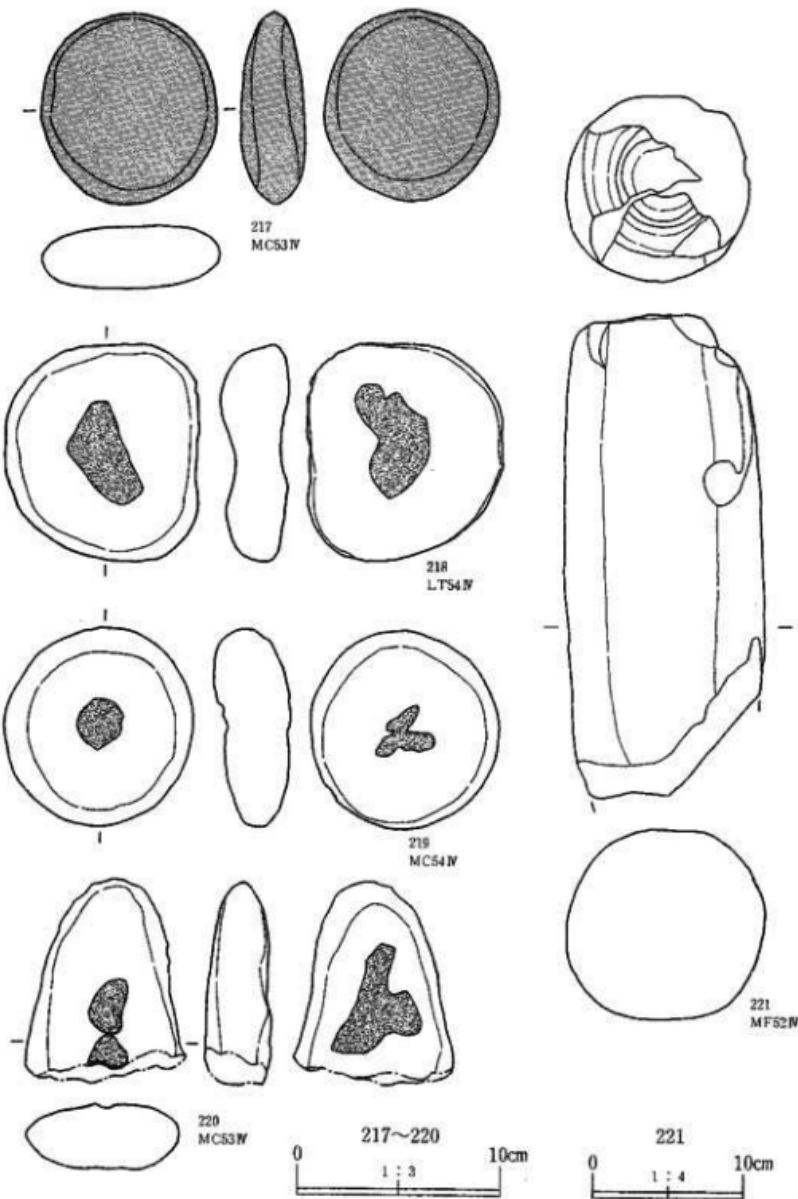
第60図 造構外出土遺物(35) IV層 石器



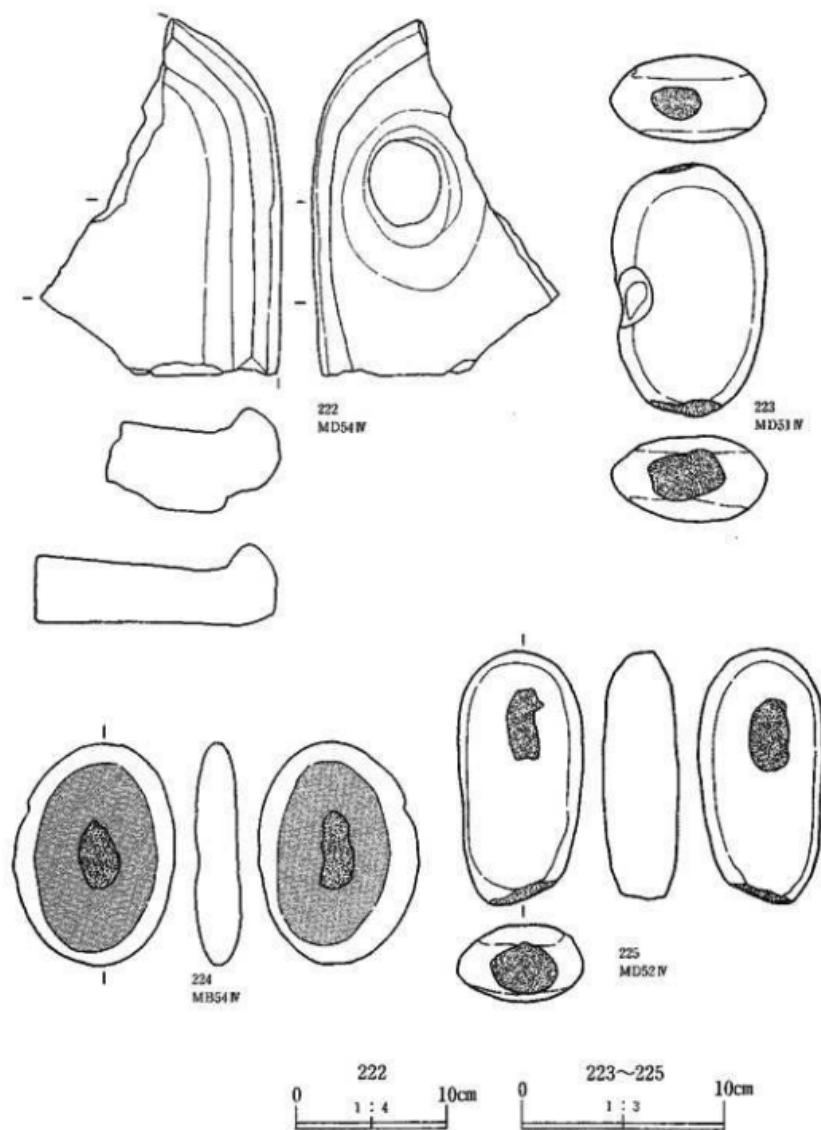
第61図 遺構外出土遺物(36) IV層 石器



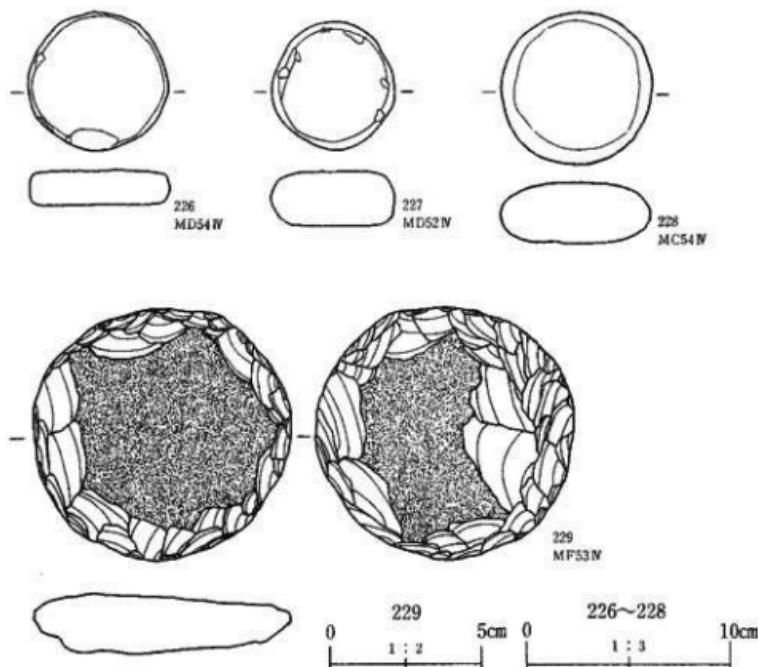
第62図 造構外出土遺物(37) IV層 石器



第63図 造構外出土遺物(38) IV層 石器



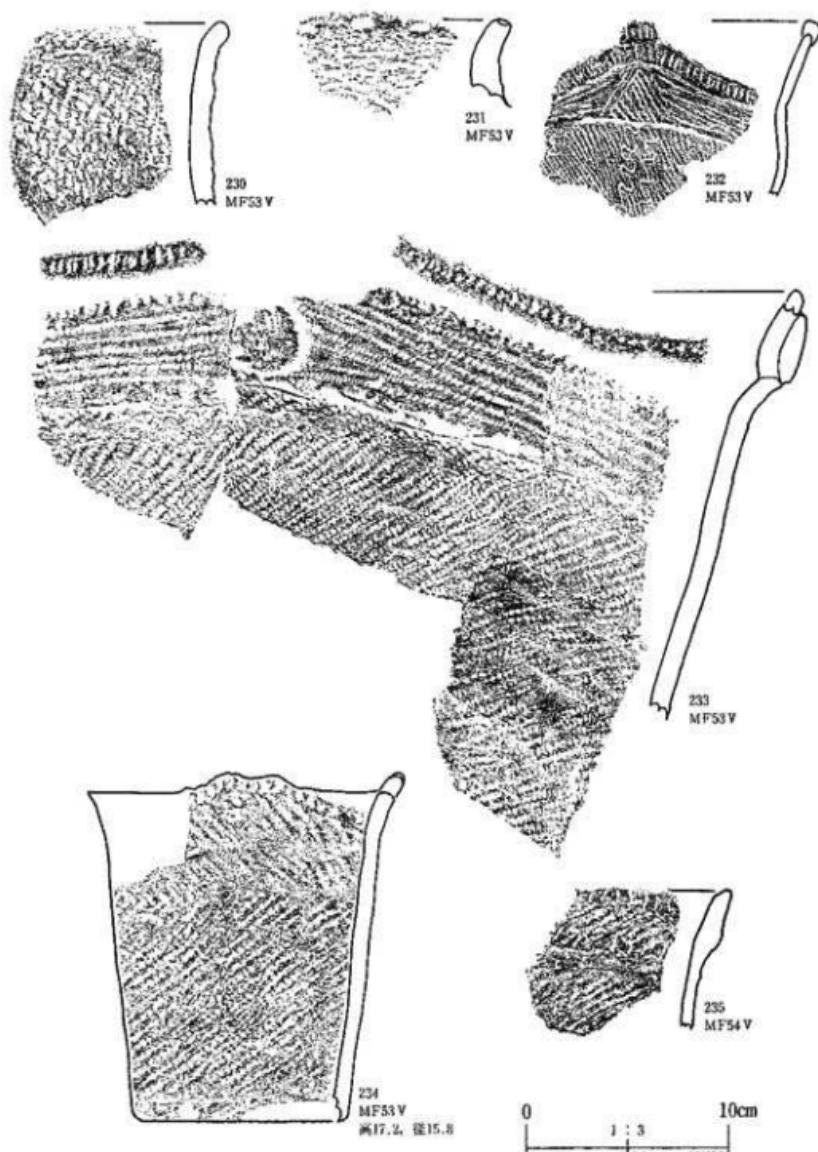
第64図 造構外出土遺物(39) IV層 石器



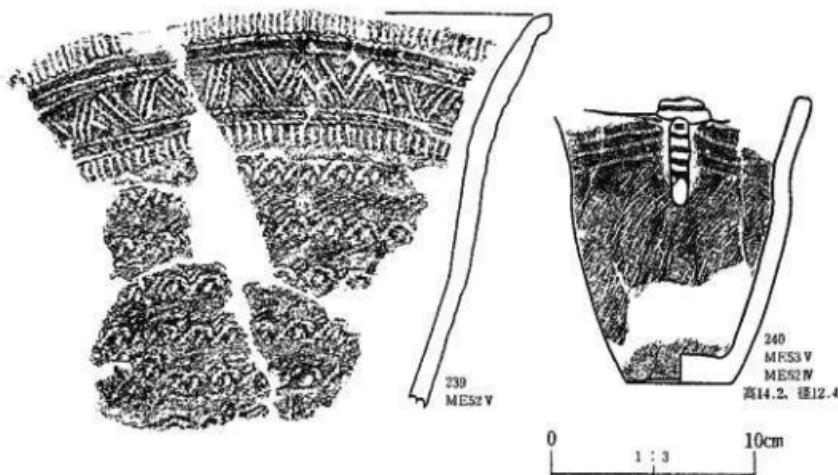
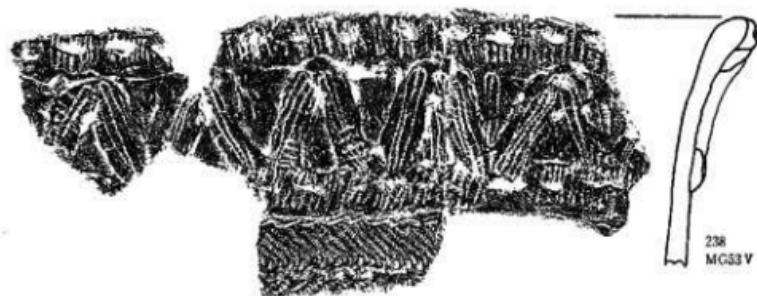
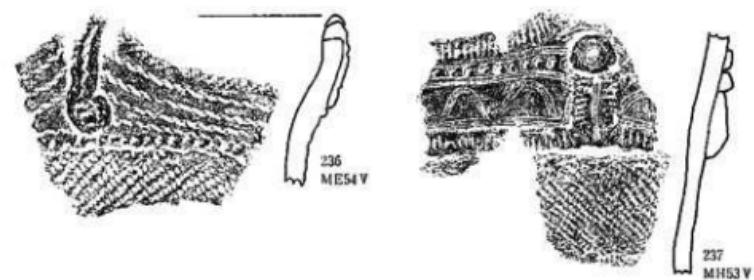
第65図 造構外出土遺物(40) IV層 石製品

## (6) 第V層出土遺物 (第66図~第77図)

第V層から出土した遺物は、I群（縄文時代前期の土器；1a・1b・2a・2b・3類）・II群（縄文時代中期の土器；1a・1b・2・4・6類）・IV群の土器、石鎌（I類）、石槍（IV類）、トランシェ様石器、打製石斧（IV類）、石錐（II類）、石匙（I・III類）、範状石器（I・IV類）、搔器（II類）、削器（III類）、磨製石斧（II-a類）、半円状扁平打製石器（I類）、擦り石（I・II-b類）、円盤状石製品（I類）、有孔石製品である。



第66図 造構外出土遺物(41) V層 土器



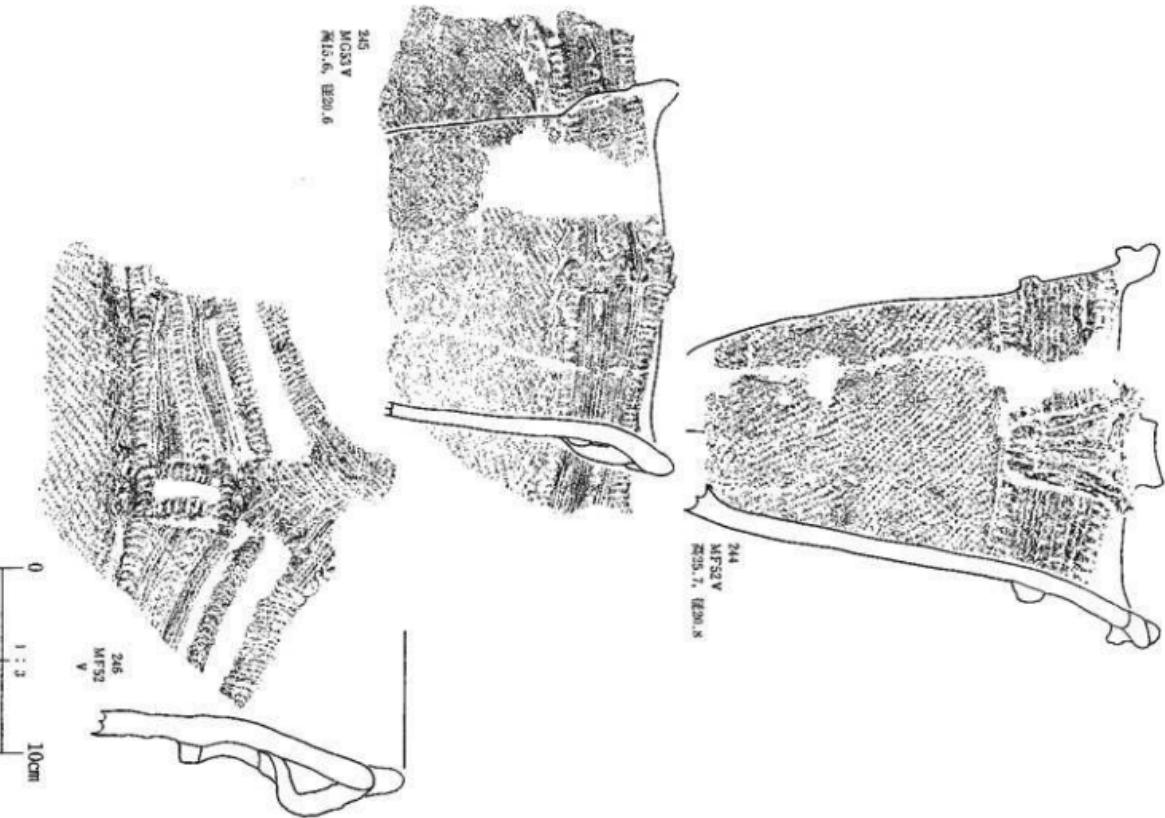
第67図 造構外出土遺物(42) V層 土器



図68 図 遺跡外出土遺物(43) V層 土器

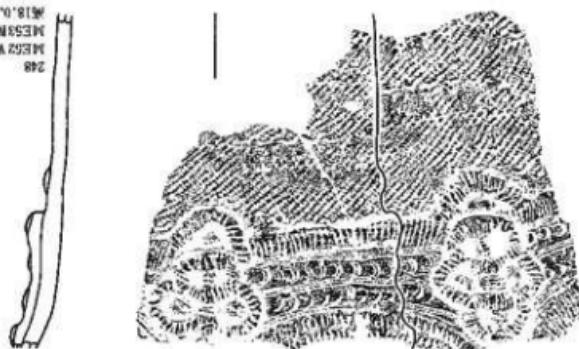


第69図 遺構外出土遺物(44) V層 土器

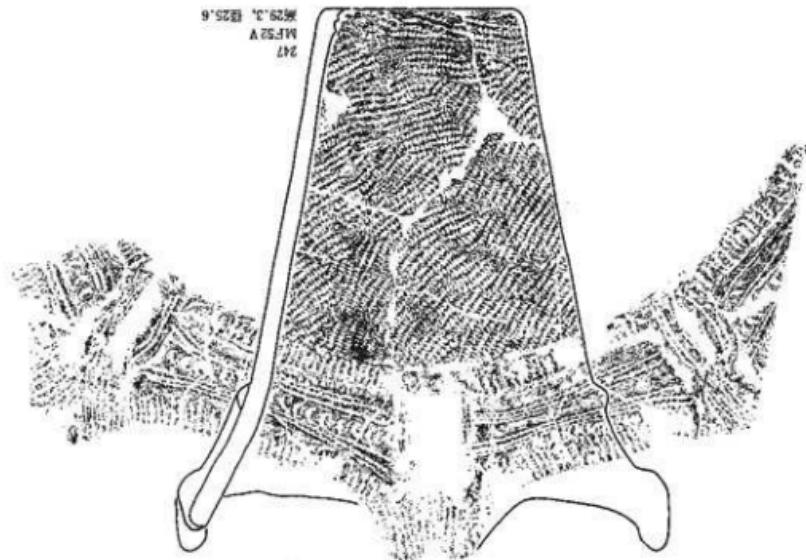


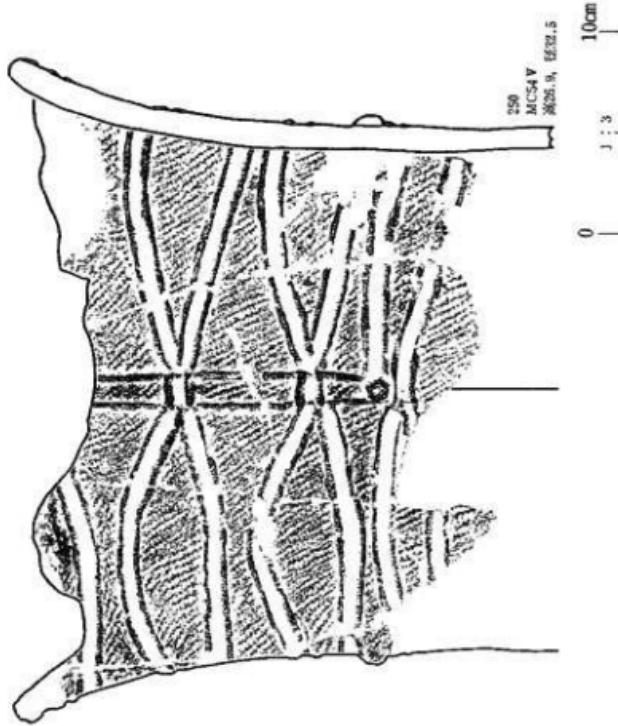
第70図 速舟出土遺物(45) V器 壺

第71圖 遷都外出土遺物(46) V器 土器



西周  
MEGSY  
MEGSH  
1980.7

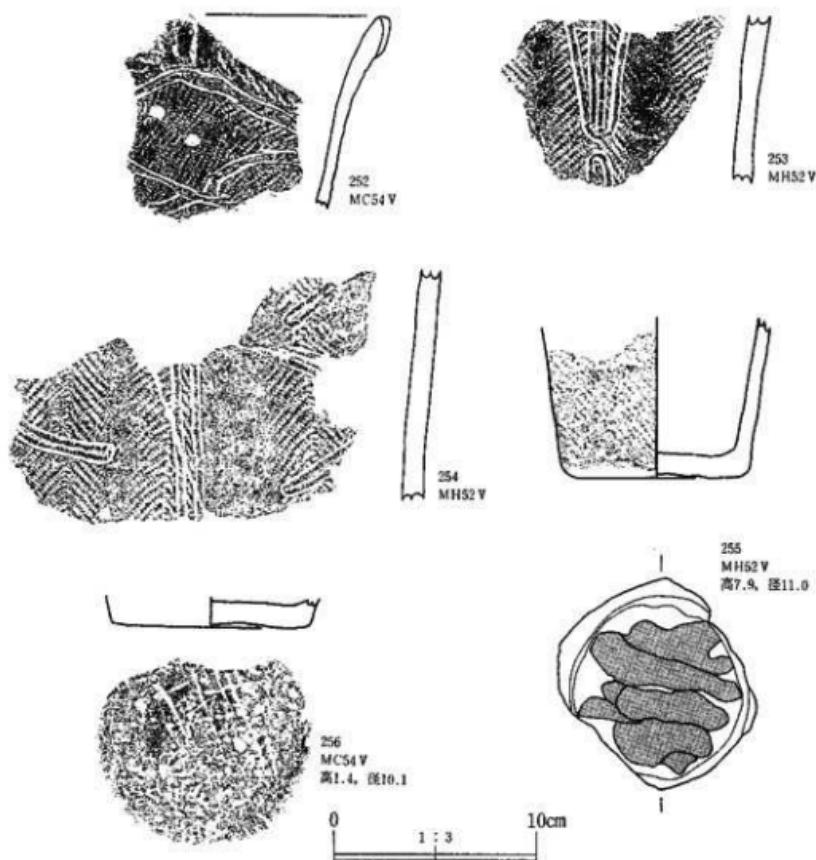




第72図 遺構外出土遺物(47) V層 土器



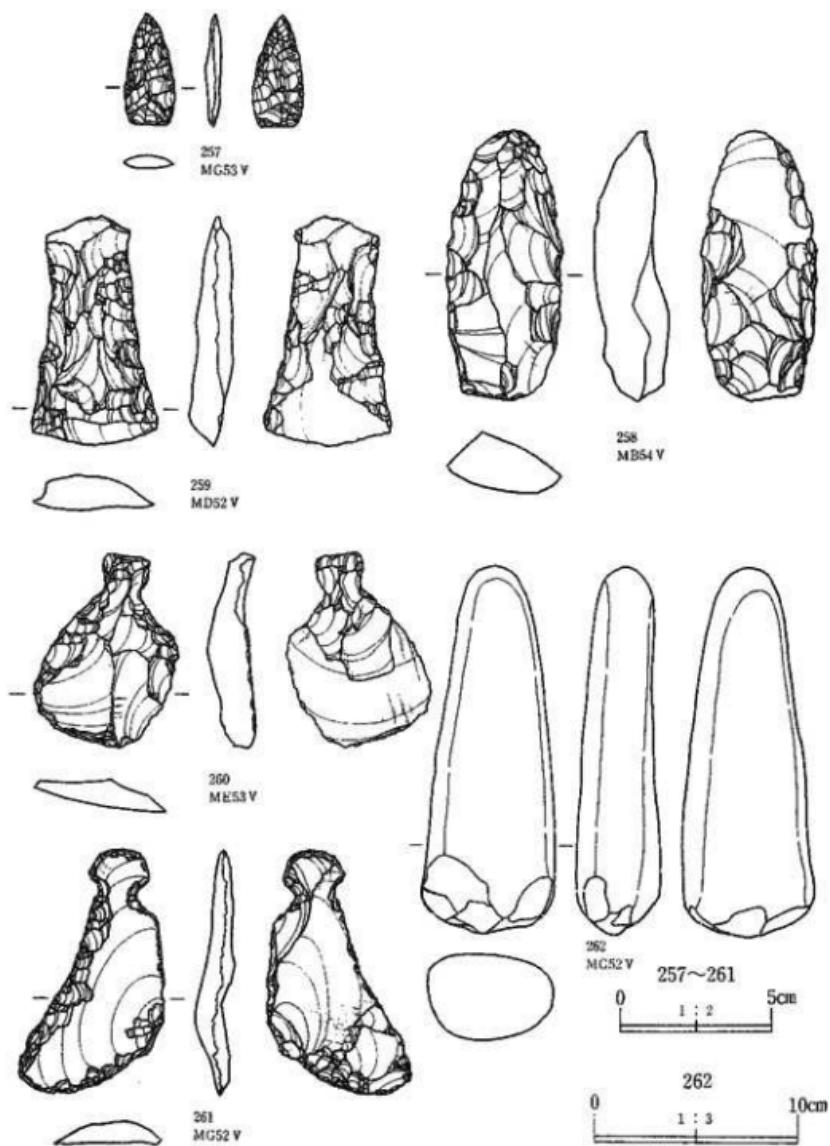
第73圖 遺構外出土遺物(48) V層 土器



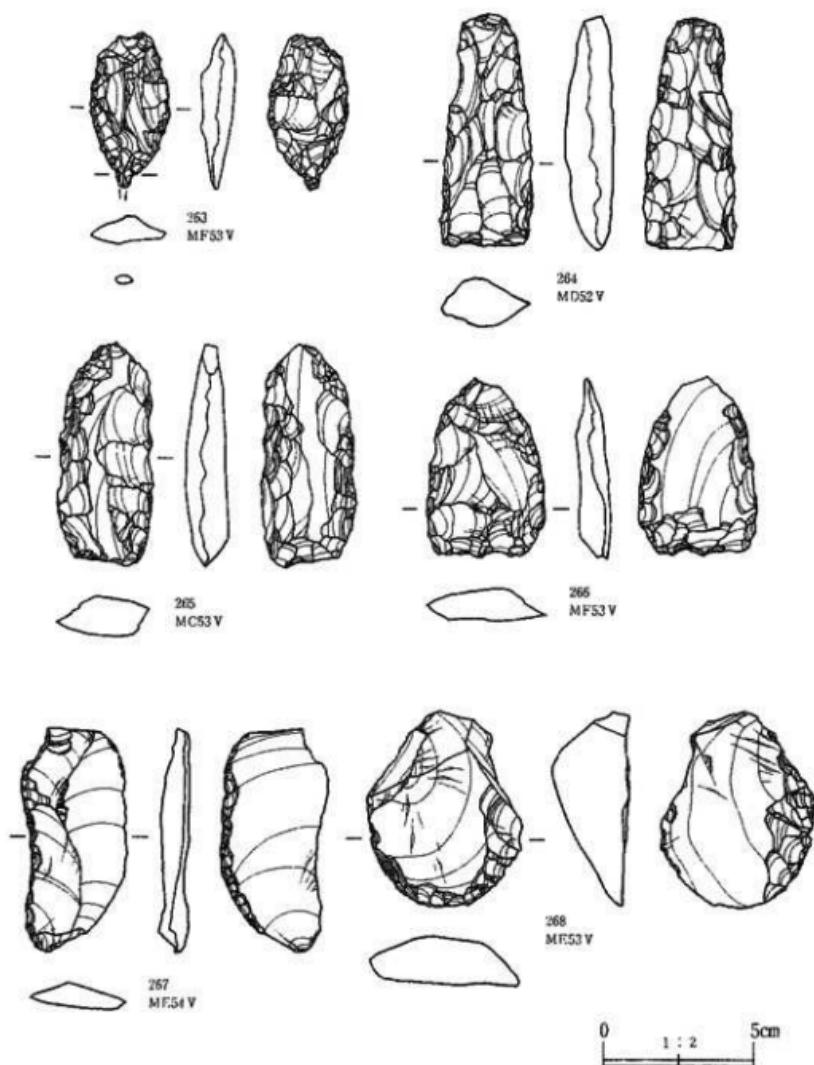
第74図 造構外出土遺物(49) V層 土器

## (7) その他の出土遺物（第78図）

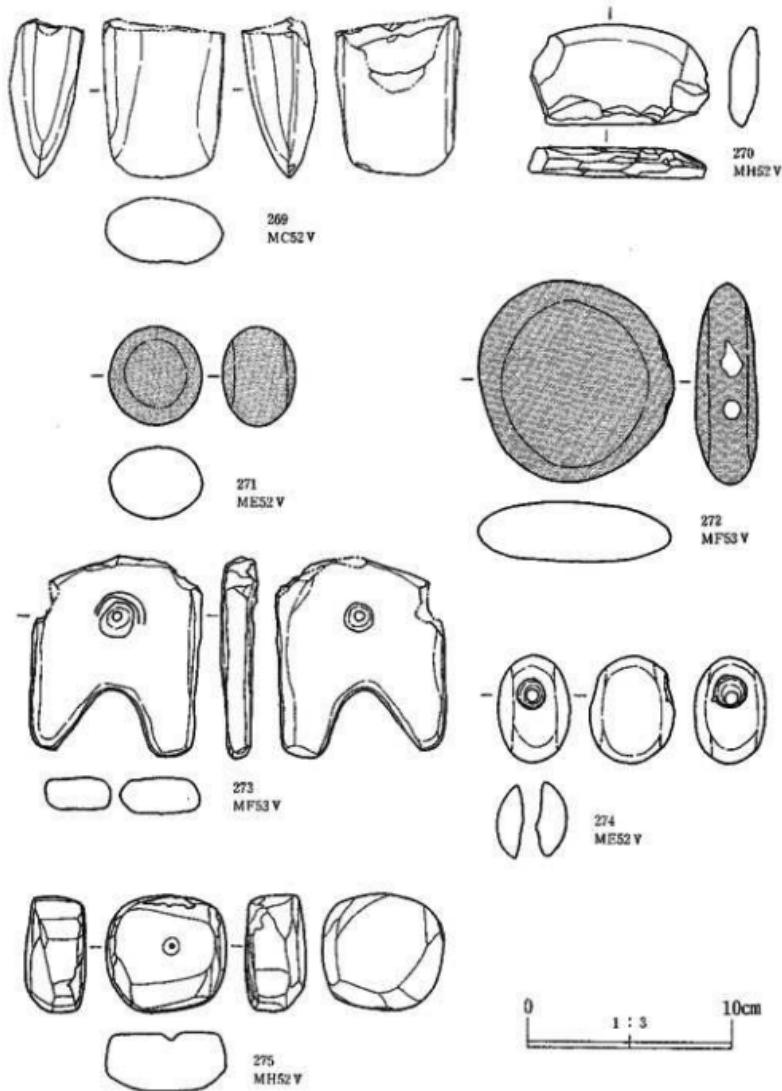
276 (石鋤; III類) は本調査で出土したが、註記不良のため出土グリッド不明である。277 (打製石斧; III類)・278 (磨製石斧; II-b類) は前年度実施した範囲確認調査の際、出土したものである。



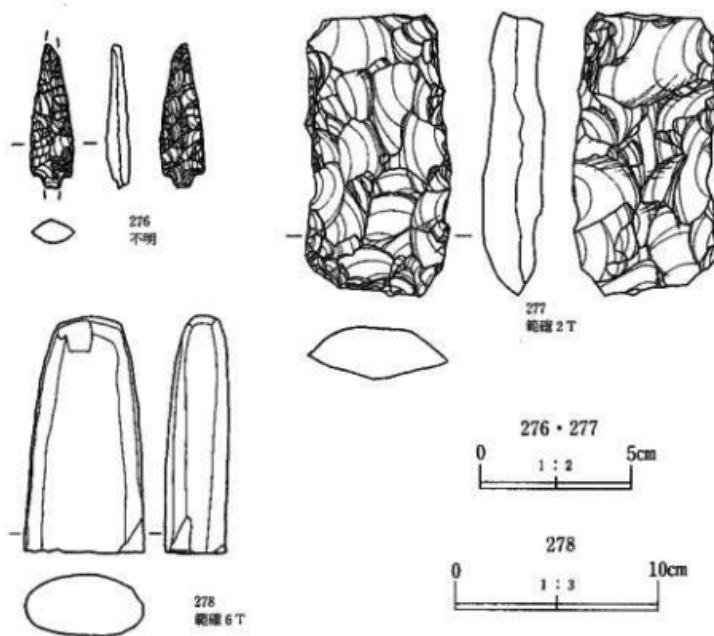
第75図 造構外出土遺物(50) V層 石器



第76図 造構外出土遺物(51) V層 石器



第77図 遺構外出土遺物(52) V層 石器



第78図 造構外出土遺物(53) 他 石器

## 第3章 分類・考察

## 出土遺物の分類

## (1) 土器

## I群 繩文時代前期の土器

繩文時代前期の土器は破片資料が散見されるにすぎない。これらの土器は胎土へ繊維の混入がみられ、文様構成などから3類に分類した。

1類 主として口縁部に繩文原体を横位に回転施文した土器群を一括した(35・112~115・230・231)。口唇および頸部隆帯の指頭状圧痕の有無などから2細分される。

1.a類：口縁部文様帯を設げずに全面に繩文を施文した土器(112・230)。

## 寒沢II遺跡

- 1 b 類：頸部に隆帯を巡らし、隆帶上（35・113～115）、あるいは口唇（113～115・231）に指頭状圧痕を付加した土器。口縁部文様帯が施文されるもの（35・113・114・231）とされないもの（115）がある。
- 2 類 主として口縁部に縄文原体を押圧し、幾何学的な文様を施文した土器群を一括した（116・117・232・233）。器形・口縁部の文様などから2細分される。
- 2 a 類：縄文原体を平行・鋸歯状に押圧施文した土器で、頸部に隆帯（線）をもつ土器（116・117・233）。116・117は隆帶上に撚糸圧痕文が施文される。また116・233は口縁部に1つのボタン状貼付文が付加されている。
- 2 b 類：外反する波状口縁を持ち胸部がやや張る器形で、胸部に縦位の綾格文が施文される土器（232）。
- 3 類 円筒深鉢形を呈し、地文縄文以外に装飾性に乏しい土器を一括した（118・119・234・235）。前期末～中期初頭の所産と思われる。口辺の幅の狭い隆帶に横位の押圧縄文が施文されるもの（119）や、頸部がくびれ全面に羽状縄文が施文されるもの（118）、撚糸圧痕文で飾られた口唇に1つの突起を有し、口縁部にRL・胸部にLR縄文が施文されるもの（234）がある。235は口辺および頸部の隆帶上に爪形文の連続刺突を有する。
- I群の土器は少數の破片資料にすぎないが、1類は円筒下層a・b式、2類は円筒下層d式に比定されよう。

## II群 縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器は本遺跡出土土器の大半を占める。文様構成・器形などから12類に分類した。

- 1 類 主として平口縁あるいは大形で4個の突起を持つ肥厚した口縁で、頸部に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を区画する土器を一括した。口唇部と隆帶上は刻目状の撚糸圧痕文列で飾られる。隆帶間に充填施文された文様要素により3細分される。
- 1 a 類：隆帶間に平行・波状・鋸歯状などの押圧縄文を施文した土器を一括した（2・34・36・120～125・127～138・236～246）。突起部の下に橋状把手を持つもの（130・133・135・136・237・245・246）・ボタン状貼付文を持つもの（237）がある。突起部から垂下する隆帯（橋状把手）を境に、口縁部の文様が変化するもの（130・245）や、胸部の文様が変化するもの（135）がある。127・129・240は文様帯を下限する隆帯をもたない。
- 1 b 類：隆帶間に爪形状撚糸圧痕文を施文した土器を一括した（1・3・33・139～146・247・248）。突起下に垂下する隆帯を境に口縁部の文様が変化するもの（1・33・247）や、

突起下に配される隆帯間の狭い区画内に施文される文様が変化するもの (33・247)

がある。

1c類：隆帯間に爪形状・半月状刺突文を施文した土器 (37~39)。

2類 器面全面に縄文を施文した上に細い粘土紐の隆帯（隆線）文を主文様として施文する円筒深鉢形の土器を一括した (4・40・147・148・249・250)。文様帶が幅広く、突起下にボタン状貼付文を持つもの (4・40・147・250)、橋状把手を持つもの (249) がある。

3類 地文縄文以外に装飾性に乏しい土器を一括した (5・41・149~152)。平口縁のもの (41・149~152) と、波状口縁のもの (5) がある。41は口縁に小突起を有する隆帯をもち、151・152は細い粘土紐の隆線を波状に張り付けた口縁が外反する。

4類 器面全面に縄文を施文した上に、沈線文を主文様として施文する円筒深鉢形の土器を一括した (6・42~46・153・156・252)。文様帶が胴部中央まで広がる。

5類 地文縄文で突起部の破片のみを一括した (7・47・48・154・155)。突起部に細い粘土紐の隆帯による装飾がみられるもの (48・154) と、ボタン状貼付文をもつもの (7・47・155) がある。

6類 口縁部が内窵しながら外傾し、頸部がくびれて胴部が張る器形を呈する土器を一括した (49~51・157~158・251・253・254)。4つの突起（山形・波状）に渦巻状の粘土紐を貼付け、その下に垂下する隆帯あるいは橋状把手がつく。器面全面に縄文が施文され、口縁部・胴部を巡る沈線（直線・曲線）上に刻目を有する。49~51・157~158・253・254は同一個体と思われる。

7類 角皿様の浅鉢形状を呈し、大きく内傾する明確な口縁部文様帶をもつ土器である。隆線による弧状区画文を組み合わせ、その内部に縄文原体の押圧による渦巻状文などを組み合わせ文様を区画する土器を一括した (8・53・160)。

8類 キャリバー形を呈し、地文縄文で口縁部文様帶に沈線を沿わせた隆線（隆沈文）による渦巻状文・曲折区画文が描かれる土器を一括した (52・161~164)。

9類 平口縁または波状口縁で、張り出した胴部に渦巻状のモチーフを主文様とする縱位の沈線文が施文される土器を一括した (9~11・54・165・166・170)。口唇に沈線を伴うもの (11・165) や、口縁部に横位の渦巻状文 (54)、連続刺突文 (10・166・170) が施文されるものもある。

10類 沈線による縱位の精円文・渦巻状文が施文される土器を一括した (12・13・55~63)。13・63は壺形を呈し、胴部のみに文様が施文される。62も同様の器形を呈するが、口辺に1対の穿孔を有し、胴部に4つの把手をもつ無文の土器である。

11類 沈線による渦巻状 (171)・矩形状 (172) の区画内に縄文が充填される土器である。

## 寒沢II遺跡

12類 その他縄文時代中期の土器を一括した (64~69・174~175)。65は口縁が弱く内弯し、器面全面に羽状縄文を施文している。66も内弯する口縁を持ち、地文縄文のみが施文される小型の深鉢形土器である。67~69は口辺の隆帯上に竹管文の連続刺突を有する土器で、胴部が膨らむ67には口頸部に貼付粘土紐による裝飾がみられる。174は無文で2段の鋸が巡る土器で、鋸をまたぐ形で把手の痕跡が残っている。内・外面ともに炭火物が付着している。176は弱く外反する口縁に半截竹管による横位の沈線が引かれ、その間に棒状工具による刺突文が施文されている。胴部は半截竹管により縱位の波状・ヘアピン状・渦巻状文などが施文される。北陸系の土器と思われる。

II群の土器は1a類が円筒上層a式に、1b類が円筒上層b式に、1c類が円筒上層c式に比定される。2類は円筒上層d式に、4類は円筒上層e式に比定される。また6類は大木7a式、7類は大木7b式に、8類および9類は大木8a・8b式に比定される。10類は大木9式に、11類は大木10式に比定される。

## III群 縄文時代後期の土器

縄文時代後期の土器は全出土土器の1割程度であるが、注口土器・壺形土器など多様な器種が出土する。文様構成の特徴などから2類に分類した。

1類 胎土にかなり多量の砂粒を含み、平行沈線・入組文・磨消縄文・充填縄文などが施文された土器を一括した (14~17・70~74・173・177)。17は把手付の壺形土器の頸部である。70・74は平行沈線により施文された壺形土器で、70は外面全面および口頸部より上位の内面に朱を施している。173はミニチュア土器である。

2類 その他縄文時代後期の土器を一括した (75~79)。75は注口部を欠き、曲線を描く沈線と磨消縄文手法により施文される注口土器である。胴部中央に小瘤を有し、口頸部には刻目を充填した平行沈線文が施文される。76は口縁部を欠き、平行する沈線の間に刻目を充填した沈線文により区画される注口土器である。胴部上半は横位・縦位あるいは「ノ」字状の平行沈線、胴部下半は縦位あるいは「ノ」字状の沈線により幾何学的に施文される。77は無文のミニチュア土器である。

III群の土器は1類が十腰内I式に比定されよう。また2類の注口土器 (75・76) は後期中葉の所産と思われる。

IV群 底部破片を一括した (167~169・256・255)。網代などの文様痕跡が残る土器底部のうち、255は土器製作途中についたと思われる製作者の手の指の跡が残っている。

## (2) 石器

1 石鎌 形態から3類に分類した。

I類：凹基無茎式（178）。II類：平基無茎式（257）。III類：平基有茎式（179・276）である。

178は刃部が鋸歯状によく調整され、基部に大きく抉りが入っている。179にはアスファルトが付着している。

2 石槍 簾状石器と分別が難しいが、先端部の違いにより形態から4類に分類した。

I類：尖頭部・基部とも尖り、表裏とも丁寧な押圧剥離が加えられ、幅広で断面形が薄い凸レンズ状を呈するもの（183）。

II類：尖頭部・基部とも尖り、幅が狭く断面形が凸レンズ状を呈するもの（180）。

III類：基部が丸みをもち、表裏とも押圧剥離が加えられ、断面形が凸レンズ状を呈するもの（18・83）。

IV類：尖頭部のみ丁寧に調整し、基部は部分的な調整のもの（19・181・182・258）。

3 トランシェ様石器 刀部に一次剥離面をとどめ、素材となる剥片を取り出す際の剥離によって生じた鋭い縁辺をそのまま刃部として使用しているものである。楔形を呈する1点（259）が出土した。

4 打製石斧 碓あるいは大形の剥片を素材とし粗い剥離と敲打によって刃部を作出したもので、平面形と刀部平面形状の直刃・丸刃、側面形状の両刃・片刃により3類に分類した。186は欠損のため全容を知ることができないが、極めて薄い剥片を素材としており、土壙具としての用途も考えられよう。

I類：平面形が小判形・長楕円形を呈し、丸刃・両刃（82・187）。

II類：平面形が略円形を呈し、直刃・両刃（81）。

III類：平面形が短冊形を呈し、他類に比べ薄い剥片を素材とし、直刃・片刃（186・277）。

IV類：大形砾を素材とし、敲打による剥離で一端のみに刃部を作出したもの（262）。

5 石錐 形態と調整技法から2類に分類した。

I類：一端が細くなる剥片に二次調整を両側縁の片面から施したもの（84・184・185）。

II類：一端が細くなる剥片に二次調整を両側縁の両面から施したもの（263）。

6 石匙 両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出し、片面からの加熱によって刃部が作られた石器で器中軸線あるいは刃部（側縁）と、つまみの中軸線の交わる角度によって3類に分類した。189のつまみ部にはアスファルトが付着している。

I類：縦形石匙（85・188・260）。II類：横形石匙（22・189）。III類：斜型石匙（190・261）。

7 簾状石器 平面形が楔形あるいは短冊形・小判形などの各種のいわゆる「へら」状を呈し、刃部が作出されたもので、器中軸線で左右対称となり断面形は凸レンズ状を呈する。平面形

## 寒沢II遺跡

と刃部平面形状の直刃・丸刃、側面形状の両刃・片刃により5類に分類した。

I類：平面形が楔形を呈し、直刃・片刃（193・194・264・266）。

II類：平面形が楔形を呈し、丸刃・片刃（191・195・196）。

III類：平面形が楔形を呈し、丸刃・両刃（20・21・86）。

IV類：平面形が短骨形を呈し、直刃・片刃（87・265）。

V類：平面形が小判形・長楕円形を呈し、丸刃・両刃（192）。

8 搾器 分厚い剥片に片面調整による急角度の刃部を作出したもので2類に分類した。

I類：全周に加撃し円形に刃部を作出したもの（23・88・89・91・197・198）。

II類：剥片の一部に刃部を作出したもの（24・90・92・199・268）。

9 削器 大小の剥片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器で、二次調整は片面からだけのものが圧倒的に多いが刃部の形状などから3類に分類した。

I類：細長くて分厚い剥片の両側縁に急角度の刃部を作出したもの（200）。

II類：細長くて薄い剥片の両側縁に刃部を作出したもの（96）。

III類：不整な楕円形・円形を呈する剥片の側縁に弧状の刃部を作出したもの（25・94・95・267）。

10 磨製石斧 製作方法と刃部形状から2類4細分したが、使用による刃潰れがみられるものもある。202は他に比べ極めて小さく、「石ノミ」様の形態である。また201は刃部欠損後に敲打による剥離が加えられ、打製石斧として再利用されている。

I類：擦切技法により切断・製作したもので、偏刃・両凸刃（I-a:202）、偏刃・弱凸強凸片刃（I-b:100）。

II類：礫を打撃・研磨して製作したもので、円刃・両凸刃（II-a:98・99・269）、刃部欠損（II-b:97・201・278）。

11 半円状扁平打製石器 半円状あるいは細長く、扁平もしくは断面逆三角形の礫を素材として、下辺部に機能面を有している石器である。素材の加工部位から4類に分類した。

I類：素材の1縁辺を打ち欠き刃部とし両側縁に抉りを入れたもの（102・205）。

II類：素材の鋭利な下縁辺を打ち欠き刃部とし2側縁も打ち欠いたもの（207）。

III類：素材の下縁辺を擦り他の3側縁を打ち欠いたもの（101・103・204・205）。

IV類：素材の下縁辺を擦り他の1～2側縁に抉りを入れたもの（31・203・206）。

12 扁平磨製石器 破片であるため全容は不明であるが、破損した磨製石斧を素材として再利用し、両側縁をさらに擦って機能面としたもの。擦切具としての用途が考えられる1点（210）が出土した。

13 石錐 平面形が楕円形あるいは円形を呈するほぼ偏平な礫を素材とし、両面から打ち欠き

のち敲打を行って抉りを完成させた礫石錐と呼ばれるもので2類に分類した。

I類：長楕円形の素材の長軸の両端に抉りをもつもの（104・208・209）。

II類：円形の素材の両端に抉りを持つもの（31・32）。

14 凹み石 磨材の面に敲打による凹みを有するもので形態により3類5細分した。28・110は全面が擦られ、縁辺の一部に敲打痕がある。また212・224も両面が擦られている。213・225は一端に敲打痕がある。

I類：平面形が小判形・楕円形を呈し、両面に凹みを有するもので、凹みが1ヶ所（I-a：111・211・224・225）、凹みが2ヶ所以上（I-b：212・220）。

II類：平面形が円形・略円形を呈し、両面に凹みを有するもので、凹みが1ヶ所（II-a：108・110・219）、凹みが2ヶ所以上（II-b：218）。

III類：片面のみに凹みを有するもの（28・213）。

15 擦り石 磨材の表面の全部又は一部が擦られているもので3類5細分した。

I類：卵形状の礫の表面全部が擦られているもの（106・271）。

II類：平面形円形・略円形を呈し、礫の全面が擦られているもので、断面が分厚い円盤状のもの（II-a：30・214）、薄い円盤状のもの（II-b：29・217・271）。

III類：平面形が楕円形を呈し、礫の全面が擦られているもので、断面が分厚い円盤状のもの（III-a：215・216）、薄い円盤状のもの（III-b：107）。

16 石皿 27は箱形の礫の上面に浅くくぼんだ使用面が縁取りされている。109は破損品であるが、大形の礫の上面から使用面が摺鉢状に削りこまれており、破損した後に砥石として再利用された痕跡がある。222も破損品であるが、大形の板状礫の上面にきれいに使用面が縁取りされ、下面に脚がつくられている。

17 敲石 磨材の両端に敲打痕を有するものが1点（223）出土した。

### （3）土製品

1 耳飾り 1点（80）のみの出土である。表裏ともに棒状工具による蜂の巣状の刺突がなされている。

### （4）石製品

1 円盤状石製品 断面形状と調整から2類3細別した。275は平面形が隅丸方形に近く、側縁・表裏面ともに複雑に面取りされ、表面には盲孔が1つ設けられている。

I類：断面形状が長方形を呈し、素材を調整した後全面研磨したもので、側縁を面取りしたもの（226・227・275）。

## 寒沢II遺跡

II類：断面形状が隅丸長方形を呈し、素材を調整した後全面研磨したもの（228）。

III類：素材となる礫を円周に沿って剝離調整しただけのもの（229）。

2 石棒 円柱状の形態を呈し、先端に同心円状の凹みがつくられており、周囲もよく研磨されているものが1点（221）出土した。

3 有孔石製品 273は全面研磨された人形を呈するもので、表面穿孔部の周囲に同心円状の凹みが作出されたものである。274は全面研磨された卵形を呈するもので、両側から穿孔されている。

## 第4章　まとめ

### 遺構と遺物について

本調査で検出した遺構は、縄文中期の遺物包含層中から検出した屋外炉（SN01）1基のみである。SN01は主として縄文時代中期前葉の遺物を出土するIV層中から検出し、周囲には炭の散乱を確認した。SN01付近におけるIV層の層厚は50~60cmで、SN01はIV層の堆積土層厚のほぼ中間部分で検出した。しかし遺構に共伴する遺物は出土しなかった。検出地点は台地の斜面中腹に開けた小平坦地となっている。

遺物は調査区全域から出土するが、調査区ほぼ中央部のMFラインを中心とする範囲が沢状地形を呈し、特に遺物の集中する「土器捨て場」となっている。地表下3mにおよぶ最深部では溺水をともない、主たる遺物包含層（III層～V層）が2m以上にわたり分厚く堆積する。遺物包含層のうちIII層は縄文時代中期後葉、IV層は縄文時代中期前葉の土器を中心に出土する。しかし斜面への堆積ということもあり、同一包含層中でも出土する土器型式は幅広くわたっている。なおV層はIV層同様、縄文時代中期前葉の土器を中心に出土するが、時期的な幅はIV層よりも狭くなっている。

出土した遺物は縄文時代前期後半～後期中葉の土器類と、それにともなう石器類、土製品・石製品類である。そのうち縄文時代中期の土器は、円筒上層a～e式および大木7a～10式が出土している。縄文時代前期の土器は散見するに過ぎず、また後期の土器も全出土量の1割程度である。このことから台地上に存在すると考えられる集落は縄文時代前期後半には断続的に、前期末～中期初頭以降は後期中葉に至るまで継続的に営まれたと思われる。出土遺物からみた集落の最盛期は縄文時代中期前葉と考えられる。

本遺跡において前年度実施した範囲確認調査の結果、斜面に堆積する遺物包含層中から多量

の遺物が出土することが予想されていた。そのため本調査では包含層の精査に先行して調査区内に縦横のトレンチを設定し、土層を確認しながら層位的な遺物の収納に努めた。しかし発掘調査後の遺物の整理作業を進めるにしたがい、各包含層の出土遺物には中心となる時期はあるものの、同一包含層中に含まれる土器型式に幅のあることが判明した。このため土器型式・様式上の変遷をたどることは可能であるが、層位的に新旧・共伴関係を追証することは不可能であった。今後あらためて急斜面に堆積する土層の観察・分層、遺物包含層からの層位的な遺物収納法についての検討を加えなければならない。

しかし今回の発掘調査の成果として、①縄文時代前期末～後期中葉における土器型式・様式上の変遷を1遺跡でたどることができたこと、②米代川流域で出土例に乏しい円筒上層a・b式土器を多量に、しかも文様構成の変化に富む資料を得ることができたことをあげることができよう。特に②については、たんに多くのモチーフによる文様構成の展開ということだけでなく、垂下する隆起で区画された口縁部の区画ごとに文様が変化するものや、口縁部文様ではなく胴部文様が変化するものなど、多く得ることができたことも成果といえよう。

### 遺跡における人間－植物関係について

付編「花粉分析および植物珪酸体分析」において冷水山根遺跡および寒沢II遺跡の古植生についての報告がなされている。ここではその分析結果をもとに寒沢II遺跡における人間と植物との関係について考えてみたい。

遺跡が火山灰性土壤に立地するため、試料中の花粉化石は分解・消失していた。そのため植物珪酸体分析により、遺跡の古植生の復元を試みた。試料1は後期中葉の土器(III層；土器75)内から、試料2は前期末～中期初頭の土器(IV層；土器119)内から得た土壤である。植物珪酸体分析によって明らかになったのは、①ネザサ節・クマザサ属を中心とするタケア科の多産、②それにともなうキビ族・ウシクサ族(ススキ属)・ヨシ属などの植物珪酸体の検出である。

自然状態(人為が加わらない状態)に発達する植生を極相というが、年間を通して湿潤な気候である日本列島における極相は森林である。極相林が何等かの要因(人為的な伐採・火事などを含む)によりその一部を欠いた時、日差しを受けたササ類・ススキ類など陽性の草本植物が短期間のうちに優占するようになる。

ササ類は耐陰性が強いため林床でも生育することができるが、林縁や疏開地のような明るい場所の方が生育がよい。したがって極相林が伐採された後の二次林の林床に優占することが多い。それに対し単独で草原を形成することが多いススキ類は耐陰性に乏しく、極相林の伐採後短期間に優占するものの、二次林の発達とともに絶滅する。つまり極相林に人為(伐採・火事

など）が加わり樹勢が衰えると林床のササ類が優占するようになるが、ススキ類が優占するためには火入れなど人為的に樹勢を抑えることが必須条件となる。つまりササ草原よりもススキ草原の方がより人為が加えられている状態といえるのである。

本遺跡のような火山灰性土壌の表層にはいわゆる「黒ボク土」が形成されるが、その腐植の起源はタケ亞科（ササ類）およびキビ亜科（ススキ類）を中心とするイネ科草本であるとされている。本遺跡採取試料の分析結果によると、試料1および試料2とともにタケ亞科（主としてメダケ属ネザサ節）およびキビ亜科（主としてウシクサ族ススキ属）が検出されている。しかしその植物珪酸体組成に着目すると、2試料間における明確な差異が認められる。つまり試料2の時期から試料1の時期にかけてキビ亜科が減少し、それにともないタケ亜科が増加していることである。これは試料2の時期から試料1の時期にいたる間、人間による植物への操作が減少していくことを示している。

本調査における土器の出土量は中期前葉において最大のピークを示し、後期中葉にむけて減少していく。また今回分析試料とした土壌は、出土した土器内から採取した土壌である。投棄された土器内に、どの程度の期間をおいて土壌が充填するかは推測の域をでない。しかし投棄された時期に若干遅れて土器内に土壌が充填するすれば、出土土器から推測される集落の人間活動の盛衰と植物珪酸体分析による植生遷移の過程はよく合致しているといえる。

#### 参考文献

- 矢野悟道ほか『日本の植生図鑑（II）人里・草原』、保育社、1983  
矢野悟道編『日本の植生－侵略と搅乱の生態学』、東海大学出版会、1988  
近藤謙三「プラント・オバールとその応用をめぐって」、歴史公論10（6）、1984  
近藤謙三・佐瀬 隆「植物珪酸体分析、その特性と応用」、第四紀研究25（1）、1986  
松井 健『土壤地理学序説』、築地書館、1988  
松井 健『土壤地理学特論』、築地書館、1989

## 付編 花粉分析および植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

1 今回、秋田県埋蔵文化財センターより花粉分析を実施して冷水山根遺跡・寒沢II遺跡周辺の古植生について検討することが当社に要望された。ただし分析の対象となる試料は、土性がいわゆる「黒ボク土」とよばれる土壤であるため、花粉化石が土壤中から良好に検出されないことが予想された。そこで再度協議の結果、花粉分析とともにこのような土壤でも比較的良好に残存する可能性が高い植物珪酸体の組成を明らかにすることにより、上記の目的に対応した。

### 2 分析方法と結果の表示法

#### (1) 花粉分析

花粉・胞子化石は、質重約10gの試料についてKOH処理、重液分離（ZnBr<sub>2</sub>：比重2.2）、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

#### (2) 植物珪酸体分析

試料約5gの土壤について過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（奥化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し乾燥させる。これを、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現するイネ科の植物珪酸体を近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。そのなかでイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体とよぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体とよぶ）を、同定・計数する。

結果は検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また各種類の出現傾向から生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基準として百分率で算出する。なお検出

個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料については組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めずに出現した種類を+で示す。

## 第1節 冷水山根遺跡

### 1 試料

試料は縄文時代中期後葉の住居跡（S I 0 1）の床面から採取された土壌（試料番号1）と、縄文晩期の土坑（SK 0 5）内で検出された伏甕に充填していた土壌（試料番号2）の2点である。試料の層相は、試料番号1が黒褐色砂質シルト、試料番号2が黒色砂混じり粘土質シルトであり、いわゆる「黒ボク土」とよばれる土壌である。2試料とも花粉・植物珪酸体両分析に使用した。

### 2 微化石の産状（第2表、図版1）

#### （1）花粉化石

花粉化石は2試料とも保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたりまた壊れている。また検出個体数・出現種類数ともに少ない。検出された種類は木本花粉4種類、草本花粉2種類、シダ類胞子の合計7種類である。

#### （2）植物珪酸体

イネ科植物起源の植物珪酸体は短細胞珪酸体が良好であるが、機動細胞珪酸体は表面に多くの小孔（溶食痕）が認められ不良である。とくにSK 0 5では機動細胞珪酸体の検出個数が少ない。

植物珪酸体組成はS I 0 1とSK 0 5ではほぼ同様の傾向を示す。クマザサ属やその他のタケ亞科が多産し、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族などをともなう。

### 3 縄文時代中期後葉・晩期の古植生について

分析を行った試料からは花粉化石がほとんど検出されなかった。試料採取地点が台地上に位置することから、好気的な堆積環境であったために花粉化石が分解・消失したものと考えられる。わずかに検出された花粉化石は当時本遺跡周辺に生育していた母植物に由来している可能性がある。ただし花粉化石の保存状態が悪いことから、群集組成は歪曲していると考えられる。したがって花粉分析の結果から本遺跡周辺の縄文時代中期後葉の古植生について検討することは不可能であった。

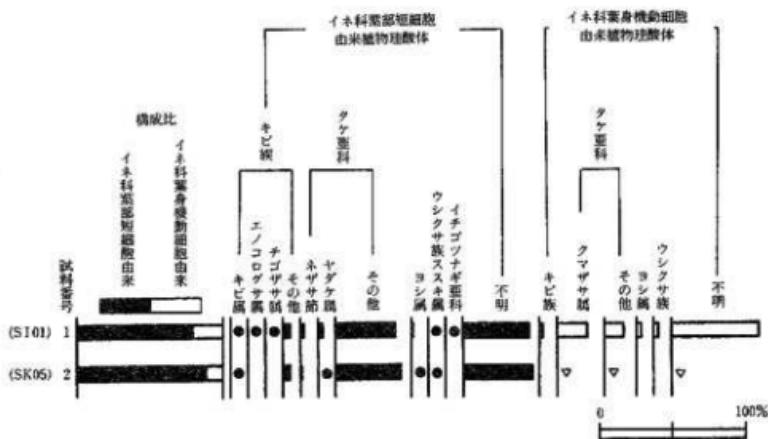
一方、植物珪酸体組成ではS I 0 1、SK 0 5の試料で多少異なるがほぼ同様である。これ

## 花粉分析結果

種類 (Taxa)	1 (S101)	2 (S106)
木本花粉		
サツグルミ属-クルミ属	-	2
クマシデ属-アサガホ属	1	-
ハンノキ属	-	1
コナラ属コナラ属属	-	1
草本花粉		
イギン科	1	1
ヨモギ属	1	1
シダ類孢子		
シダ類孢子	10	4
合計		
木本花粉	1	4
草本花粉	2	2
シダ類孢子	10	4
総花粉・孢子数	13	10

### 植物珪酸体分析結果

種類	Taxa	I(S101)	I(S105)
イネ科葉部短穀胞菌酸体			
キビ族キビ属		1	2
キビ族エノコログサ属		1	-
キビ族チゴザ属		1	-
キビ族(その他)		20	12
タケ亜科キサ属		7	3
タケ亜科ヤダケ属		12	2
タケ亜科(その他)		154	99
ヨシ属		8	1
ウシクサ属ススキ属		2	1
イチゴツナギ亜科(その他)		3	-
不明キビ型		84	33
不明ヒゲシバ型		38	23
不明ダンチク型		48	51
イネ科葉身橢圓胞菌酸体			
キビ属		2	-
タケ亜科クマザサ属		20	5
タケ亜科(その他)		13	4
ヨシ属		3	-
ウシクサ属		3	-
不明		59	21
合計			
イネ科葉部短穀胞菌酸体		379	227
イネ科葉身橢圓胞菌酸体		100	36
検出個数		479	257



## S101およびUSK05採取試料の植物種群体組成

出現率は、検出された短細胞壁颗粒、橢圓細胞壁颗粒とともにそれぞれの総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、△は橢圓細胞壁颗粒41100個体未満の検出を示す。

第2表 冷水山根遺跡 花粉および植物珪酸体分析結果

らの遺構が構築されたころの周辺にはクマザサ属などのタケ亜科が多く生育し、そのほかにキビ族、ウシクサ族も生育していた可能性がある。またこれらのイネ科植物は森林の林床のような場所にあまり生育せず、むしろ開けた場所に生育する種が多い。松井(1988)によると、火山灰を母材とする土壤の表層には黒ボク土が形成され、ササ類(ネザサ節など)・ウシクサ族(スキ属など)がその形成過程に大きな影響を持っていることが明らかにされつつある。このことから今回検出されたイネ科植物は台地上に生育し、黒ボク土の形成過程に關係していた可能性もある。ただしこれらの遺構が斜面部に位置するため、どのような過程で堆積したのか不明である。すなわち今回得られた植物珪酸体組成が遺構埋積時のイネ科植生を反映しているとは限らず、遺構埋積物の由来などについても留意しなければならない。

台地上の堆積物を対象にして花粉分析などを応用した古植生復原に関するこれまでの分析調査では充分に検討できた事例は少ない。今後は花粉化石などの微化石が比較的良好に保存される低地堆積物を対象として分析調査を行い、古植生に関する検討を行うことが望まれる。

## 第2節 寒沢II遺跡

### 1 試料

本遺跡の基本層序は、I層～VII層に分層されている。その中でIII層～V層は縄文時代遺物の主包含層である。これらの土層は出土遺物からおおよその時代時期が明らかである。

試料は、III層から採取された土壤(試料番号1)、IV層から採取された土壤(試料番号2)の2点である。試料1は縄文後期中葉の土器内、試料2は縄文時代前期末～中期初頭の土器内から採取した土壤である。試料の層相は、III層が黒色シルト(いわゆる黒ボク土)、IV層が褐色シルトである。採取された両試料の標高は80m前後である。

### 2 微化石の産状(第3表、図版2)

#### (1) 花粉分析

分析試料中からは、花粉化石・シゲ類胞子とも全く検出されなかった。

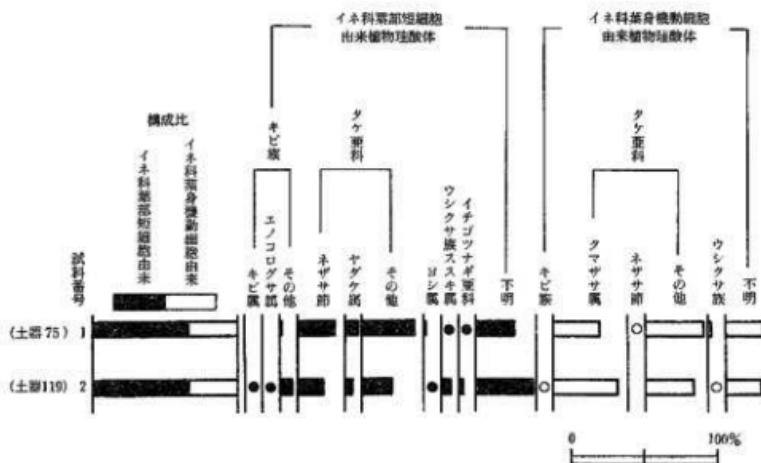
#### (2) 植物珪酸体

イネ科植物起源の植物珪酸体は、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とともに良好に検出される。

植物珪酸体組成は、III層とIV層ではほぼ同様の傾向を示す。主にクマザサ属・ネザサ節や他のタケ亜科が多産し、キビ族・ヨシ族・ウシクサ族などを伴う。

### 植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	1(Ⅲ層)	2(Ⅳ層)
イネ科葉部短細胞珪酸体		
キビ族キビ属	-	1
キビ族エノコログサ属	-	1
キビ族(その他)	3	18
タケアシ科ネザサ属	55	37
タケアシ科ヤダケ属	19	10
タケアシ科(その他)	77	43
ヨシ属	4	2
ウシクサ族ススキ属	1	13
イチゴツナギ属	2	6
不明キビ型	6	38
不明ヒグシバ型	2	-
不明ダンチク型	51	48
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
キビ族	-	1
タケアシ科クマザサ属	36	49
タケアシ科ネザサ属	1	-
タケアシ科(その他)	44	35
ウシクサ族	2	1
不明	28	25
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	220	217
イネ科葉身機動細胞珪酸体	111	111
検出個数	331	328
組織片		
キビ族短細胞列	-	1



土器75および土器119採取試料の植物珪酸体組成  
出現率は、検出された細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とともにそれぞれの検数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、△は機動細胞珪酸体が100個体未満の検出を示す。

第3表 寒沢II遺跡 植物珪酸体分析結果

### 3 縄文時代前期末・後期中葉の遺跡周辺の古植生

花粉分析を行った結果からは、花粉化石が全く検出されなかった。これは試料採取地点が丘陵地に位置することから、好気的な堆積環境であったために花粉化石が分解・消失したものと思われる。このため花粉分析の結果から本遺跡周辺の古植生について検討することは不可能であった。したがって、ここでは植物珪酸体の産状から本遺跡周辺のイネ科植物について検討する。

植物珪酸体組成は、試料番号1・2で多少の差異があるが、ほぼ同様と見られる。このことから縄文時代前期末・後期中葉には、クマザサ属・ネザサ節などのタケ亜科が多く生育し、その他のキビ族・ウシクサ族なども生育していた可能性がある。また、松井(1988)によると、火山灰を母材とする土壤の表層には黒ボク土が形成され、ササ類(ネザサ節など)・ウシクサ族(ススキ属など)が形成過程に大きな影響を持っていることが明らかにされつつある。このことから今回検出されたイネ科植物は当時丘陵地に生育し、土壤の形成過程に関係していた可能性がある。

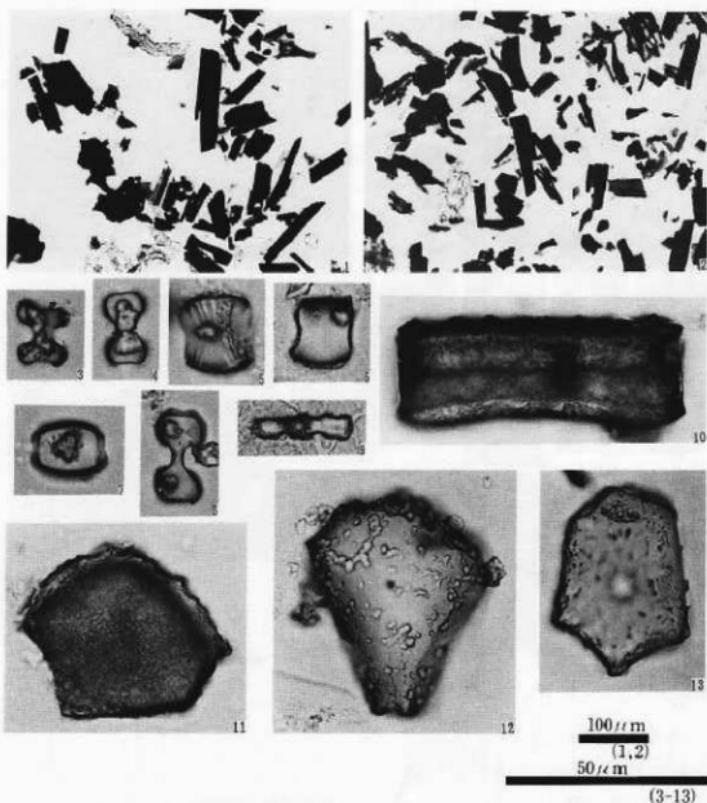
### 4 まとめ

前回、本遺跡に近接する冷水山根遺跡でも花粉分析と植物珪酸体分析を行い、縄文時代中期後葉～中期末の古植生について分析調査を行った(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。その結果では今回と同様に花粉化石の産状が悪く、充分に当時の古植生を検討することができなかつたが、植物珪酸体分析によるイネ科植生については今回の結果とほぼ同様であった。このことから縄文時代中期には、本遺跡付近の広い範囲でクマザサ属やネザサ節などのタケ亜科が生育していたと考えられる。

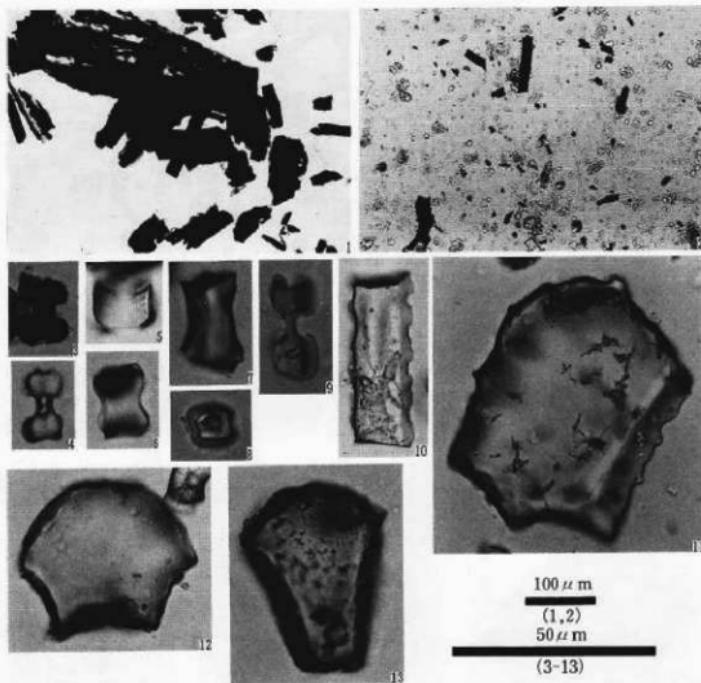
今後は花粉分析などの微化石が比較的良好に検出される低湿地堆積物を対象として本遺跡周辺の古植生に関する資料を得て、発掘調査成果に応用するべきと考える。

#### 引用文献

- 近藤鍊三・佐瀬 隆「植物珪酸体分析、その特性と応用」、第四紀研究25(1)、1986  
松井 健『土壤地理学序説』、筑地書館、1988



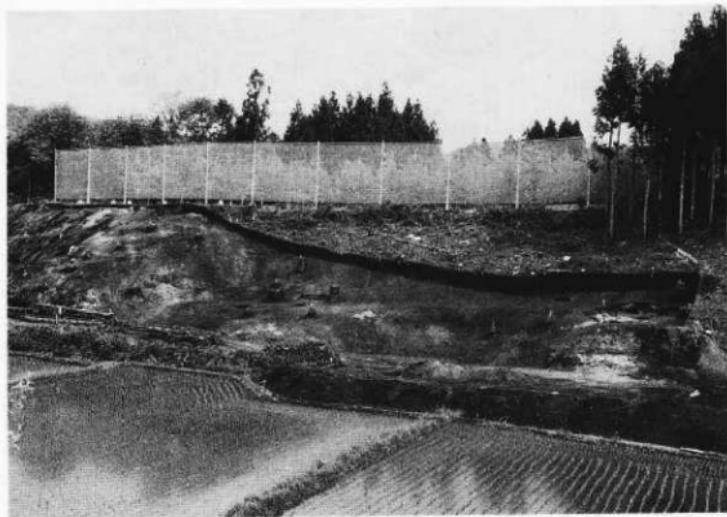
1. 状況写真（試料1）  
 3. キビ族短細胞珪酸体（試料1）  
 5. ネザサ属機動細胞珪酸体（試料1）  
 7. ヨシ属短細胞珪酸体（試料1）  
 9. イチヅツナギ亞科短細胞珪酸体（試料1）  
 11. クマザサ属機動細胞珪酸体（試料2）  
 13. ヨシ属機動細胞珪酸体（試料1）  
 2. 状況写真（試料2）  
 4. キビ族短細胞珪酸体（試料1）  
 6. タケ亜科短細胞珪酸体（試料2）  
 8. ススキ属機動細胞珪酸体（試料1）  
 10. キビ族機動細胞珪酸体（試料1）  
 12. タケ亜科機動細胞珪酸体（試料1）



- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 状況写真（試料 1）          | 2. 状況写真（試料 2）            |
| 3. キビ族短細胞珪酸体（試料 2）     | 4. エノコログサ属短細胞珪酸体（試料 2）   |
| 5. ネザサ節短細胞珪酸体（試料 1）    | 6. ヤダケ属短細胞珪酸体（試料 1）      |
| 7. タケ亞科短細胞珪酸体（試料 2）    | 8. ヨシ属短細胞珪酸体（試料 2）       |
| 9. ススキ属短細胞珪酸体（試料 2）    | 10. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体（試料 1） |
| 11. クマザサ属機動細胞珪酸体（試料 2） | 12. クマザサ属機動細胞珪酸体（試料 2）   |
| 13. タケ亞科機動細胞珪酸体（試料 1）  |                          |



冷水山根遺跡(伐採前) 近景 (南→)



冷水山根遺跡 完堀 (南→)



SI01堅穴住居跡（北東→）



SI01堅穴住居跡（北西→）



SI01堅穴住居跡 炉（南西→）



SKF05フラスコ状土坑 土器(12)出土状況（南→）



S110号穴住居跡（西→）



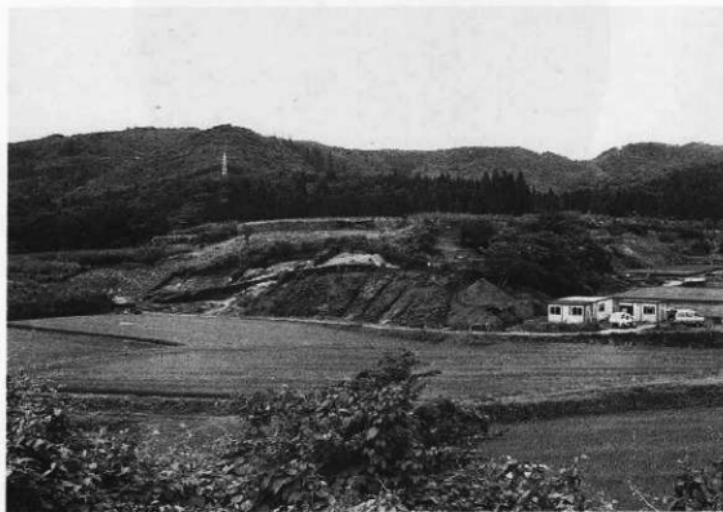
S110号穴住居跡 炉 半軸状況（南西→）



遺構內出土土器 (縮尺不同)



寒沢II遺跡 近景（南→）



寒沢II遺跡 完撮（南→）



SN01屋外炉（上方が南西方向）



「土器捨て場」状況



「土器捨て場」状況



146

造構外出土土器



234



247



245



249

造構外出土土器 (縮尺不同)



251

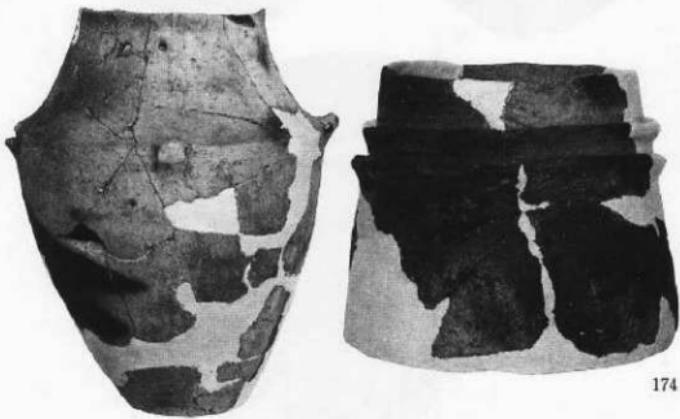


166

遺構外出土土器（縮尺不同）



55



62

174

造構外出土土器（縮尺不同）



70



75



76



255 (指跡の残る底部)

遺構外出土土器 (縮尺不同)